

廊	間	玉	伊	勢	樺	御	園
小	翠	鹽	竈	曙	漣	筑	波
薄	墨	入	相	普	賢	象	淺
常	盤					黃	有
							明

(特許局藏本による。「増補櫻に関する圖書解題略」三九参照)

花隠筆三十六櫻圖の世に残れるもの世に稀ならざるが、予の見たるものにては櫻品に多少の差異あり。例へば本山彦一氏所藏のもの(十八枚づゝ二幅となせるものにては、愛耶・開終・奈良都八重櫻ありて路頭・八重・廊間なし。又増田金太郎舊藏のもの(「浩然櫻譜」と同帖となり居れるものにして、「浩然櫻譜」は先年予の有に歸し、「花隠櫻譜」は南葵文庫に藏せられたり)にては、所載の櫻品は本山氏所藏のものと同じ。

「櫻花帖」を首め、前述の「櫻花圖譜」が何れも三十六櫻品を收めたるは何故なるや、花顛・露香・花隠が櫻花を寫生せるは決して、斯かる少數に止らざるは明なり。現に是等の畫帖・圖譜に現れたる三十六の櫻品が悉く一致せざるを見ても、更に多數の櫻が寫生されたるを知るべし。畢竟三十六櫻品は著しき實例として選めるものにして、當時に知られたる櫻の名種の全數に非ざるは明なり。以上花顛の「櫻花帖」並にこれに倣へる後世の作品に論及せるが、再び「櫻花帖」に戻つて要點

を擧げ以て本篇を終らんとす。

「櫻花帖」に就て吾人の知得たる所は左の如し。

- 一、一々の櫻品の特徴を畫面に現せること。
- 二、古雅なる描法によりて櫻の自然の姿勢と生態とを現すことに努めたること。
- 三、幹・枝を淡墨にて畫き、花に十分の彩色を施せること。
- 四、若葉の色と形の變化を分明に現はせること。

専門的方面より見れば「櫻花帖」は今より百餘年の昔に於ける著しき櫻品の特徴を示せる點に於て重要な參考資料となる。花顛の時代には松岡恕庵の「櫻品」汎く行はれたれども、挿圖簡單にして色彩なく、實物と對照するは容易ならず、然るに花顛に至りて始めて實地寫生によれる名櫻の彩色圖を作る爲これより直ちに櫻名を知得のみならず、畫法の妙にして櫻の美性を表現して遺憾なきを以て、人擧つて花顛の畫を稱するに至れり。而かも花顛がかく櫻畫の神髓を得たるゆゑんは、遠近に櫻の名所・名木を尋ね、寢食を忘れて寫生に努めたる努力の結果なるを知らざるべからず。

花顛一たび櫻畫の描法を示せる後、花隠・瑟瑟等其衣鉢を傳へたるのみならず、市橋星峰公の「花譜」・白河樂翁公の「浴恩園櫻譜」・屋代弘賢の「古今要覽稿」中の櫻譜を首め、坂本浩然の「長



者ケ丸櫻譜」を生じ、降つて明治年間の宮崎玉緒の櫻譜等の現るゝに至れり。是等の櫻譜は何れも櫻品の甄別に貢獻し、此方面の知識を進めたるものにして、遠く花顛の「櫻花帖」が淵源をなせるものと云ふべし。

参考圖書

- 大 田 覃 一話一言(新百家説林五、第二一九頁)
- 市橋長昭撰 花譜
- 三 好 學 市橋長昭撰花譜の解題並に其文獻的價值(東洋學藝雜誌 第三六卷第四五一及四五二號大正八年)
- 三 熊 露 香 倭花名品 醍醐寺藏
- 同 櫻 譜 喜藏院藏
- 屋 代 弘 賢 古今要覽稿(内閣文庫藏不忍文庫本)櫻之部
- 坂 本 浩 然 櫻花圖(家藏)
- 同 浩雪櫻譜一名長者ケ丸櫻譜(家藏)
- 廣 瀬 花 隱 六々櫻譜(複寫本 家藏)
- 櫻花展覽會出品目錄 奈良縣教育會 大正十一年
- 三 好 學 大正十一年の櫻の會(櫻第六號大正十二年)

(櫻第八號大正十五年)

江北櫻譜序

船津靜作君畫師をして江北堤上の櫻花を生寫せしむること茲に年あり。頃ろ描畫全くなり、集めて帖となし以て後世に傳へんとす。之を緋けば丹青の美絢爛目を奪ふ。抑も江北の櫻花は清水淡如翁の植ゑしめたる所にして、國華の粹を蒐めたるもの、宜なり其名の海の内外に喧傳せる。船津君は溫厚の長者資性最も櫻を愛し、堤上櫻樹の保護到らざるなし、同樹の今日ある一に君の功によれり。予嘗て同地の櫻花を檢せるや君に負ふ所甚大なり。今や此帖を閱し益々君が櫻品顯揚の志の厚さを感じり依て茲に一言を題す。(櫻第四號大正一〇年)

花隱櫻譜序

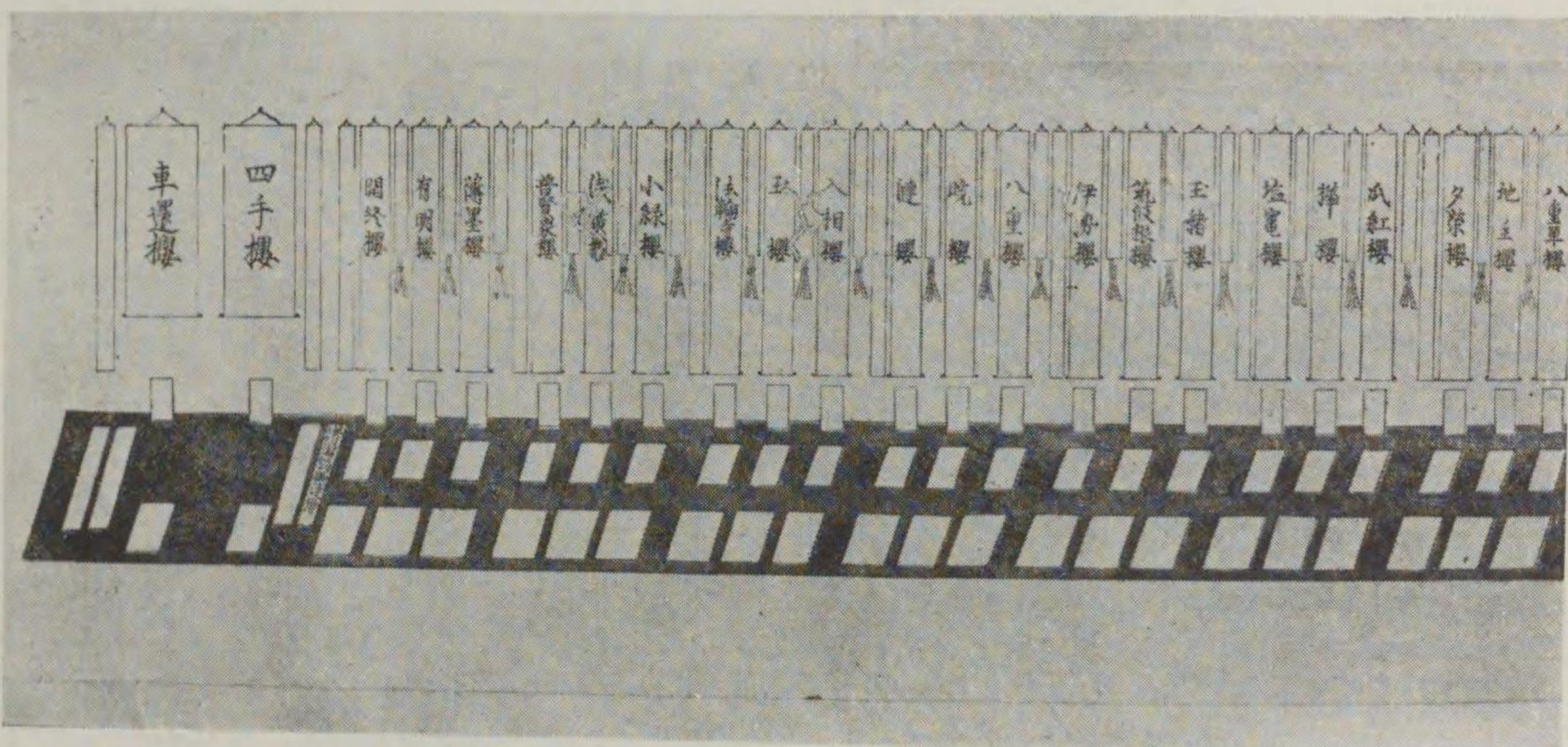
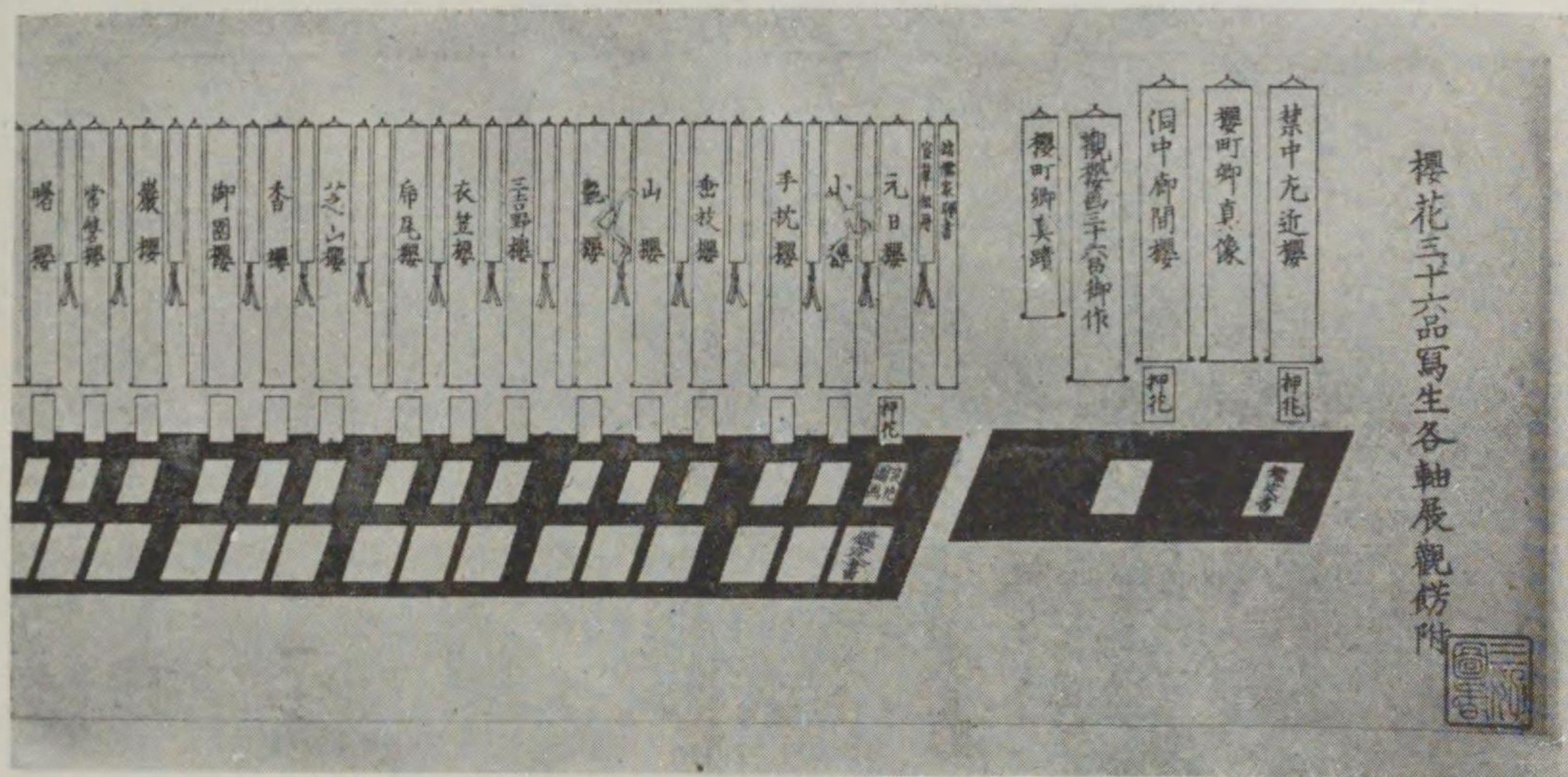
寛政の頃京師に櫻の畫を能せるもの三熊花顛あり。花顛の畫古雅愛すべし。當時江戸に櫻井雪鮮あり又櫻畫に巧なり、描法精緻古今の名手たり。文政天保の間三好汝圭・坂本浩然共に櫻花を描き、而して浩然の畫筆意の妙を以て世に知らる。此頃又廣瀬花隱あり。能く花顛の描法を學び、其櫻畫



一種の氣韻あり。茲に文政の頃江戸青山權田原に種樹家増田繁亭と云ふ者あり。通稱金太郎、多く草木の奇品を作り、其著す所草木奇品家雅見は稀世の良書なり。繁亭汎く當時の畫家文人と交り、常に來往せり。嘗て浩然に囑して櫻花百三十六品を描寫せしめ、又花隱をして別に三十六品を畫がかしむ。畫成りて一々俳家の句を挿み、以て櫻花帖となせり。蓋浩然の畫けるものは當時青山長者ケ丸の久保櫻顛の櫻園にありし品種の生寫にかゝり、又花隱の畫けるものは都鄙の名花にして、共に我邦の櫻譜として世に傳ふべきものに屬す。繁亭歿後、帖は轉々他人の有に歸せるが、昨年夏、帖中浩然の畫は故ありて予の有となり、又花隱の畫は予之を南葵文庫に勧め、遂に其藏する所となれり。是即此帖なり。予は此の如き貴重なる墨跡が文庫に保存せらるゝを喜び、聊此帖の來歴を記し、帖に題して花隱櫻譜と云ふ。(櫻第四號大正一〇年)

### 三十六櫻品の寫生圖譜に就て

櫻の知識の最初の普及と見るべきものは寶曆年出版の松岡恕庵の「櫻品」で、俳人芦田鈍永が通俗文にして一般讀者の便を圖つたこと、又一々圖畫を挿入し、櫻に關する故事傳説を加へて趣味感興を惹起すに努めた點で著しい。



櫻花三十六品寫生各軸展觀榜附



安永天明寛政に亘つて三熊花顛は繪畫の上から優れた櫻品を世に紹介し、又「吉野菜」(寛政十三年出版)を著して本邦第一の櫻の名所としての吉野山觀花の手引となし、又櫻の保存に就ても已に此時代に於て注意を拂つたことが認められる。

花顛の妹露香も亦兄の筆意を承けて名櫻の寫生に努め、又花顛の門人廣瀬花隱、露香の門人織田瑟々も共に櫻品の作圖に餘日がなかつた。

茲に花顛露香花隱の櫻畫を見るに、其圖譜に纏めたものは何れも三十六櫻品に限られ、花隱の畫がいたものには「六々櫻譜」と題したものさへある。斯様に多數の櫻品中から僅に三十六を選んだのは、一は繁雜を避け單に代表的優品を擧げたのと、一は又各地の櫻の名木として當時知られたものを載せたのである。尤も三十六櫻品の選擇は是等の畫家に於て總べて一致してはゐない。同一人の畫いた櫻花圖譜に於ても多少異なつてゐるのは、多數の寫生粉本から便宜選んだからであらう。

花顛や露香の櫻花圖譜の今日に遺存するものは稀であるが、花隱の櫻圖は頗る多い。同人は櫻ばかり畫き、又三十六櫻品を世に示す爲に努力した。家藏の櫻に關する圖書中に「櫻花三十六品寫生各軸展觀飾附」と題する摺物がある。筆者の名や年代は擧げてないが、其内容から見ると、これは花隱の櫻花圖幅を展覽させたもので、場所は京都、時代は文化文政頃と思はれる。此摺物は當日の催しの頒物で、三十六櫻品寫生圖幅の下に其押花(實物標本)と變化圖畫等を添へたことから見て







名花十二種

- |       |        |       |       |
|-------|--------|-------|-------|
| 芳野山   | 仁和寺    | 清水寺   | 洛東    |
| 千本の花  | 御室の花   | 地主の花  | 祇園の花  |
| 同     | 六田の花   | 東山    | 西山    |
| 故郷の花  | 嵐山     | 高臺寺の花 | 小鹽山の花 |
| 同     | ふもとのはな | 同     | 北山    |
| 西行庵の花 | みねのはな  | 花頂山の花 | 遅櫻    |

又これと別に奉書紙包（竪八寸、横三寸二分）の表に

名所櫻

和州様

甲州より

と認め、内に次の如き文字が記されてある。

松 甲斐守様より被進候和州吉野山押花拾包甚難得由大切可致事

以下押花包の内容に就て調べたところを記す。花の名の下に記した細字は自分の書入れたものである。

(一) 墨流紙包 十九箇

包紙は竪五寸、横二寸五分、墨流の雲形模様は上部は青色、下部は薄鼠色で、舊幕時代に多く用ひられたものである。

- |         |               |              |                             |
|---------|---------------|--------------|-----------------------------|
| 六田の花    | 山櫻、中輪。        | 近衛殿糸櫻        | (内容なし)。                     |
| 洛東祇園の花  | 八重、中輪。        | 仁和寺御室の櫻      | 八重、花徑三仙米。                   |
| 御廣庭あけぼの | 一重、大輪、花梗三・五仙米 | 東山高臺寺の櫻      | 八重、重薄し、大輪、花徑四仙米。            |
| 御廣庭江戶   | 六七瓣、中輪。       | 東山花頂山の花      | 一重、花瓣長楕圓形、花徑三・五仙米           |
| 御廣庭桐かやつ | 八重、中輪。        | 西山小鹽頂のはな     | 五瓣、花瓣細長中輪。                  |
| 御廣庭の櫻難波 | 五瓣、花徑三・三仙米    | 吉野山千本の花      | 山櫻、小輪。                      |
| 御廣庭車かへし | 花徑四仙米。        | 吉野山故郷の花      | 山櫻、小輪。                      |
| 御廣庭草香山  | (内容なし)。       | 吉野山西行庵なとりのはな | 山櫻、小輪。                      |
| 御廣庭さかて  | 一重、花徑三・五仙米。   | 北山遅櫻         | 極小輪、花徑一・八仙米、花瓣細長、長七密米、幅四密米。 |
| 南殿階下左近櫻 | 一重、小輪。        |              |                             |

(二) 色紙包 五十一箇の中、櫻三十一箇

- |             |                   |               |               |
|-------------|-------------------|---------------|---------------|
| 常の御殿御庭の櫻    | 里櫻、一重、花瓣圓形、花徑三仙米。 | 紫宸殿南の方御庭のさくら  | 八重、花徑三仙米。     |
| 常の御殿あけぼのさくら | 里櫻、八重、花徑三・五仙米。    | ししんでん南の御庭のさくら | 里櫻、八重、花徑五仙米餘。 |
| 小御所御庭のさくら   | 里櫻、花瓣圓形、花徑三・五仙米。  | 紫宸殿西の御庭の櫻     | 里櫻、八重、花徑三仙米。  |



清涼殿南の御庭西の方のさくら

里櫻、一重、大輪、花瓣圓形、花徑四仙米。

仙洞御庭のさくら

里櫻、六瓣、又は七瓣、花徑三五仙米。

修學じ御茶屋御庭の櫻

里櫻、八重、花徑三・五仙米。

大佛の宮御庭ざくら

里櫻、八重、花徑四仙米。

大佛ざくら

里櫻、八重、花徑三・七仙米。

ちおん院淺黃櫻

里櫻、八重、花徑三・五仙米。黄色は消えた。

智恩院さくら

里櫻、一重、極大輪、花徑四・五仙米。

東山りやうぜんざくら

山櫻、一重、花徑三仙米。

東山長樂寺ざくら

里櫻、重ねが薄い。花徑四仙米。

東山そうりんじ西行庵の西行櫻

一重、山櫻、花徑二・五仙米。

東山のひがんざくら

一重、花瓣圓形、花徑二仙米。

東山丸やまざくら

里櫻、八重、花徑三・五仙米。

高臺寺のうばざくら

里櫻、花徑三仙米、一重と八重。車返櫻と思はれる。

(二)の五十一箇の中「伏見桃山の花」は櫻でなく桃である。(二)の櫻以外の押花、(梅十六、桃二、山吹二)の解説は茲に略する。

(三) 白紙包 九箇

ちもとの花 山櫻、花徑二仙米。

千本の櫻 山櫻、小輪、花徑、仙米。

雲井の花 山櫻、花徑一・五仙米。

瀧ざくら 山櫻、花徑二五仙米。

關屋のさくら 山櫻、花瓣橢圓形、花徑二仙米。

以上概ね吉野の山櫻である。

(七) 花 扇

これは長三寸四分、幅五寸九分の薄茶色の雁皮紙包で、「山城花あふき 黒谷の楓」と記してある。花扇は里櫻の花瓣を扇形に並べて紙に貼付けたものである。花瓣は圓形、長さ幅共に一・五仙米で、横に五列に並んでゐて、第一列(最上列)は花瓣が十三枚、第二列は十一枚、第三列は九枚、第四列は七枚、第五列(最下列)は五枚である。最下列には三本の花梗が扇の骨のやうに並んで、上部には萼が着てゐる。花梗長一仙米、萼筒七密米、幅四密米である。

黒谷の楓ははうちはかへでの葉で 十一裂になつてゐる。

(二)の中の梅も禁中をはじめ、公卿の邸内、寺院の名木の花を押したもので、この中には勅銘の

千本ふまどうふげんさうざくら

里櫻、花瓣約十五枚、花徑四仙米。これは眞の普賢象でない。

銀閣寺のさくら

里櫻、一重、大輪、花徑四・五仙米。花瓣圓形、長幅共二・二仙米、前記の清涼殿御庭西の方のさくら並に智恩院の櫻に似てゐる。

清水じしゆごんげんの櫻

山櫻、花瓣細長、花徑二仙米。

おむろのさくら

里櫻、一重、大輪、花瓣廣く大きい。花徑三・五仙米。

清水のさくら

里櫻、八重、約十瓣、花徑三仙米。

白河の千本の櫻

里櫻、八重、花徑三仙米。

嵯峨嵐山ざくら

山櫻、一重、花徑二・八仙米。花瓣長一・五密米、幅一仙米。

しやうぐう地藏の櫻

里櫻、九重、花徑二・五仙米。

安井の櫻

里櫻、八重、約十瓣、花徑三仙米。

よし田のさくら

里櫻、八重、中輪、花徑二・五仙米。

醍醐三寶院庭ざくら

一重、花徑二・五仙米。

宇治平等院のさくら

里櫻、一重、花瓣廣く大きい、花徑三・五仙米。

袖振山の櫻

山櫻、橢圓形、花徑二仙米。

布引の櫻

山櫻、花徑一・八仙米、花瓣長一・三、幅〇・八仙米。

子守神社前の櫻

山櫻、花瓣圓形、花徑二仙米。

鹽がまざくら

一重、花徑、三仙米、花瓣長一・三密米、幅一仙米。



ものがある。紅梅の押花は紅色が残つてゐて、それと知られる。

又外に「常州浮洲さるをがせ」と記してある標本はさるをがせではなくあきなごけ *Ranalisma farinacea* L. Ach. に屬するものと思はれる。

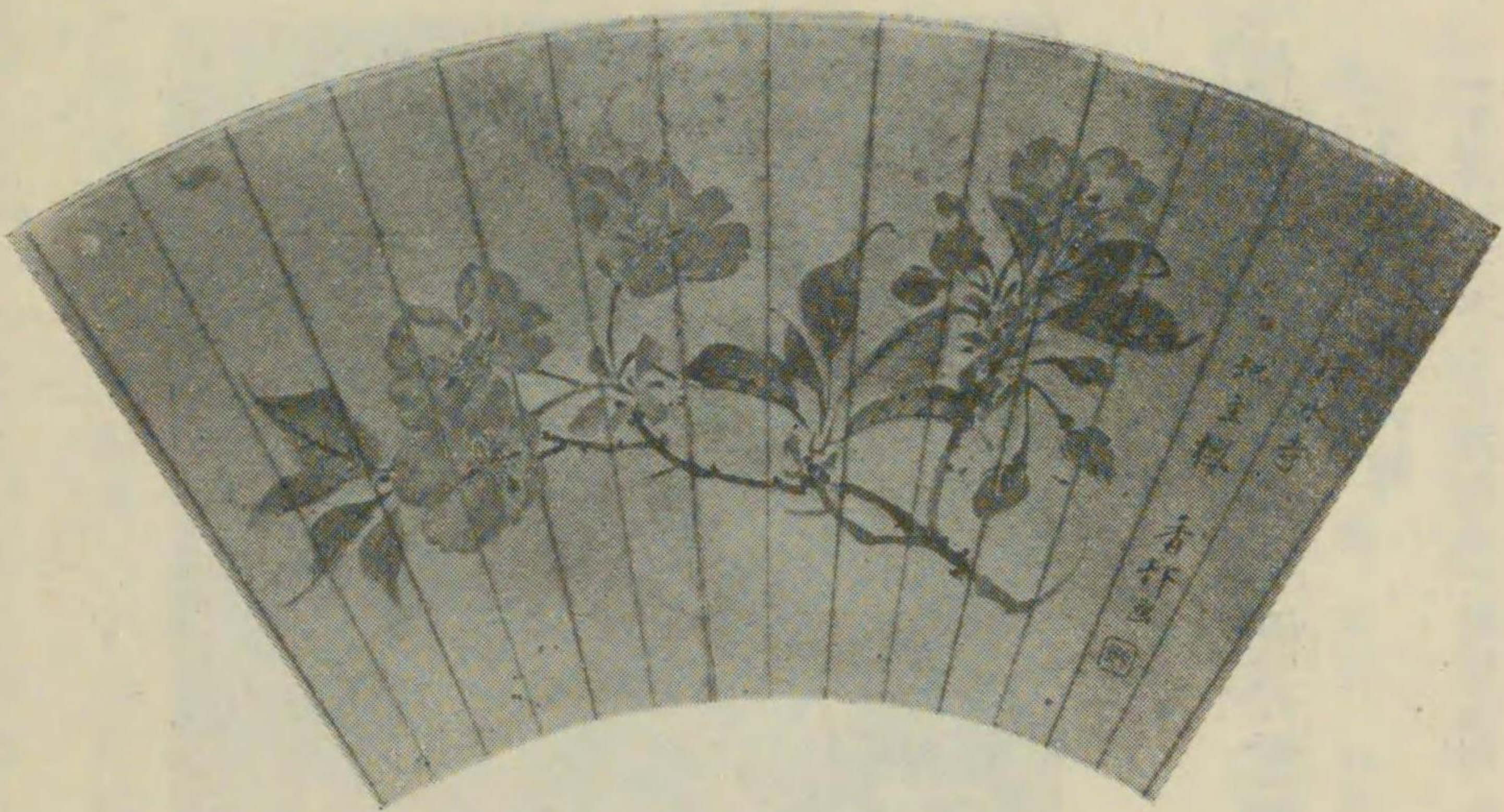
この押花集は包紙・筆蹟・文句などすべて優れてゐるところから見ると、舊幕時代の大名か公卿などの作つたものらしい。禁中の名花がこの中に收められてゐることでも、それと知られる。何れにしてもこの押花集は自分の是迄見たものゝ中での優品である。徒らな好事家の慰みと見ることもなく、前に述べた如く櫻その他の名木考證の資料として保存すべきものと思ふ。(櫻第一〇號昭和三年)

### 地主櫻考

昔の名櫻の中に地主櫻がある。京都清水寺の地主權現にあつたから此名が付いた。謠曲にも出てゐて人の知る所である。此櫻花の記載は舊時の圖書に散見し、又その寫生圖も今日に傳はつてゐるが、花の特徴が從來の文獻に於て一致してゐないから、此點に就て自分は常に疑を抱いてゐた。

大正十一年四月二十一日京都へ往つた時、地主權現で地主櫻と言はれてゐるものを見た。此櫻のある處は石壁の高地で、社殿の横の玉垣に植はつてゐる。櫻は一重、白色、中輪の山櫻性の老樹で、

幹や枝に枯損部があつた。



坂本浩然筆地主櫻の扇面

右の現存の櫻は昔からのものでなく、後世に植ゑたものであることは「古今要覽稿」地主櫻の記事中に「……惜哉清水寺の本木は枯失してその種をのこさず」とあるを見てもわかる。地主櫻の記事を舊時の圖書の中から左に抄録する。

「櫻品」 松岡玄達 甘雨亭叢書本 正徳

地主櫻 東山清水寺の内北の方の上あり石階を経てのぼる地主權現の社あり玉垣の内外に五六株の櫻あり伊勢櫻桐谷など皆八重の櫻なり云々。

「古今要覽稿」 屋代弘賢 文政頃

地主櫻 六々櫻種類曰大輪單の白花にして蒼微紅をおぶ長徑一苞二筋なり洛東清水寺の諸櫻をさしてすべて名付たりといへども此花その群に秀たるにより豊大閣別種の名を下し給ふなり同種は高臺寺中移しうゑさせ給ふなり今塔頭同眞院の前栽に二株現せり惜哉清水寺の本木は枯失してその種をのこさず。

草木奇品鏡 増田金太郎 文政 (櫻番附)

地主櫻 やゑ中りん色よく重あつししべの中より青葉二枚出る。

「櫻花記」 畔田伴存 天保

地主櫻考



地主櫻 花壇大全曰ぢしゆ色有大見くゝりてさがる事也普賢象の八重の如し中りんかさねあつく色よし花の心より普賢象の如く青葉二枚出づ。



長者ケ丸櫻譜に載せられたる地主櫻の圖も同様である。

「本草要正」 泉本儀左衛門 文政

洛東清水寺地主櫻 二種

葉青赤黄單瓣圓にして瓣潤し櫻色薄く大輪にして狂ひあり一寸七八分花徑短し。

「花壇綱目」(延寶)・「活所櫻譜」(正徳)・

「和漢三才圖會」(正徳)・「櫻品」(鈍永本、寶曆)には地主櫻の記事がない。

次に地主櫻の寫生圖は左記の櫻花圖譜又は櫻の畫にある。茲にその花の特徴を記す。

「花譜」 市橋長昭撰 櫻井雪鮮畫 文化

赤芽、一重白花大輪。

「花譜」を本として作つた堀良山序「双譜」の地主櫻の圖も同様である。

「六々櫻譜」 廣瀬花隱 文政

茶芽、一重、白花、大輪。

「花隱櫻譜」 廣瀬花隱 文政

地主櫻二種と記し、一重、白花、大輪に描いてある。

「浴恩園櫻譜」 白河樂翁撰 文政

八重、中輪、白花、瓣端紅色。

「櫻花圖」 屋代弘賢撰 三好汝圭畫 文政頃

淡紅花、重ね厚く、長花梗。

「長者ケ丸櫻譜」 坂本浩雪 天保

赤芽、八重、大輪、紅花と白花とを描いてある。

「櫻花寫生」 坂本浩雪 天保

黄綠芽、一重、白花、大輪。

「地主櫻圖」 坂本浩雪 (扇面)

一重、白花、中輪。

此他大正十一年四月二十二日岐阜の櫻の會の折に自分の見た廣瀬花隱筆地主櫻の畫幅(郷勝次郎氏藏)の圖も一重白大輪に描かれてゐた。

舊幕府時代の千代紙(竪一尺一寸、横一尺五寸五分)に各所の草木の花又は葉を描いたものがあ



る(家藏)。その中の地主櫻の圖は八重、大輪、白花で、花瓣の先が赤い。

三熊花顛の「櫻花帖」には地主櫻の圖がないが、露香の描いた「倭花名品(醍醐寺藏)」には此櫻の一重、白花の圖が出てゐる。露香筆の同様の櫻花帖で吉野喜藏院に藏せられてゐるものには地主櫻の圖がない。

尙舊幕時代の押花集の中にも往々地主櫻の花の標本が見出される。その一例は丸山源八氏藏「押花集」(別稿參照)で、その中にある地主櫻の押花は一重小輪の山櫻である。又家藏「名所の草木腊葉集」(白井光太郎氏寄贈)の中にも此櫻の押花があるが、これは一重大輪の山櫻のやうに見える。

前述の考證によると、地主櫻の花形と花色は種々であるが、約そ一重白花又は微紅を帯びた花とするものと、八重、紅花又は白花とするものとの二つになつてゐる。「花譜」・「倭花名品」・「六々櫻譜」・「花隱櫻譜」の地主櫻の圖は皆一重、白花に描かれ、「浴恩園櫻譜」の圖は八重、白花微紅を帯びてゐる。坂本浩雪の描いた「櫻花寫生」には一重、白花であるが、「長者ヶ丸櫻譜」の方は八重、紅花と白花である又、屋代弘賢の「櫻花圖」には八重微紅花となつてゐる。

「古今要覽稿」に「六々櫻種類曰大輪單の白花にして」とあるは前記の露香畫「倭花名品」、花隱畫「六々櫻譜」に描寫されたものである。六々櫻種の原は花顛の「櫻花帖」に三十六の名櫻を載せたのに起る。露香・花隱等の描いたものはその櫻品に互に多少の差異はあるが、何れも三十六品で

ある。それで是等を六々櫻種といふ。六々櫻種の圖譜には地主櫻は一重白花に描かれてゐるやうに見えるが、併し花隱の「六々櫻譜」には地主櫻二種と記した所を以て見ると、此頃已に此櫻が單純でなかつたことがわかる。

地主櫻の記載は前に挙げたやうに文政・天保頃の文獻には八重紅花、花心から小葉が出て、花梗が長く恰も普賢象の如しとしたものが少くないが、文久年間に著した「本草要正」に一重微紅花とあるは注目に價する。又前述の「押花集」のものも一重の花である。

斯く地主櫻が後世混雜して來たのは「古今要覽稿」に記された通り、此櫻の原木が枯失せた爲であらう。若し六々櫻品を描いた前記の櫻譜の圖が此原木又はこれと同種の花を寫生したものとすれば、地主櫻は一重大輪白花帯微紅のものと解される。随つて此櫻を八重、紅花としたものは正しくないことになる。

今日地主權現の地主櫻と言はれるものは如何なる來歴のものか不明であるが、その花性が立派でない所から見ると、昔有名であつた地主櫻の系統ではないやうに考へられる。何れにしても昔の地主櫻はこゝには遺つてゐないと思ふ。(櫻第一〇號昭和三年)



### 浴恩園の櫻に就いて

浴恩園の櫻とは白川樂翁公の江戸の別業浴恩園（今日の築地海軍水路部用地）に植ゑられた多數の優れた品種である。

樂翁公が文學に大なる趣味を有つて居られたことは云ふまでもないが、又一面園藝上にも趣味が深く、殊に日本の名花たる櫻を集め、その他の美しい花卉の培養に努められたことは、今日樂翁公の後裔松平定晴子所藏の浴恩園並に春秋園等の花卉の圖譜によつて明かである。

明治四十四年九月二十八日、戸川殘花翁の紹介に依つて、當時湯島梅園町に在つた松平子爵家に行つて、右の圖譜の觀覽を乞うた。子爵家では快よくその圖譜を示されて、一々調べたが、何れも園藝上・植物學上多大の參考となるものであつた。又昨年五月再び大塚の松平子爵家で、是等の圖譜を觀る機會を得て、その内容を詳細に調べることが出來た。依つてこゝに子爵家の好意を鳴謝する。

今茲では單に櫻譜のみを記載しよう。

浴恩園の櫻の圖譜は「はなのかゝみ」と題して二卷ある。その種名は次の如くである。

#### はなのかゝみ 一の卷

いせの不斷櫻	よしのゝ奥山櫻 <small>のたね</small>	ませ櫻	白川小峯櫻
多武峰櫻	なりみねよしのゝ櫻		松尾櫻
大和さらさ桃	延命櫻		春龍山
春の王	駒止	菊さくら	奈良
嵐山	車かへし		時雨亭さくら
三井寺	右衛門櫻	さか泰山府君	
薄墨櫻	三笠山櫻	王照君	
白妙	地主	うす櫻	
薩州緋櫻	曉櫻	對州櫻	
幡櫻	三輪のさくら		
鞍馬櫻	如意越 <small>如意寺</small>	南殿御橋	
渡り山	小しほ	長谷	
くれは	鳳來寺	岩石	
藥園王	都櫻		
	普賢堂		

#### はなのかゝみ 二の卷

浴恩園の櫻に就いて



櫻の文獻

舞鶴	一葉櫻	して櫻肥後	蘭麝さくら
牧西櫻 <small>高崎</small>	あか芽	遊仙櫻	淺黃櫻
大挑灯	駒つなぎ	熊谷蓮生寺櫻	大膳櫻
絹さくら	本願寺	尾上櫻	普賢象
あけほの	垂枝八重	楊貴妃	遅さくら
帆掛	普賢象	殘雪	さゝなみ
くらま遅櫻	しほかま	有明	玉はゝき
あやさくら	淺黃櫻 <small>願摩寺</small>	八重にほひ櫻	ひよ鳥
庄司	雲のそで	二重さくら	筑前住吉櫻
奈良八重さくら	菊南殿	兒櫻	伊勢櫻
泰山府君 <small>八重櫻</small>	江戸櫻	大江戸櫻	王子白櫻
うはさくら	八重一重	黄ちりめん	法輪寺
白舞	松月	しほかまさくら <small>奥州より來</small>	一重あさき
香花櫻	紅普賢	壽星さくら	白雲峯
大鵬	藥の園	寒山大木	曙櫻
壬生平野淺黃櫻	醉楊妃	金王	名古屋黃櫻
隅田川匂ひ櫻	鞍馬遅櫻		

三七〇

總計 一二〇

此中重複のもの、櫻に非ざるものがある。又此外に無名の圖四ある。

櫻花は細密に描かれ、美術的に見える。一々品種の特徴はよく表はれてゐる。大抵二三の花を描いたのみで、他の櫻譜の如く一の枝を大きく表はしたものは少い。筆者の名は出てゐないが、恐らく文晁又は其の門人に依つて描かれたものであらう。

櫻の品種には一々名が附いてゐる。是等の櫻は固より實物の寫生で、何れも浴恩園に培養されたものである。櫻のあつた場所は別に浴恩園の圖に出てゐる。

「はなのかゝみ」の第二卷には樂翁公自筆の跋がある。「文政五年やよひ二十九日花月翁しるす」としてある。此跋によると、樂翁公が浴恩園や春秋園の梅・桃・櫻の花を寫生させて常時の展覽に供されたことが分る。後世から見ると、幸に斯かる圖譜が作られ爲に、昔の時代に於ける櫻その他優れた品種を知ることが出来るので、樂翁公は此點に於て學界に裨益を與へられたことになる。

右の跋には尙園外の花卉で實生から仕立たものは、花の色など元木と違つてゐることが述べられてゐる。是れは實際其通りで、昔の時代に培養した櫻・梅などの名木は多くは實生によつたから隨つて親木と違つたものになつたであらう。斯様な實生にも矢張親木と同じ名が附いてゐた爲、後世から見ると一つの品種に同時に多數の變り物があつたことになる。昔の櫻譜には斯かる變り物が多く描かれてゐる。樂翁公も實生による變異に就て夙に注意されたことと思ふ。

浴恩園の櫻に就いて

三七一



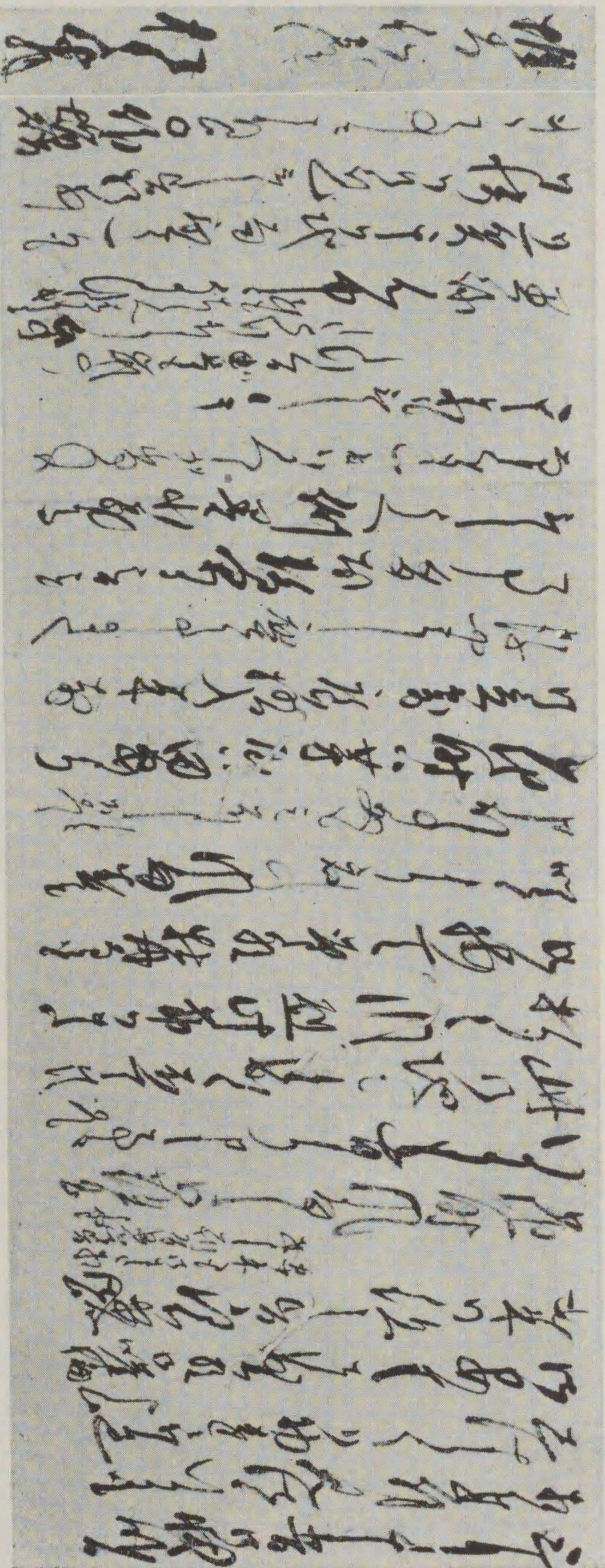
樂翁公が櫻その他の花木のそれぞれの品種に就て仔細に觀察されたことは跋文の左の一節で明である。

「花はあなしけれとかほりの深き淺きことあり畫にかきて一やうにみゆるもいさゝかの色たかひしもありまた枝のさまより花のつきさま實の結ふさまあるひは咲ちりの遅速にてその名もたかへれとか」

浴恩園の櫻が如何に園藝上、植物學上大切なものであつたかは其の圖譜に依つて想像されるが、併し當時は珍らしい櫻品を集植することは容易ではなかつた。唯有力なる諸侯にして始めて出來たのである。

樂翁公は嘗に名花を集められたのみならず、之が圖譜を作らしめて置かれたことが、今日の學問上の貢獻となる點である。浴恩園の櫻は後世に如何やうになつたか判らないが、或は火災にかゝり又は園の荒廢に依つて無くなつたものもあらう。併しその或るものは他所の庭園に移されて保存せられたかと思ふ。

樂翁公の花卉に對する愛觀は其自筆又は畫師の寫生にかゝる櫻其他の圖譜を見てもわかるが、平素多事であり又花期風雨に妨げられて觀花の享樂を空しくされた述懐は茲に掲げた公の手簡でも知られる。



白河樂翁公消息

三月十五日御狀昨日相

達拜見仕候いかにもしは

らく御物遠に打過申候御

安全奉賀候(中略)花時

風雨之御歎息いかにも古

より申事に御座候此御地

もどかく不天氣折々風烈

此節はまた如梅天御座候

牡丹なども咲候より度々

の風雨盛と申ほどの處も

み不申ほどに御座候花時

は茅屋は田安より御立寄

廣橋入來前後やみ申候塵

事また事多故靜閑にみる

こと無之うへ例墨永飛鳥

なとを一度は見しか當

年は其義も無之候キ

とひくるは是も風のた

くひなり心の花もちぢら

んはかりに

愚詠心中にかひ候キ御

一笑(下略)

二月廿四日 松平樂翁

堀大和守様

堀大和守は信州飯田城主(

萬石)なり



樂翁公の外に櫻品を集めた大名の中には文化の頃の市橋下總守（長昭、星峰と號す）がある。星峰侯は其の集められた櫻の立派な圖譜を編纂されて後世に傳へた。即ち今日圖書寮に藏せられてゐる「花譜」で、櫻の文獻として最も貴重なるものである。

大名以外に櫻に興味を有して植栽した者には天保の頃青山長者ケ丸に久保帶刀があつた。此人は櫻顛と號し櫻の園を造つて、各地の名櫻を栽培した。此の櫻園の櫻百三十六品種は當時坂本浩然が悉く寫生して「長者ケ丸櫻譜」として後世に遺した。

「花のかゝみ」は松平家の舊藩臣小澤圭次郎氏が明治十七年に狩野良信に摹寫させた。これは現に帝國圖書館の所藏である。家藏の「浴恩園櫻譜」は此本の複寫である。

（櫻第一一號昭和四年）

## 勅銘の櫻に就て

昔から 後水尾天皇勅銘の櫻として知られたものが京都其他にあつた。是等の櫻に就ては文政年間廣瀬花隱が畫がいた三十六櫻品圖譜中家藏の「花隱櫻譜」に左記の七櫻が擧げてある。

勅銘 常

磐

勢州白子浦觀音寺

勅銘の櫻に就て



同	玉	三種	城州醍醐櫻の坊
同	曙	三種	洛鞍馬口閑臥庵
同	御	二種	南都興福寺
同	曉	四種	洞中
同	法輪寺		洛西嵯峨法輪寺
同	三吉野	四種	禁中

右の中常磐は白子不斷櫻で、寶曆五年出版の「繪本櫻狩」には此櫻の圖と俳句とが載せられ、又「伊勢參宮名所圖繪」其他の圖書にも圖説されてゐる。花は白く一重で美しくはないが、先年調査した所では季節によつて花の大きさ、花梗の長さが違ふ。冬も落葉せず、雪の下に青葉が見えるから常磐の名がついた。大正十二年三月天然紀念物として指定された。

玉は醍醐寺の名櫻で、寛政頃著名であつたと見え、同寺所藏の三熊露香筆「倭花名品」に此櫻の寫生圖がある。茶芽一重白花、瓣端淡紅、蕾は紅色である。

三熊露香筆「櫻花藪」の清國人錢宇文の跋には此醍醐の玉櫻の由來を舉げ花性を讚美してゐる。

尙此櫻は花隱筆「六々櫻譜」(特許局所藏)、坂本浩然筆「櫻花寫生」其他宮崎玉緒の櫻畫などにも寫生圖があるが、何れも前に舉げた「花隱櫻譜」と同様に畫がゝれてゐる。

曙は去る大正十年四月二十一日京都の碓井小三郎氏の案内を受けて鞍馬口の閑臥庵へ往つて調べ、其後同十二年四月十七日再び視察した。花は淡紅色八重の美しい里櫻であつたが、惜しいことには今は枯れてない。幸に此櫻の寫生圖は曩に作つて置いたから花の特徴は能くわかつてゐる。

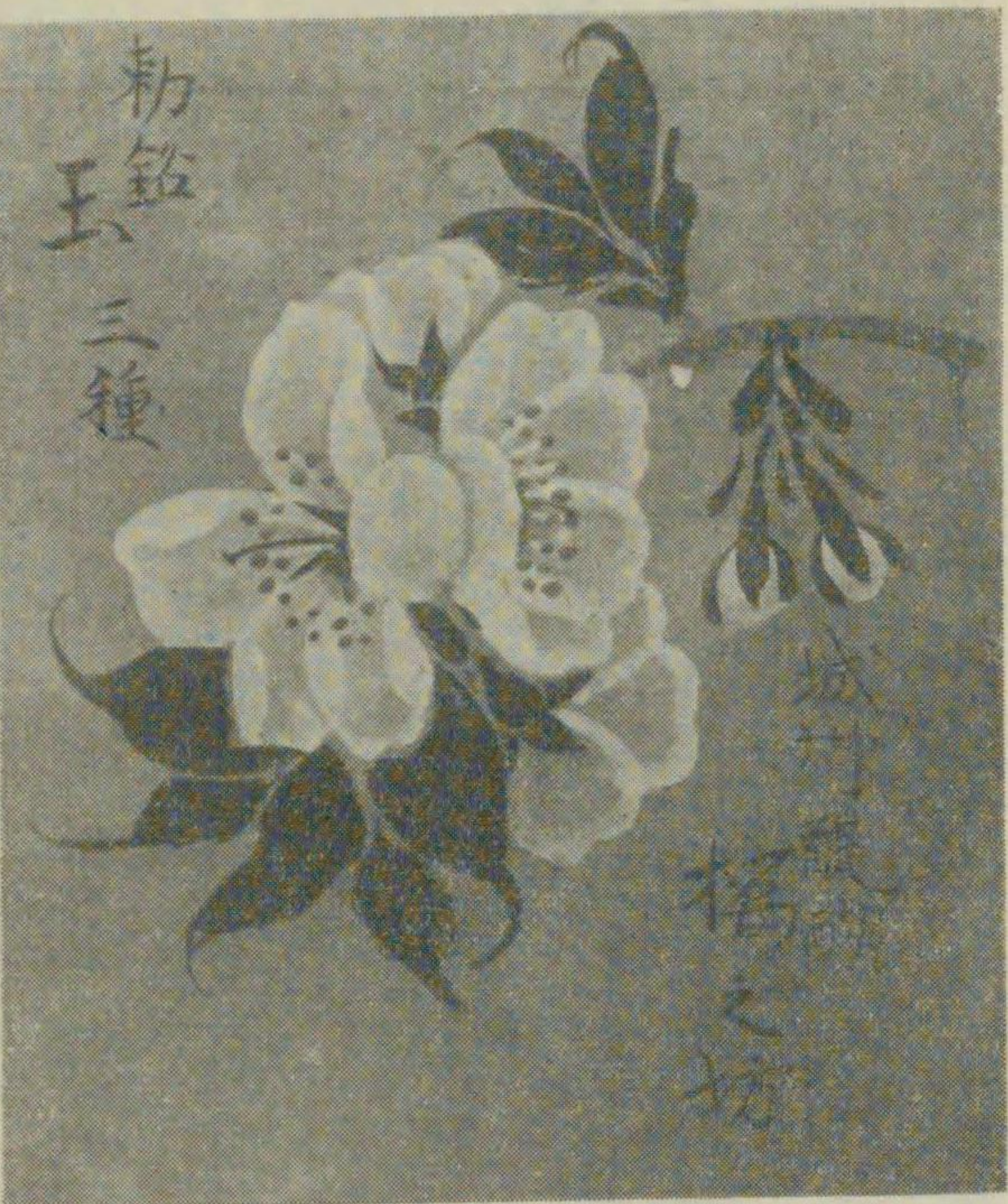
碓井三郎氏著「京都坊目誌」上京之部乾二十四頁閑臥庵の條下に「新御靈口町北側二番戸にあり。瑞芝山と號す。臨濟宗黃檗派萬福寺に屬す(中略)。

堂前には有名なる曙櫻あり。御水尾帝の御愛樹にして御製の和歌あり。

霞ゆく松は夜ふかき山の端に

あけほのいそく花のいろかな

と記してある。



圖の櫻玉たせ載に「譜櫻隱花」

法輪寺は嵐山の虚空藏法輪寺の境内に昔からあつた名櫻で、三熊花顛の「櫻花帖」を始め文政天保頃の櫻譜には此櫻の寫生圖が載つてゐる。「櫻花帖」には「法轉寺」と誤記してあるが、露香の櫻譜には「法輪寺」と訂正されてゐる。

大正九年四月十日法輪寺へ行つたとき、此櫻が同寺に絶えたことを聞いたから、其後兩回に亘つ



て荒川堤にあつた同櫻の接穂を寺へ送つたが、成木しなかつたことを聞いた。  
 以上勅銘の櫻の中、自分の見たものに就て記載したが、是等の櫻は何れも花性の優れたもので、  
 櫻品の上からも其保存が望ましい。(櫻第一九號昭和十二年)

### 三熊露香筆櫻華藪の發見と其解題

蜀山人著「一話一言」(『新百家説林』卷五の一九頁)に「櫻華帖題跋」として記された三熊露香の描寫にかゝる「櫻華藪」一帖は植木八郎が京都在番から江戸へ持歸り、蜀山人が一覽して稱讚したもので、其序跋の文章を一々記載した。此記事の年月は記してないが、多分文化年間と思はれる。

此「櫻華藪」は植木氏の所藏となつたのであらうが、其後百餘年の今日までの所在は全く不明であつた。予が先年花頭の「櫻花帖」を獲て其解説を作つたとき、露香の「櫻華藪」に就ても蜀山人の記事を引用して、此圖譜の閲覽を望んだが、昭和十年四月圖らずもこれが家藏に歸したのは誠に奇縁である。

「櫻華藪」に就ては「増補櫻に関する圖書解題略」追加第十三の七四三(『史蹟名勝天然紀念物』第十一集第一號及二號、昭和十一年)に略解したが、茲には更に其内容と併はせて露香筆の他の二種の櫻花圖譜との

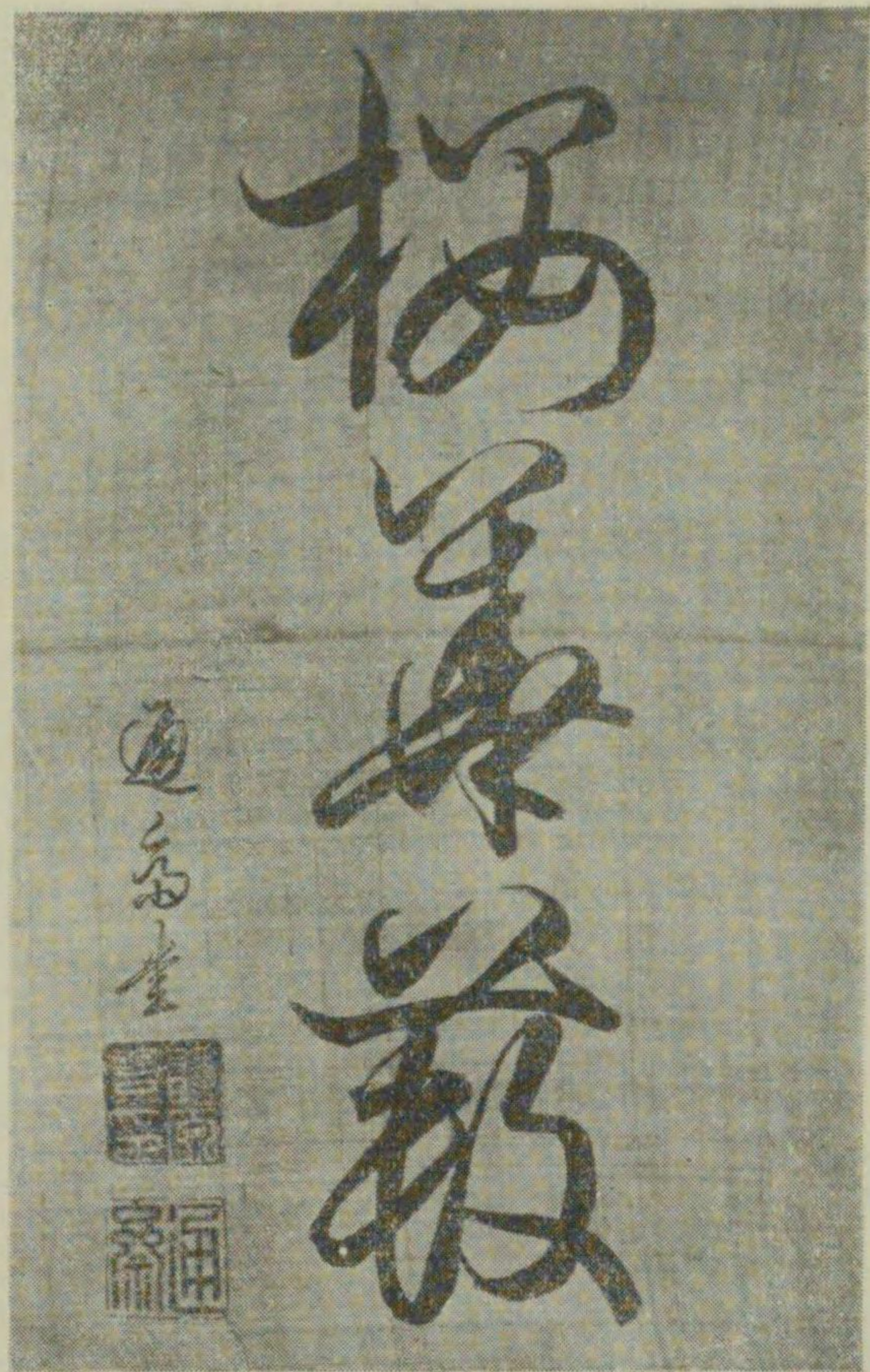


三熊露香筆虎尾  
 (櫻華藪所載)



比較を挙げよう。

「櫻華藪」は畫帖仕立て、表裏共に圖がある。帖の大きいさ豎一尺二寸五分、幅八寸七分、縹珍織で貼り、表に豎七寸四分、幅四分の白絹地に源家具(岩倉三位)筆の「櫻華藪」の外題が



字題「藪華櫻」筆香露熊三

ある、圖は豎一尺一寸一分、幅七寸二分の絹地に畫が入れ、二三圖の外は色彩が分明で能く保存され、又蟲喰も殆どない。圖の大きいさは花顛の「櫻花帖」に比して豎が稍、長い。

三熊露香筆櫻華藪の發見と其解題

一 外題	岩倉三位殿
一 函題	花山院大納言殿
一 假字序	廣幡大納言殿
一 真字序	芝山菊大納言殿
一 加註序	林泉院六上人
一 真字板	閑内子伴高殿
一 假字板	皆川淇堂先生
一 真字板	富中洞峰先生
一 假字板	陳國振書
一 三拾六品攝西二	三熊露香筆櫻華藪

錄目「藪華櫻」







山縣燕亭先生之需

嘉慶四年清和上浣次崎陽館寓松石軒

笨徒錢宇文撰

景山陳國振書

此跋には本帖は醍醐の山縣燕亭の所有としてあるが、伴蒿蹊の跋（「一話一言」参照）には花顛の歿した後露香が燕亭の需によつて畫がいたことが述べてある。かやうに三十六櫻品の圖が出来た後燕亭は當時の縉紳學者詩人歌人等に序跋を請ひ、遠く長崎滞留の錢宇文にまで跋を依頼したのであるが、是等の諸家の賛辭中、持豊の跋文に就ては、蜀山人は前の「一話一言」の記事の中に「縉紳不事國文如此其宜在蒿蹊下」と嘲つた。

「櫻華藪」の筆者露香は兄花顛の筆意を承け、「其櫻畫は兄の海棠にまされり」と蜀山人も賞めたほど運筆が巧で、又雅致に富み氣韻が高かつた。今此帖の一々の寫圖を花顛の「櫻花帖」の圖と對照すると、露香の圖が花顛の圖と花の着方、枝の位置など多少似たものもあるが、全く別のものが多し。これによると露香は臨寫とはいへ兄花顛の圖を其儘寫したのでない。

「櫻華藪」も亦「櫻花帖」も固より單に標本圖としての寫生ではなく、美麗な繪畫であると共に又櫻品甄別の爲には畫鑑となるもので、蜀山人が「此櫻畫帖はたゞ人のもてあそび物ならずみな正花

を以てうつし得たれば春毎に櫻を愛する人の鏡とも見るべし」と述べたのは至言である。

花顛の前松岡恕庵の「櫻品」はあつたが、其圖は簡単な墨摺に過ぎない。花顛に至つて始めて其寫生に基づく美麗な櫻圖を畫がいて世に示したから、櫻品の讚美又名櫻の保存に大なる効果があつた。妹の露香も亦兄の歿後専ら此繪事に努めたことが「櫻華藪」並に下に述べる同人の作品によつても知れる。

蜀山人が「櫻華藪」に就て「露香存生三十六品を畫がきて世に全ふするものは紀州侯へ一帖奉り、並に此帖と二品より外に我國になし」と記したが、予の調べた所では紀州家にはない。（拙文「三熊花顛櫻花帖並に其解題」「櫻」第八號一五頁、大正十五年參照）、然るに「櫻華藪」の姉妹花譜とも見られるものは、現に醍醐寺と吉野の喜藏院にあることが、去る大正十一年奈良縣主催の櫻花展覽會に此兩圖譜が陳列されたことから判つた。以下此兩圖譜に就いて其解題を記載する。

醍醐三寶院所藏のものは一の巻物で、箱書に「倭花名品」とあり、箱蓋の裏に「大樂堂珍藏 三熊露香婆畫 花銘 八尾顯證寺室超誓院筆予姪也稱家君 軸物表題 今出川尙季卿淨功徳院書予妹也稱前君」と記してある。表装は草色模様の織物、見返は金紙で、中山愛親卿の序（日のもとにさけるさくらの色みればひとのくににもあらしとそおもふ）の和歌を入れた假名文）に次で櫻の圖がある。圖は豎八寸五分、幅七寸、式紙形の絹地に彩色され、横に花銘が付き、「小さくら」以下「重かさねの



有明櫻」まで三十六櫻品に亘つてゐる。終に別の「玉櫻」の圖がある。一重大輪白花、蒼は微紅、昔から醍醐にあつた著名の櫻である。卷末に前大納言愛親筆「めかれせすころのとけに見はやせむかせのさはぬはなのうつしる」の和歌讀を添へた。

圖は美術的に畫が、れ、花銘による風物があしらはれてゐる。例へば「あけぼのざくら」に曉の空を赤く出し、「しぐれざくら」に風雨の趣を表したやうに繪畫としても上乘の出来である。

此卷物の舊所藏者大樂堂とあるは、醍醐寺執行榎林靜雲師から聞く所によると、醍醐寺山内金剛王院住職で、同寺の塔頭たうちゆうになつた人であると。

吉野山喜藏院所藏のものは豎一尺三寸、幅八寸四分の畫帖で、終に觀齋（畠中銅脉）筆で「花譜露香寫」とある。帖の四隅には赤銅の金具が嵌めて丈夫に仕立てられてゐる。畫面の絹地は豎九寸四分、幅五寸六分、「小櫻」以下「あり明櫻」まで三十六の圖がある。彩色は立派で保存もよい。文化元年伴蒿蹊の序、栲園俊平の跋があり、花銘も觀齋筆で、櫻品の圖は三十六ある。圖様は櫻品の特徴を表すに重を措き、醍醐寺所藏の「倭花名品」のやうに美術的に出来てゐない。

以上露香の三櫻譜に就て其要點を比較すると次の如くである。

書名	櫻華叢	倭花名品	花譜
所藏者	寛政の頃醍醐の山縣燕亭舊藏文化の頃植木三郎京都より江戸へ携へて來た。昭和十一年家藏となつた。	醍醐寺寺中大樂堂（金剛王院住職）舊藏現に醍醐三寶院所藏	吉野山喜藏院
仕立	一帖（箱入）	一卷（箱入）	一帖（箱入）
帖又は卷の大きさ	豎一尺二寸五分、幅八寸七分	豎一尺二分、長さ三十一尺八分	豎一尺三寸、幅八寸四分
圖の大きさ	豎一尺一寸一分、幅七寸二分	豎八寸五分、幅七寸	豎九寸四分、幅五寸六分
外題筆者	源家具（岩倉三位）	淨功德院	
題字者	通齋（花山院大納言）		觀齋（畠中銅脉）
花銘筆者	太平館（畠中銅脉）	超誓院	觀齋（畠中銅脉）
序跋人名	前秀（廣幡大納言）、六如上人、伴蒿蹊、持豊（芝山前權中納言）、皆川淇園、錢宇文（陳國振書）	中山愛親	伴蒿蹊、栲園俊平



年代	櫻	品名
寛政九年	小さくら 紅小さくら 山櫻 重小櫻 いと櫻 ひとへいせ櫻 伊勢櫻 よし野 重糸櫻 青葉山櫻 姥櫻 鹽かま 赤葉山さく 入相櫻 ひとへ江戸 みよし野 櫻ヶ谷 地主櫻 虎尾 (以上帖の表側にある) 江戸 大膳 あげほの にほひ 普賢堂 しぐれ 楊貴妃 八重櫻 法輪寺 にほひ 榊櫻 単淺黄櫻 廊間 ときは 八重あさぎ 有明 無銘 (以上帖の裏側にある) 計 三十六圖	
不明(寛政年間ならん)	小さくら 紅の小櫻 きたらき櫻 かさねの小 糸さくら (此圖倒に貼) 櫻の伊勢 重の伊勢 青葉山櫻 三よしの 重のいと櫻 (此圖倒に貼) 赤葉の山櫻 うばさくら 鹽がま 入相さくら ひとへの江 地主 芳野 きりか谷 かさねの江戸 とらの尾櫻 明ぼの櫻 匂ひさくら おもものさく 普賢象 しぐれさくら 楊貴妃 奈良の八重 法輪寺 白のにほひ 榊さくら ひとへの淺黄 廊間櫻 常盤櫻 櫻の淺黄 有明櫻 重の有明櫻 玉櫻 計 三十七圖	
寛政八年	小櫻 八重小さく 小山さくら 小櫻 糸さくら いせ櫻 八重いせ櫻 八重いと櫻 鹽釜 玉王 江戸八重 にほひさく 時雨櫻 法輪寺 淺黄さくら 八重淺黄櫻 青葉山櫻 山櫻 入相櫻 みよしの 虎の尾 おもものさく 楊貴妃 にほひさく ら 有明 よし山櫻 廊間 榊さくら 普賢堂 あり明櫻 あけほの 常盤 八重櫻 榊さくら 常盤 あり明櫻 計 三十六圖	

上記の露香筆三種の櫻花圖譜に載せた三十六櫻品は花顛の「櫻花帖」にある三十六櫻品と殆ど同一で、唯後者にある「若木櫻」や「金龍寺」が前者にはないが、前者の「入相櫻」や「八重あさぎ」は後者にはない。元來花顛が三十六櫻品を撰んだ譯は蜀山人が「松岡玄達先生の櫻編を見るに甚多端にしてわかりがたきを深く考(下略)、たゞ櫻畫の一すじに心をこめ都て三十六品を撰びて、櫻編の

繁さを省き根本を正して世に名をしらるゝ者也」(「話一言」二二〇頁)と述べた通りであらう。尤も花顛は京都地方から吉野は勿論遠く飛驒の高山あたりまで櫻花寫生の旅行をしたくらゐであるから、多數の櫻品殊に各地の名櫻を描寫したことと思ふ。それを僅に三十六櫻品として圖を作つたのは代表的のものを撰んで人の需に應じたのであらう。

露香の作つた三十六櫻譜が花顛の同圖譜と一致しないのは、後者の畫がいた三十六櫻品の撰定が時によつて異なつてゐたからと思はれる。現に家藏の花顛の「櫻花帖」の櫻品銘と宮内省圖書寮に藏せられる市橋星峰公撰「花譜」第一帖の「大阪木村孔恭輯平安三熊花顛畫江戸櫻井絢摹」の櫻品銘とは多少異同があることでもわかる。「三熊花顛櫻花帖並に其解題」(「櫻」第八號、一六頁参照)。

花顛の門人廣瀬花隱も文政の頃多く三十六櫻譜を畫がいたが、其櫻品銘の中には花顛の「櫻花帖」や露香の「櫻華藪」其他の同様の圖譜に載つてゐないものがある。〔前記の拙文並に「増補櫻に關する圖書解題略」三九並に追加第一三の七四一参照〕

斯様に花顛・露香・花隱まで三十六櫻譜の型を繼承したが、これとは別に已に寛政文化の頃櫻井雪鮮は市橋星峰公の「花譜」に二百十八の櫻を寫生した。次で文化年間白河樂翁公の「はなのかゝみ」には百二十四の櫻圖が載せられ(筆者は多分文晁又は其門人であらう)、天保に至つて坂本浩然は「長者ヶ丸櫻譜」に百三十六櫻を畫がき、又「群櫻花譜」(四冊)には百三十櫻品の圖を載せた。



此外に文久元年堀良山の序のある「姦譜」に二百五十の櫻圖があるが、これは私が先年考證した通り「花譜」を採つたものである。「拙文「市橋長昭撰花譜の解題並に其文獻的價值」(「東洋學藝雜誌」第三六卷第四五一號及四五二號)参照)。明治時代となつて宮崎玉緒の櫻品寫生は三百有餘に達したが、其頃名和花杖は昔の花隱の櫻畫に則つて三十六櫻を畫がき、之に一々和歌を添へた。畫の巧拙より見ると同人の作は固より論ずるに足らない。

以上古來の櫻譜を通觀するに、「花譜」以下茲に擧げたものは何れも櫻の折枝又は單に花のみを描寫した標本圖で、圖柄も小さいが、之に反して花顛並に露香の作つたものは、一々の櫻品の幹又は枝を生のみ寫生した繪畫で、圖も大きく立派であり、加ふるに櫻を讚美した名流の序跋まで具はつてゐる。花顛や露香の櫻花帖又は櫻花圖卷の珍重されるのはこれが爲である。

(昭和十一年十二月三十日)

### 長者ヶ丸櫻譜と草木奇品家雅見

#### 文政以前の櫻品

寶曆八年松岡恕庵の「櫻品」が出版された。此書は俳人蘆田鈍永が通俗的文體とした爲め汎く世

に行はれ、始めて櫻の種類や品種の多いことを世に示した。

次で安永天明の頃になつて京都の三熊花顛は櫻を愛し、遠近の名櫻を尋ねて寫生し、之を繪畫に上ぼせ、殊に三十六櫻品を撰んで美麗な櫻花帖を作つた。其妹の露香も亦畫法に巧で、兄の歿後は人の雷に應じて三十六の櫻の作圖に努めた。安永以降櫻の鑑賞が盛になつたのは主に此兩人の丹精によるのである。

寛政から文政の頃に至るまでには江戸に櫻園が處々に設けられ多數の名櫻が栽培された。此中で著名なのは本所五の橋の市橋星峰公(名は長昭、近江仁正寺城主)の邸にあつたもので、櫻井雪鮮によつて寫生された櫻品二百有餘は「花譜」に收められ、圖書寮に藏せられてゐる。

文政年間白河樂翁公は其別墅築地の浴恩園の中に多くの櫻品を植ゑられ、これを文晁其他の寫生したもの「はなのかみ」と題し、公の後裔松平子爵家の所藏である。

當時飯田町二合半坂に住した幕臣で富士見御寶藏番であつた安富軍八も庭内に珍らしい櫻を集植した。同人の栽培した櫻の中の或る品種は寫生されたものが現に遺つてゐる。「増補櫻に関する圖書解題略」追加第一三の七四四。

此他にも尙江戸に櫻園は少なくなかなかつたが茲には略する。



長者ケ丸櫻園

文政天保の頃の江戸の櫻園として最も名高く、人々の見に来たものは麻布長者ケ丸の久保帯刀の邸に設けられたものである。帯刀名は原章、櫻顛と號した。幕臣で園藝を好み、殊に櫻を鍾愛して諸方から珍らしい品種を蒐集して自園に植ゑ、白櫻亭と稱した。

此櫻園に關しては詳細な事はわからないが、故武田信賢氏は此園中の櫻品を畫がいた彩色摺物を見たことを話された。又去る大正十年三月東京日本橋の白木屋で開かれた櫻に關する展覽會に「長者ケ丸白櫻亭園中百三十六品」の一枚摺が出品され、後鳥居龍藏氏の好意によつて所有者から寄贈された。(増補櫻に關する圖書解題略「一二」)。

此摺物によつて始めて長者ケ丸櫻園に栽培されてゐた櫻品を知ることが出来たが、是等の櫻品は何れも古來の名櫻又は名所の櫻に屬するもので、此中には明治の中期に東京近郊荒川の堤上に植ゑられた品種と同一のものが多かつたから、兩者の櫻品が同一系統であることが知れた。

當時の江戸には上野・隅田川堤・飛鳥山・御殿山其他陽春行樂の櫻の名所が多かつたが、何れも山櫻を主としたのである。然るに長者ケ丸櫻園は古來の珍らしい櫻を多く植ゑたため、「單瓣重瓣にても世に有ふれたる櫻は一本もなく、皆希世の名品名花にて、園中の櫻花満開の時に門内へ入れ

御市選	御殿山	金工櫻	嵐山	旗山	朱雀櫻	西行櫻	西園櫻	名園櫻	小島櫻	松月櫻	白葉櫻	千代枝	山枝	海堂櫻	江戸櫻	江川櫻	小島櫻	文樂櫻	常盤櫻	小春櫻	不勝櫻	初雲櫻	初馬櫻	
桐ヶ谷	五所櫻	九重櫻	若木櫻	泰山櫻	燕尾櫻	左近櫻	小町櫻	右明櫻	普賢象	蘭香待	方里香	千木櫻	御衣黃	紅枝	八丸櫻	法輪寺	瀧川櫻	寒緋櫻	寒緋櫻	秋女櫻	玉照君	袖振櫻	小三郎櫻	明石櫻
小島山	初志山	虎ノ尾	奈良櫻	小督櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻	紅命櫻
外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山	外山

(小縮)表品櫻の植栽園櫻丸ケ者長

ば香氣馥郁目馴ぬ花のみにて一見櫻とは思はれざるもの最多かりしといふ」と武田信賢氏の文「櫻」第二號四四頁の通りであつたと思ふ。

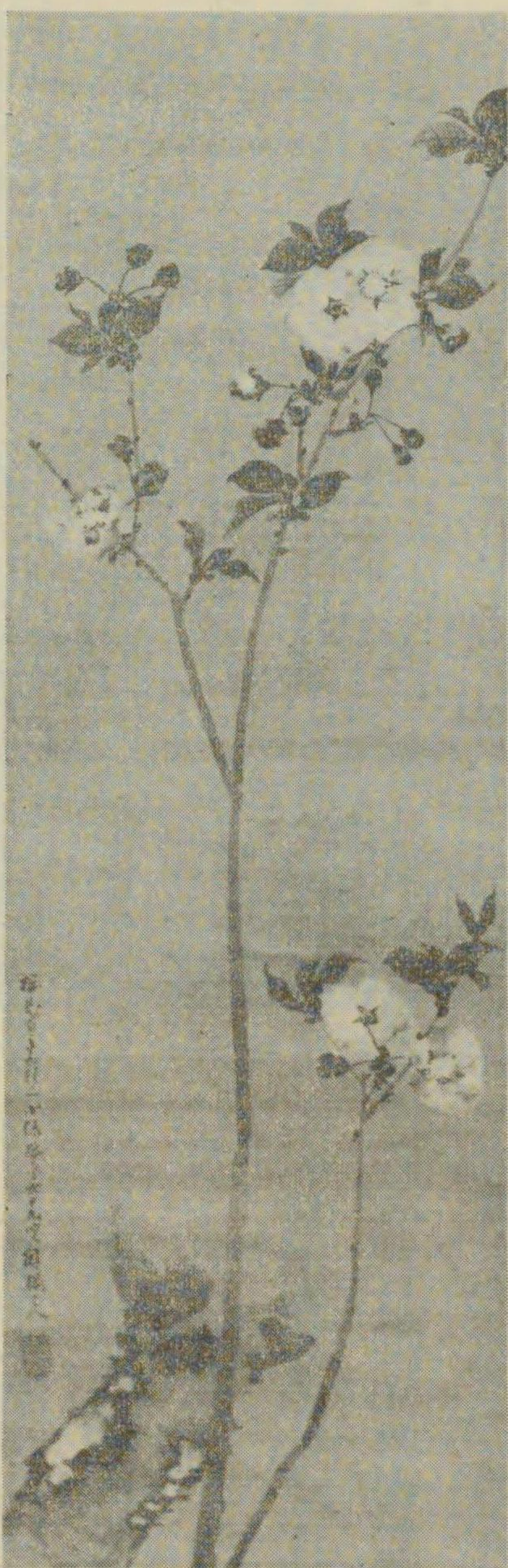
長者ケ丸櫻園へは天保五年三月幕士鈴木成恭其他が觀櫻に来た記事(「東京市史稿」遊園篇第三の七四六頁)がある。これによると花時には櫻園へ貴人や一般の來觀者の多かつたこと、又園主櫻顛が櫻品の蒐集に非常の苦心をしたことがわかる。尙右の「遊園篇」には昔の地圖に見えた櫻顛の屋敷の所在地が擧げてある。

長者ケ丸櫻園が文政から安政に亘る年代に於て民間の櫻園として諸人の多く來觀したのは園主櫻顛が快よく客を引いたのと又



同人が世の種藝家・本草家其他文墨の士と交際の廣かつたからであると思ふ。此櫻園が一般民衆に國華の精粹を知らしめ、又櫻品甄別家や考證家に有益なる資料を供給したことは言ふまでもない。然るに櫻顛の歿後幾何もなく幕府の瓦解に際し、此名園も廢滅の止むなきに至つたが、久保家の嗣榮左衛門は園内の櫻品全部を駒場御藥園へ納めたといふ、(「東京市史稿」遊園篇第三の七五一頁)。

長者ケ丸櫻園の櫻品百三十六は坂本浩然が寫生したが(後文參照)、又大岡雲峰もこゝへ來て數十



櫻醉(久保櫻顛)小筆綠櫻の圖

種を寫生したと言はれてゐる。これとは別に此櫻園の櫻を寫生した畫幅が世に遺つてゐるが、

いつも櫻銘のところ「櫻花百三十六種の一」と記し、「醉櫻」の落款がある。此筆者は分明でなかつたが、曩に島田筑波氏が其所藏の「ちらし」(櫻顛が或る年の三月二十七日上野不忍池、中島の寶珠院で、自作の櫻園の櫻品圖を展覽に供したときの招待文に醉櫻と署名してあるもの)に就て記されたこと(「櫻」第一二號五六頁)によつて右は櫻顛の自畫で、醉櫻の畫號を用ひたことがわかつた。

これによると前述の武田氏の見られた長者ケ丸櫻園の櫻の色摺繪も同人の畫がいたものであるかと思ふ。併し畫としては言はゞ素人で、浩然の筆などには到底及ばない。

### 長者ケ丸櫻譜

去る大正八年七月六日東京の或る書肆から坂本浩然筆の櫻花圖譜一帖を手に入れた。聞く所によれば新潟で獲たものである。帖の外側には桐板が貼られ豎六寸、幅三寸八分、圖は豎四寸五分、幅三寸四分の絹地に畫かれ、裏から藍紙が當てゝあるため圖の輪廓殊に白い花ははつきり浮出してゐる。

圖は山櫻(赤葉二品)以下衣笠櫻まで百三十五あるが、赤葉山櫻は二品あるから合計百三十六になる、其中二圖が紛失し、又辨殿の圖は二つあるから、櫻品の圖は現在百三十四になる。何れも浩然獨特の健筆で而かも精細に畫がられ、彩色が鮮明で、櫻品甄別の標本畫としても十分の價値がある。

此圖譜を獲たときには浩然が何處の櫻を寫生したか不明であつたが、其後前記の「白櫻亭園中百三十六品」の表を見て、始めて寫生した櫻の出處がわかつた。もと此圖譜には題名がなかつたから新に「長者ケ丸櫻譜」又は「浩然櫻譜」(増補櫻に関する圖書解題略)三七と名づけた。天保十三年の作で



あるから、浩然の五十四歳の時である。

帖の首には容齋の櫻をめづる詞があり、圖と圖との間には當時の俳人鳳朗・卓池・梅室など自筆

の俳句が挿まれ、帖の終には鶴

峯<sup>しのぶ</sup>成申（國學者、歌人、水戸藩

に仕へた）の歌讚、次で浩然・

董齋等の増田金太宛の書簡が添

へてある。

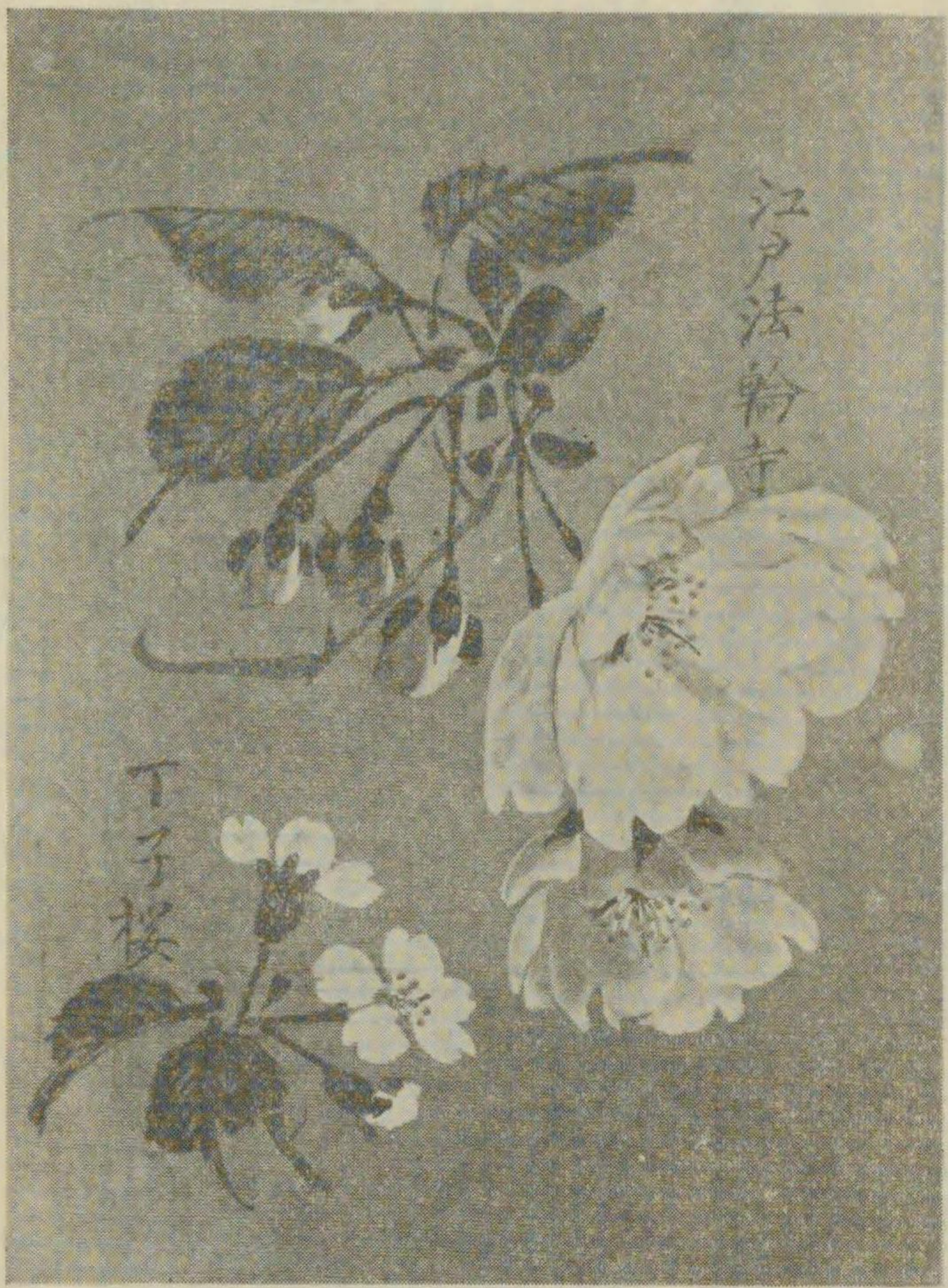
是等書簡によれば此櫻花圖譜

は増田繁亭（後文參照）の舊藏

であつたことがわかる。尤も圖

譜の製作に就ては未だ何等の記

録を得ないが、恐らく此所藏者



坂本浩然筆「長者ケ丸櫻譜」の江戸法輪寺並に  
丁子桜の圖

が特に浩然に長者ケ丸櫻園の櫻品の寫生を依頼したものと思はれる。浩然は岩崎灌園と共に本草家中の畫の名手で、殊に櫻花の寫生が最も得意であり、櫻品の甄別に堪能で、此圖譜の完成には最も適當であつたが、一春にかゝる多數の實物に就て精細美麗なる寫生圖を仕上げるには大なる勞力を

費したことと思ふ。浩然の櫻畫には尙「群櫻花譜」其他のものが少くないが、「長者ケ丸櫻譜」は名櫻園の櫻品の寫生圖である點に於て最も價値がある。

「花譜」の圖が後世のに作られた櫻譜の類に直接又は間接に轉載されたやうに（「東洋學藝雜誌」第四五一號、第四五二號參照）、「長者ケ丸櫻譜」の圖も亦後年に至つて度々複寫された。凡べて是等の複寫圖は原圖譜と違つて一枚に多數寫され、寫法も彩色も拙劣なものが多く、又浩然の原圖から採つたことも記してない。尤も梅澤條五郎氏所藏の「櫻花寫生」と題する一帖には「長者ケ丸櫻親父某所愛百三十六品之内」と書いてある。又文部省所藏圖書「櫻花寫生」も同様の複寫圖で、文久元年に寫したことが記してある。

もと「長者ケ丸櫻譜」の後には廣瀬花隱の三十六櫻の圖譜が添へられて、合帖になつてゐた。畫の寸法は浩然の圖と同一で、圖と圖との間に俳人の句を挿入したのも同様であつた。

花隱は三熊花顛の門人で、京都に住んだが、「増訂武江年表」文政八年の條に「今年夏京より花隱といふ畫工下る」と出てゐるから、江戸に來た後繁亭の依頼によつて作圖したものではなからうか、浩然の圖は天保十三年に出來たのであるから、花隱のは其前に畫がいたものと思はれる。

書肆が此兩圖譜の合帖になつた原本を獲たとき、賣るために二つの圖譜を分離し、又帖の終に付いてゐた文晁・南溟・五山其他知名の人々の繁亭宛手簡を取り去つた。此時花隱の圖譜にも名がな



かつたから「花隠櫻譜」と命名した。此圖譜は當時南葵文庫で購入されたが、去る昭和八年故あつて家藏になつた。此兩櫻譜が元のやうに揃つたことは悦ばしいが、唯書肆が分ち取つた文晁其他の手簡は大正十二年の大震災火災で焼失したことは惜むべきである。

花隠の櫻譜は固より其師花顛や又露香の作品に比すべくもないが、能く師の畫法を守り三十六櫻品の寫生に精進して數多の筆蹟を世に遺して、櫻品の知識普及に功のあつたことは認められる。殊に右の「花隠櫻譜」には一々其櫻品の所在が示してあるから大に参考になる。

増田繁亭と草木奇品家雅見

「長者ケ丸櫻譜」の舊藏者増田繁亭は通常金太郎又は金太と稱した。江戸青山權田原青西手前に住んだ花戸で、種藝に長じ又築山庭造の術に巧であつたから諸屋敷へ出入した。人となり風雅で汎く名流と交はり、文晁・雲峰・雲停等の畫家と來往した。殊に本草家坂本浩然とは昵懇であつたことは左の書簡でわかる。

朶雲被成下謹て奉拜誦候先以餘寒も薄く有御揃御光祥被成御座欣喜之至奉存候さて過日は御貴臨其節被仰付花曆只今したためあり申候晩程此方より爲持上候事に御座候 且又見事なる側金盞一盆御惠贈被下誠に難有奉謝候いづれ拜顔之上萬々御禮可申上候何も一寸御請御禮申上度如

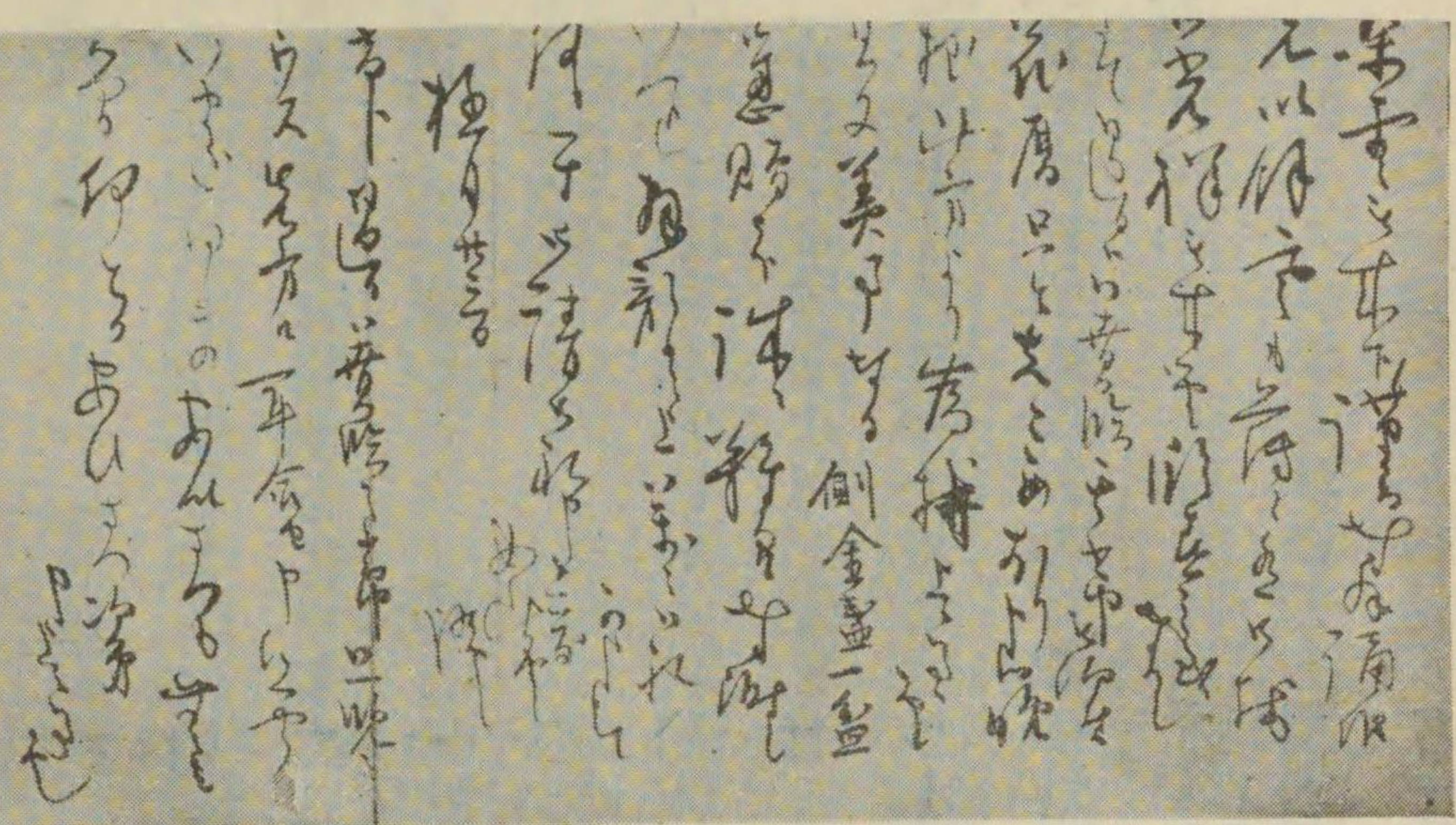
此に御座候頓首

極月二十三日

尙々御貴臨之節御一覽之ウス先方へ聞合せ申候處いまだ何んの挨拶も無之候間何とかあいさつ次第申上候事に御座候

花姑金太賢兄君奉復

浩 雪



(宛 郎 太 金 田 増) 簡 手 然 浩 本 坂

繁亭の畢生の努力は草木の奇品の圖録である。其頃は植物の畸態俗にいふ變り物の流行が盛で、好事家は競て是等の珍らしい園藝品を自園に培養して賞翫した。繁亭は種樹家として特にこれを好み、遠近の所有者を訪ひ、一々實物に接して畫家に寫生させ、又其來歴を調べ、資料の蒐集に努めた結果遂に種藝と文雅との趣味を第一とする一部の成書となつた。これが即ち「草木奇品家雅見」で、著者の述べてゐる通り、昔染井の植木屋伊兵衛の著した「草木地錦抄」は花物のみを載せたから、此度専ら奇品を圖録した書を作つたのである。



本書は美濃判、淡藍表紙、柿色の外題で、天地人の三冊になり、天の卷三十枚、地の卷四十三枚、人の卷二十枚と附録二十一枚で、見返しに文政丁亥（十年）新鑄、書畫諸名家揮毫、寫生補助染井花屋源三、編輯青山種樹家金太としてある。奥付には文政七年靱稿同十年開板と記され、著者の藏版である。

天の卷には大岡雲峰・菊池五山の序、著者繁亭の自序があり。凡例には卷中草木和漢通稱其他の見出しの後に落葉之部・草之部・松之部・竹之部・檜柏之部・蘭之部・萬年青之部・南天之部・石菖之部の一々の品名と變り物の名とが出てゐる。次で本文に入れば、首には永島出奇品として、かもの木・大ふくりんちんちやうげ・ぬのひさおもと其他の圖と是等の奇品を出した享保の頃の江戸四谷の種樹家永島氏並に其門人の種藝上の來歴が述べてある。

かやうに本書には三卷を通じて一々の奇品の寫生圖毎にこれを作り出した種樹家の記事・逸話などが載せてあるのが特色である。圖は莖や枝の一部又は鉢植にしたものを表し、正確細密である。挿圖の數は天の卷百七、地の卷百五十六、人の卷二百三十九（内百七十六は附録にある）、計約五百に及んでゐる。

畫中には尙春と秋との七種解説、其狂歌、又文化十一年江戸駒込笑花堂の梅の番附や植木屋音吉の名櫻の番附などが掲げられ、讀者の趣味を惹くやうに編纂されてゐる。

右の附録の記事となつた資料は當時著名の種藝家で、彼の「草木錦葉集」の著者水野忠曉（逸齋）の草稿によつたもので、これを繁亭に與へたことは忠曉の跋（人の卷）に述べてある。但し此附録に載せた百七十四箇の圖は後「草木錦葉集」の出版されたとき此書にも出てゐるものがある。かやうに繁亭は其著「草木奇品家雅見」の爲には此道の先輩大家たる水野忠曉から益を得たが、亦同業友人の染井の花屋源二からも補助されたのである。

「草木奇品家雅見」の圖の一部分は大岡雲峰の筆になつたが、大部分は其門人關根雲停が畫がいた。雲峰は園藝を好み、繁亭と交際が厚かつたから自然此書の圖を作ることになり、又前にも記した通り序を書いた。此兩畫家の外に尙文晁・雪亭・北溪などの畫いたものも本書に載つてゐる。

「草木奇品家雅見」は發行當時評判が高く、此方面の専門家は勿論文雅の士の間に愛讀されたに違ひないが、著者自身の出版で、部數も多くなかつたためか、今日では稀に見るに過ぎない。尙本書の奥附に此書の後編の豫告が出てゐるが出版されなかつた。

茲に家藏「草木奇品家雅見」の版本の中に樂亭文庫並に桑名の藏書印のあるものがある。細まかい二重菱形模様のある草色絹地の表紙に柿色の外題紙が貼られ、初摺と見えて印刷鮮明、すこしも汚染のない極上本で、白河樂翁公への獻上本と見られる。樂翁公の致仕は文化九年、卒去は文政十二年であるから、公は同十年に出版された此書を読まれ、園藝上の嗜好を満足されたことと思ふ。



尙一つ家藏の「草木奇品家雅見」の寫本がある。黒地白字の序を始め、本文の細字圖畫までそつくり寫した上に圖に悉く彩色が施してある。版本では花・葉・果實などの色は勿論、白・黄・赤・藍などの斑入葉がすべて一樣の墨摺であるに反し、此寫本では一見して色の區別の出来る點に於て大なる價值がある。本書の凡例にも著者が「丹青を用ひざればみどり色のこきも白斑黄斑の艶なるもみな一樣の墨摺なれば寫おとると見ゆるも少からず」と述べてはあつたが、併し版本の原畫は恐らく着色であつたらしい。此寫本の紙質其他の點から見ると版本の出た頃原畫によつて彩色を加へたものではなからうか、何れにしても版本の短を補ふことの出来た古人の大なる努力が認められる。

「草木奇品家雅見」は我國の重要な植物畸態學上の文獻として左の點が擧げられる。

- (一) 古來多數の草木に現れた畸態の實現と其出現の來歴とを記したこと。
- (二) 正確なる多數の寫生圖が作られてゐること。
- (三) 斑葉の種類之最も多いこと、其他帶化・強振・枝垂・尾化・線化等諸般の畸態が見られること。

本書の外斑葉のみを圖説した「草木錦葉集」も亦此方面の極めて有益なる文獻で、これは別に解題することゝして茲には略する。(植物學雜誌第五一卷第六〇二號昭和十二年)

### 坂本浩然の群櫻花譜

坂本浩然の作つた櫻花圖譜中櫻品甄別の文獻として最も價值あるものは「長者丸櫻譜」と、之に次で「群櫻花譜」とがある。前者の解題は別文に記したから茲には専ら後者に就て其大要を述べよう。去る大正十年には偶然一冊の櫻花圖譜を獲た。美濃紙二つ折黒輪廓内に畫がいた三十二櫻品の彩色圖で、一々櫻名と特徴の略記があり、外題には「櫻花圖」と記された。筆者の名はないが、畫風と書風とによつて坂本浩然の作と判斷した。

其後昭和八年四月二十二日東京日比谷公園内で開かれた櫻の會に三木謙吾氏は「群櫻花譜」四冊を展覽に供された。此書にも筆者の名を逸してゐるが、矢張浩然の自畫に違ひなく、後に調べた所では同書の第一冊は正に前記の家藏本「櫻花圖」と全く同じであることがわかつた。

此本の大きさは豎八寸五分、横六寸、圖は大抵紙の一半に一種づゝ畫がしれ、中には兩半に亘つたものもある。圖柄は「長者ヶ丸櫻譜」のものよりも大きく、又これとは全く別の寫生圖である。

「群櫻花譜」には序文もなく跋もない。又普通の圖譜のやうに畫帖仕立にせず、冊子にしてあることから見ると、或は筆者に此書の出版の意思があつたのではあるまいか。同人著「菌譜」卷二(天



保六年刻)の末尾に「櫻譜浩雪先生編輯」と掲げてあるのは此圖譜の豫告とも考へられる。

三木氏の「群櫻花譜」には壽山閣内山卯之吉の黒印が押ししてある。内山氏は巢鴨の花戸として舊家であるから、夙に此書を得たものと思ふ。

「群櫻花譜」も「櫻花圖」も前記の如く畫形と彩色との一致してゐるのは同一人の筆であるから當然であるが、今かゝる圖譜を新に複寫する場合には畫形は兎に角彩色は原本に遠ざかるを免かれな

い。是れ畢竟複寫に當つて十分の注意を拂はないからで、斯かる複寫本が文獻上何等の價値のないことは明である。

群櫻花譜 第一卷

三〇枚

三二圖

- 松月櫻 青芽、白花、大輪、八重
- 燕尾櫻 赤芽、淡紅花、花瓣小、重ね厚し
- 普賢象 赤芽、淡紅花、花瓣小、重ね厚し、大輪八重、花心より小綠葉出づ
- 萬里香 青芽、白花、一重、花瓣圓し
- 隅田川 赤樺芽、中輪、白花、一重
- 香 櫻 赤芽、白花、一重
- 紋 櫻 赤芽、八重、淡紅、花瓣に縦の濃赤筋あり
- 有明 櫻 赤芽、淡紅花、一重と八重
- 千本 櫻 青芽、白花、一重、花瓣細し
- 夕榮 櫻 赤樺芽、一重、赤色、小輪、日光中禪寺の紅山櫻なり
- 泰山府君 赤芽、紅花、小輪、重ね厚し
- 小町 櫻 白地に淡紅を帶ぶ、一重
- 蘭奢待 一重、花瓣細し
- 小金井櫻 黄芽、白花、一重、花瓣細し
- 常盤櫻 赤芽、白花、中輪、一重



榮夕筆然浩本坂 (載所譜花櫻群)



不斷 櫻 白花、小輪、一重  
 禿 櫻 茶芽、白花、小輪、八重  
 伊勢 櫻 赤芽、紅花、八重  
 祇王 櫻 赤芽、淡紅花、一重  
 下溝 櫻 淡紅花、小輪、一重  
 毛毬 櫻 茶芽、白花、大輪、重ね厚し

第二卷

三〇枚

享師 櫻 茶芽、白花、小輪、八重  
 兒 櫻 青芽、淡紅花、小輪、八重、一重  
 樺 櫻 青芽、淡黃暈花、大輪、一重  
 祇女 櫻 淡紅花、一重、祇王櫻に似たり  
 金山 香 茶芽、白花、一重  
 雪山 山 青茶芽、白花、中輪、圓瓣一重

三三圖

元日 櫻 極紅色、小輪一重、夕榮櫻に似て花瓣稍細し、紅山櫻なり  
 芝山 櫻 赤芽、白花、一重  
 寒緋 櫻 紅花一重、夕榮櫻に似て紅山櫻なり  
 上溝 櫻 茶芽、白花、小輪、一重  
 楊貴妃 茶芽、淡紅花ぼかし、大輪、八重  
 御殿山 青芽、白花、小輪、一重  
 朱雀 櫻 赤芽、淡紅花、大輪、八重  
 駒繫 櫻 赤茶芽、白花、大輪、一重  
 千代彼岸 茶芽、白花、小輪、一重  
 大菊 櫻 青芽、白花、大輪、一重  
 芳野 櫻 青芽、白花、一重  
 月 暈 茶芽、淡紅花、八重  
 卯月 櫻 青芽、白花、一重



大膳 櫻 濃赤芽、紅花、大輪、重ね厚し  
御室 櫻 黄芽、白花、約十瓣  
外山 櫻 赤芽、白花、一重

第三卷

三〇枚

醍醐 櫻 赤芽、白花、瓣端ほかし、一重  
松の月 青芽、白花、八、九瓣、蕾純白、松月に似たるも幼花及蕾に紅暈なし  
一文 字 茶芽、白花、大輪、一重、花瓣肥大  
白梅 櫻 赤茶芽、白花中輪、一重  
紫 櫻 青茶芽、濃紅紫色、一重  
辨殿 櫻 赤芽、濃紅花、一重  
右衛門 櫻 赤芽、淡紅花、八重  
初瀬山 赤芽、白地、花瓣の先、淡紅、中輪、五、六瓣  
筑波 根 赤芽、淡紅花、八重、一重、花中より二小葉出る  
遅 櫻 赤茶芽、淡紅色、八重、一重、八、九瓣  
大相 櫻 茶芽、白花、一重

絲括 櫻 赤芽、紅花、小輪、重ね厚し  
紅鴨 櫻 赤芽、一樣紅色、中輪、一重  
吉祥 閣 青黄芽、白花、一重

三三圖

名鳥 櫻 茶芽、白花、瓣端紅色、菊咲大輪、蕾倒圓錐形  
白舞 櫻 赤芽、白花、大輪、約十瓣  
路頭 櫻 赤茶芽、濃紅花、大輪、重ね厚し  
紅鴨 櫻 千葉のもの、茶芽、紅又は淡紅花、重ね厚し  
紫 櫻 千葉のもの、稍、小輪八重  
大提灯 櫻 赤茶芽、淡紅ほかし、八重、花梗長し  
在原 櫻 青黄芽、白花、一重  
波 櫻 茶芽、白花、小輪、八重、八、九瓣  
衣笠 櫻 赤茶芽、白花、一重  
長者黄金 櫻 淡青芽、黄花、中輪、一重、長者九久保櫻顛の櫻なり  
朝日 櫻 赤芽、白花、重ね厚し

白鴨 櫻 茶芽、白花、一重  
布引 櫻 赤茶芽、白花、約七瓣、内三瓣小  
海棠 櫻 赤芽、紅色ほかし、大輪、一重、花瓣肥大

小菊 櫻 茶芽、白花、菊咲  
明石 瀉 赤茶芽、淡紅ほかし、一重  
須磨寺若木 櫻 青芽、紅花、一重  
雨宿 櫻 青黄芽、白花、約十瓣  
淺黄色 櫻 青黄芽、花底青鼠色、一重  
小提灯 櫻 芽色、花形、花色、前者に似て花梗は短し  
江戸 櫻 茶芽、紅花、八重、花梗短し  
姫子 櫻 青芽、白花、一重  
朝霧 櫻 赤茶芽、白花、小輪、一重  
小緑 櫻 黄茶芽、白地淡黄ほかし、小輪、八重  
左近 櫻 赤芽、淡紅ほかし、一重

第四卷

三〇枚

奈良 櫻 赤芽、淡紅花、一重  
柗花 女 青茶芽、白花、大輪、八、九瓣  
地主 櫻 赤芽、白花、花心より二小葉出づ、八重、花梗長し  
紅延命 櫻 赤芽、紅紫花、小輪、一重  
御衣黄 櫻 茶芽、黄緑地に濃綠色の縦の太筋入、八重  
瀧の川 青芽、白花、一重、花瓣細し  
袖振 櫻 青茶芽、紅花、八重、一重  
初雁 櫻 黄茶芽、紅花、小輪、一重  
小春 櫻 赤芽、白花、一重、花瓣圓るく肥大  
鷺の尾 櫻 淡黄茶芽、白花大輪、八重  
天の川 茶芽、紅花、八重、枝其他花部上に向く

三二圖

御櫻 所 赤芽、淡紅花、八重  
殿 櫻 茶芽、白花一重、花瓣細く、瓣間すく  
敦盛 櫻 青芽、白地、淡紅ほかし、小輪、八重  
嫩木 櫻 赤芽、紅花、大輪、八重、一重、花梗長し  
人丸 櫻 白花、一重  
玉藻 前 赤芽と青芽と別の枝に着く、赤芽の方は白地、何れも重ね厚く、花梗短し  
雪の曙 茶芽、淡紅花、八、九瓣  
初雪 櫻 青芽、白花、一重、花瓣細し  
瀧 櫻 淡茶芽、白花、一重  
渦 櫻 青茶芽、濃紅色、大輪、重ね厚し  
芙蓉 峰 赤芽、紅花ほかし、大輪、八重

三三圖

小鹽山 櫻 青葉、白花、一重、山櫻性  
薄墨 櫻 青茶芽、白花、中輪、一重  
白延命 櫻 赤芽、白花、小輪、花梗細く、山櫻性  
九重 櫻 青芽、紅花大輪、重ね厚し  
法輪 寺 赤芽、濃紅花、中輪、重ね厚し  
紫船 赤芽、白花、八重  
爪紅 櫻 青芽、紅色ほかし、瓣端濃紅八重、花瓣肥大  
虎の尾 櫻 赤芽、一樣濃紅花、重ね厚し  
箒掃 櫻 茶芽、濃紅花、小輪、一重、細枝、花、雌雄、蓋すべて上方に向く  
帆掛 櫻 赤茶芽、白花、中輪、一重、花中より一旗、瓣長く出で上へ向く

合計、一三〇圖

(昭和十二年十二月五日)



六々櫻譜 (複寫本)

廣瀬花隱  
原本特許局藏

一冊

元日・小・垂枝・手枕・山・香・八重單・路頭・虎尾・芝山・夕榮・三吉野・艶・玉緒・衣笠・曉・八重・地主・爪紅・法輪寺・廊間・玉・伊勢・樺・御園・小翠・鹽竈・曙・漣・筑波根・薄墨・入相・普賢象・淺黃・有明・常磐の三十六櫻花の着色描寫にして、半紙本の一頁に一種づゝ畫けり。筆者の名なきも、其描法によりて廣瀬花隱の作なること明なり。六々櫻譜には不忍文庫・阿波國文庫の印ありて屋代弘賢の藏書たりしものなり。蓋し弘賢が櫻品考證の資料として描かしたるものなるべきは、六々櫻譜と題せる表紙の文字并に一々の櫻の名を記せる文字が同人の筆に疑なければなり。

花隱の描ける櫻譜にして、坂本浩然の櫻譜と共に増田金太郎(繁亭)の舊藏にかゝり、今は南葵文庫に藏せらるゝものあり。此「花隱櫻譜」にも三十六種の櫻を描寫したるが、内容は「六々櫻譜」と大同小異なり。今兩者を比較するに、「六々櫻譜」にありて「花隱櫻譜」になきものは小翠・路頭・廊間の三種あり。又「花隱櫻譜」にありて「六々櫻譜」になきものは愛耶・開終の二種なるが、尙「花隱櫻譜」には八重單の圖二あり。

「花隱櫻譜」には一々の櫻の所在を記したれば、茲に參考として載すべし。

元	日	三種	薩州鹿兒島	爪	紅	二種	洛東高臺寺中月眞院
勅銘常	磐	四種	勢州白子浦觀音寺	八	重	二種	南部一乘院宮
勅銘玉	玉	三種	城州醍醐櫻之坊	愛	耶	二種	河州藤坂明尾寺
開	終	三種	江都谷中了玄寺	山		十一種	和州吉野山
淺	黃	五種	洛西仁和寺宮	勅銘曙		三種	洛鞍馬口閑臥庵
漣		二種	洛東華頂山	勅銘御	園	二種	南都興福寺
玉	緒	五種	洛西仁和寺宮	勅銘曉		四種	洞中
艶		二種	江都	小		十種	洛東長樂寺
勅銘法輪寺			洛西嵯峨法輪寺	樺		四種	江州日野上郷藏王社
衣	笠	二種	洛北衣笠山	入	相	二種	攝州小曾部金龍寺
手	枕	五種	和州吉野吉水院	地	主	二種	洛東清水寺
垂	枝	十種	洛東華頂山	芝	山	三種	世上一般
普賢象		三種	洛千本閻魔堂	有	明	四種	攝州有馬山
香		五種	泉州堺天王寺	鹽	竈	三種	奥州千賀浦鹽竈明神



櫻の文獻

四〇六

- |       |    |          |     |    |          |
|-------|----|----------|-----|----|----------|
| 筑波根   | 六種 | 常州櫻州     | 伊勢  | 二種 | 攝州小曾部伊勢寺 |
| 薄墨    | 二種 | 豫州和氣西方寺  | 夕榮  | 三種 | 野州日光山    |
| 虎尾    | 八種 | 和州芳野如意輪谷 | 八重單 | 八種 | 相州鎌倉桐ヶ谷  |
| 勅銘三吉野 | 三種 | 禁中       | 八重單 |    |          |

「花隱櫻譜」は筆者が七十一歳の時の作にして、圖は大約二寸五分乃至三寸四分の大きさあり。「六々櫻譜」の圖は之よりも大きく、長さ凡そ四寸乃至五寸五分、幅四寸乃至五寸なり。兩櫻譜の圖柄の一致せざる所より見れば、一方を他方より摸倣したるものに非ざるは明なり。蓋し筆者が多數の櫻の寫生畫中より著しきもの三十六を撰みて更に描寫したるものならん。すべて花隱の櫻畫は花顛の法に據れるものにして、正確寫生を主とせざる代りに頗る古雅なり。櫻の葉脈は概ね五六本を畫き、花瓣の重なる處は其儘繪の具を重ねたり。又花隱の櫻畫の特色として、枝の本の折口を急に曲げて跳ねたるもの多し。斯かる描方は同人の描ける諸他の櫻畫にも現はれたり。書も亦巧にして、「花隱櫻譜」の一々の櫻の名及所在を記せる文字の如きは雅致に富めり。(増補櫻に關する圖書解題略「三九、大正九年」)

太申櫻記

井上蘭臺撰 三井親和篆 寶曆十年刻

一冊

卷首に太申櫻記の大字あり、本文は三行五字詰にて白字を以て現はせり。小松賴壽の跋の後に、太申櫻記の楷書を附す。東都書肆前川六左衛門の出版なり。

太申は和泉屋甚助といひ、江戸三十間堀の材木商にして、虚名を好み、淺草の境内に櫻樹を多く植ゑ太申櫻と稱せしめたり。その他名聞を博するに急にして遂に産を破り、世の笑草となれりと云ふ。太申に關する記事は手柄岡持の「後はむかし物語」(「溫和叢書」二ノ三七)、「甲子夜話」(四九ノ二三六)等に見え、又林若樹氏の太申傳(「集古會誌」甲寅四及五、大正三年)に詳なり。「太申櫻記」は太申の櫻を愛し、風流なることを賞揚せるものにして、記の中の「世人言風流必言太申言太申必言花樹、未嘗不慕太申也」の文辭にても知るべし。井上蘭臺は岡山侯の儒官にして寶曆十一年に歿す、三井親和は江戸の書家、深川に住せり。天明二年歿す。前川六左衛門は「書賈集覽」に「崇文堂、延享——文政 江戸日本橋南二丁目又三丁目とも新衛門町とも記したり」とあり。(増補櫻に關する圖書解題略「追加第六、昭和三年」)



管 春 錄 (寫本)

林春齋撰  
寛文癸丑(延寶元年)自序

四 冊

外題には管春錄とあるも、本文の表題には本朝管春錄と記せり。目次左の如し。一卷記櫻花故事、二卷載櫻花文、三卷載櫻花詩(以上第一冊)。四卷載櫻花倭歌(第二冊)。五卷纂中華歷朝詩句並雜著、號別錄(第三冊)。六卷載自家詩文、號附錄(第四冊)。

本書は撰者が上古以來の史乘・文集・詩集・歌集より前記の目次に準じて抄録したるものにして、本邦の櫻に關する故事並に文藻を網羅せり。管春錄とは撰者の序にある如く、「櫻花管領我國之春」の意を表せるものなり。

第五卷の支那の櫻又櫻桃に關する詩文故事も汎く集載せり。第六卷の自家詩文は主に撰者の別墅忍岡の櫻に關するものにして、當時同處に多數の櫻ありしや明なり。

大田南畝の詩に「弘文學士古丘墟、曾管芳春著一書、今日櫻峰名不辨、等閑觀過醉歸餘。林春齋種櫻于忍岡別墅名櫻峰著管春錄」(自著「櫻花概説」第二十七圖版に此詩の筆跡を載す)とあるを見ても、本書の成るは偶然ならざるを知るべし。

春齋著述書目中に「管春錄」あるも判本あるを聞かず。本書には不忍文庫の藏書印あり。屋代弘



櫻の室御筆嶽華澤小  
(載所帖花櫻所名都京)



賢の自筆寫本あり。

林春齋一に鶯峰と號し、其他の號多し、名は恕、羅山の第三子、元和四年生、延寶八年歿、年六十三、著書甚多し。(「増補櫻に關する圖書解題略追加」第七、昭和四年)

### 京都名所櫻花帖

小澤華岳筆  
天保頃

縦八寸五分  
横六寸五分

絹本一帖

京都名所の櫻を彩色精寫せるものにして、一々所在を記し、又櫻の名をも記せるものあり。帖中收むる所、知恩院淺黃櫻・嵐山及三軒家・嵯峨清涼寺・平野・東寺・長岡・清水地主櫻・閻魔堂普賢象・鞍馬雲珠櫻・月輪時雨櫻・太秦・長樂寺・御室・雙林寺・西行庵・岡崎御坊・雲林院・法輪寺・花寺西行櫻・眞如堂・醍醐・若王寺・高臺寺總計二十二圖あり。是等の名所の櫻の中今日に存せるもの多からず。

華岳は名を定信といひ、京都の畫家にして、岸駒及華山に學び、天保頃人物畫を以て知らる。

此畫帖は南葵文庫の舊藏なり。(「増補櫻に關する解題略」追加第一二、昭和九年)



吉野夢見草

僧 元祿四年

寫本一冊

僧雲水の吉野山中の名所の櫻に關する歌集にして、吉野山知足院法印最信の元祿七年の序に次で詠者雲水の序あり。

「春の夜の夢のうちなる夢のかへりて夜の明かたに柴の扉をひらき遠山の花を望みて心の行まゝに春はなをよしのゝ山の夢見草さむるもおなし花のしら雲」より始まり、以下比蘇櫻・吉野川櫻・六田柳・吉野欵冬・山口櫻苗・一坂櫻・四手掛櫻・長峯櫻・丈六山櫻・老婆懷櫻・峯藥師櫻・茶亭櫻・鳥棲山櫻・嵐山櫻・千本櫻・責衝櫻・日本ガ櫻・吉野櫻苗・龜石櫻・花園山櫻・櫻田櫻影・隱松櫻・山井櫻・關屋櫻・發心門櫻・藤尾坂櫻・御船山櫻・饅野山櫻・櫻ヶ嶽櫻・二王門櫻・藏王堂櫻・四本櫻・天神櫻・大塔櫻・地藏堂櫻・觀音堂櫻・實城寺櫻・駄山櫻・朝原櫻・山里櫻・吉水院櫻・櫻本櫻・御影山櫻・袖振山櫻・勝手社櫻・塔尾山櫻・御陵櫻・松翁舊蹟・竹林院櫻・椿山寺櫻・梵王宮櫻・猿引坂櫻・布引櫻・龍尾櫻・禪定寺櫻・雨師夢違櫻・白山宮櫻・大將軍櫻・瀧櫻・雲井櫻・中院谷櫻・龍返岩櫻・花矢樓櫻・鹿尾坂櫻・世尊寺櫻・鷲尾山櫻・鷲尾鐘櫻・人丸塚櫻・子守社櫻・高算堂櫻・牛頭天

王櫻・高城山櫻・躑躅岡櫻・遙谷櫻・岩藏櫻・大杉殿櫻・櫻谷櫻・金精明神櫻・蹴拔塔櫻・安禪寺櫻・苔清水櫻・西行庵櫻・青根峰櫻・青折嵩櫻・蜻蛉小町櫻・蜻蛉瀧櫻・秋津小野・瀧御門櫻・西河瀧櫻・國栖里櫻・檉尾里櫻・夏箕川櫻・吉魚張櫻・夏箕上櫻・浪柴野櫻・司馬野櫻・宮瀧櫻・清河原櫻・日晚野櫻・瀧門郷櫻・妹背山櫻・象小川櫻・櫻木宮櫻・象山櫻・猪飼岡櫻・大河邊藤・水分山櫻に至るまで各一首・二首・三首又は更に多く詠みたる和歌總計百九十五首を録せり。一々の名所毎に紀行文を掲げ、地理を記し、故事を述べ、古歌を引證し、昔を偲べり。卷末に「元祿第四辛未彌生」とあり。

「吉野夢見草」は佐村八郎著「圖書解題」に載せられ、五卷とあれども、佐村氏の見たる本は何れに藏せらるゝや分明ならず。内閣文庫所藏の「吉野夢見草」(寫本一冊)を閲覽せるに、二百五十六首の和歌のみにして、前記の紀行文なし。(増補櫻に關する解題略)追加第一一、昭和八年)

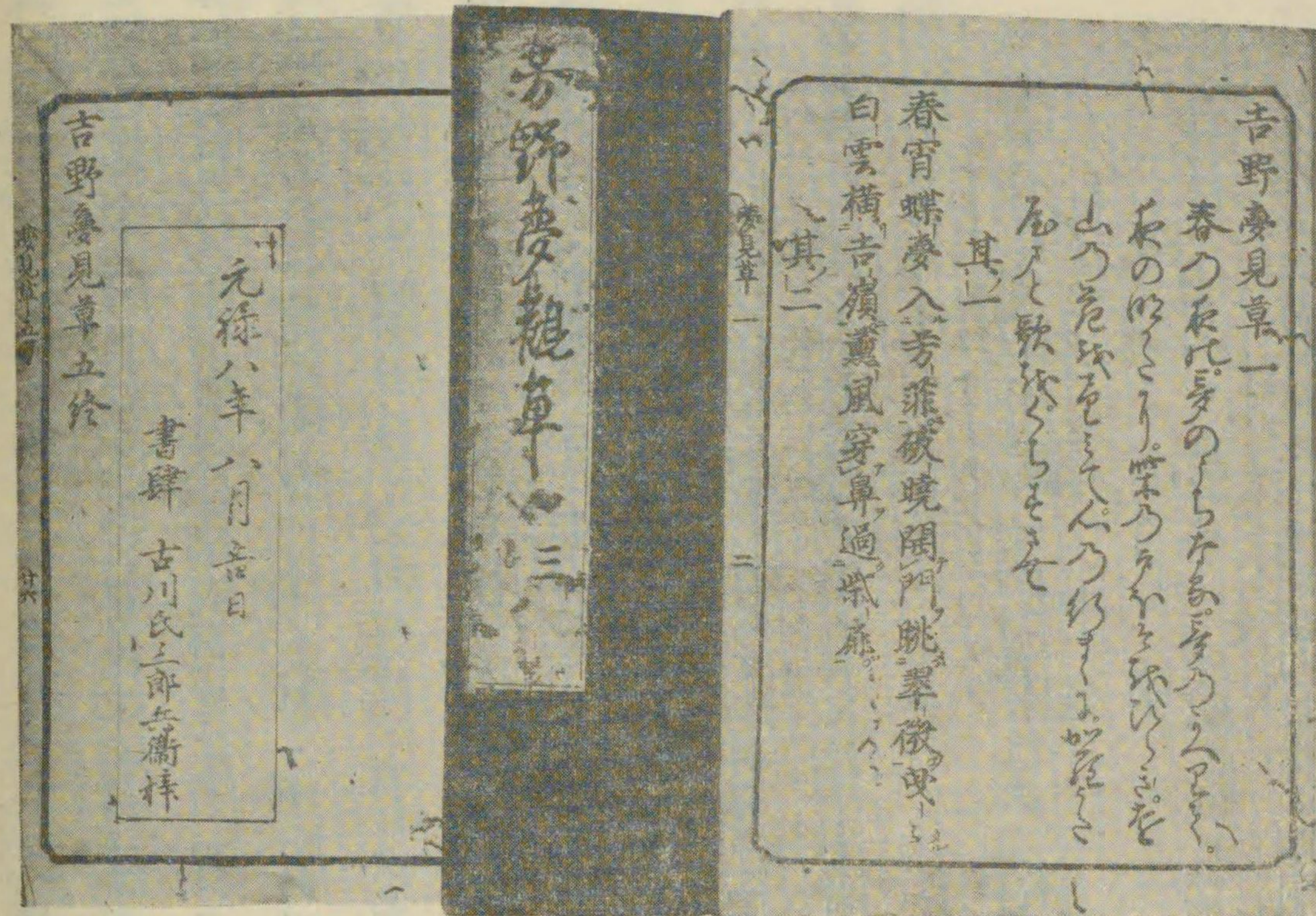
吉野夢見草

僧 元祿年間版

五冊

前に解題せるものゝ版本なり。外題には 金峰山名所和歌集とあり。武藏野隱士露滴の序に次で、元祿七年吉野山前學頭代知足院法印最信の題詞と、詠者雲水の元祿四年の自序とあり。





吉野夢見草

第一冊には「春の夜の、夢のうちなる、夢のかへりて、夜の明がたに、柴の戸ぼそをひらき、遠山の花を望みて、心の行まゝに、から歌やまと歌を、くちすさむ」の發端より「其一」「春宵蝶夢入芳菲(下略)」「其二」「晨啓柴扉望遠山(下略)」の七絶二首「春はなをよしの、山の夢見くささむるもあなし花のしら雲」「柴の戸ををし明かたに見よしの、山のかひある花のしら雲」の和歌二首を掲げ、次で「比蘇櫻」より「觀音堂」の櫻まで一々名所の案内記・詩・和歌を録せり。第二冊の首には第一日の夕庵に歸れる記事と詩歌に次で「實城寺、櫻」より「梵王宮、櫻」まで、第三には「猿引坂、櫻」より「櫻谷、櫻」に到りて山中の家に泊りたる記事、第三冊には宿りの夢覺めて起

き出たる曉の景色の記事より首め「金精明神、櫻」より「夏箕川、櫻」まで、第四冊は「吉魚張、櫻」より「水分山、櫻」まで探勝したる後庵に歸りて、「連日尋芳吉野中、櫻花簇々玉玲瓏、色香一樣景山異、處々詩歌又不同」「けふいく日花をたつねてみよしの、あなし色香に山をことなる」「日かすへてよしの、山の夢見草」ところの花のねことに」と詠みて結びぬ。

書中の名所案内の文中には古歌古事を引いて來歴を述べたるが、殊に「塔尾山、櫻」「御陵、櫻」の條下にも吉野朝の昔を偲ぶ至情が表れてゐる。(「増補櫻に關する圖書解題略」追加第一二、昭和九年)

吉野夢見草

僧雲水 元禄八年版

五冊

前記のもの、奥附ある版本なり。表紙の外題の文字の書體は前版本の分と異なり。但し内容は同じ。奥附には「元禄八年八月吉日書肆古川三郎兵衛梓」とあり。

本書の解題は和田萬吉著「古版地誌解題」(大正五年第一五三頁)に載せたり。

(「増補櫻に關する解題略」追加第一三、昭和十一年)



小金井觀花圖卷

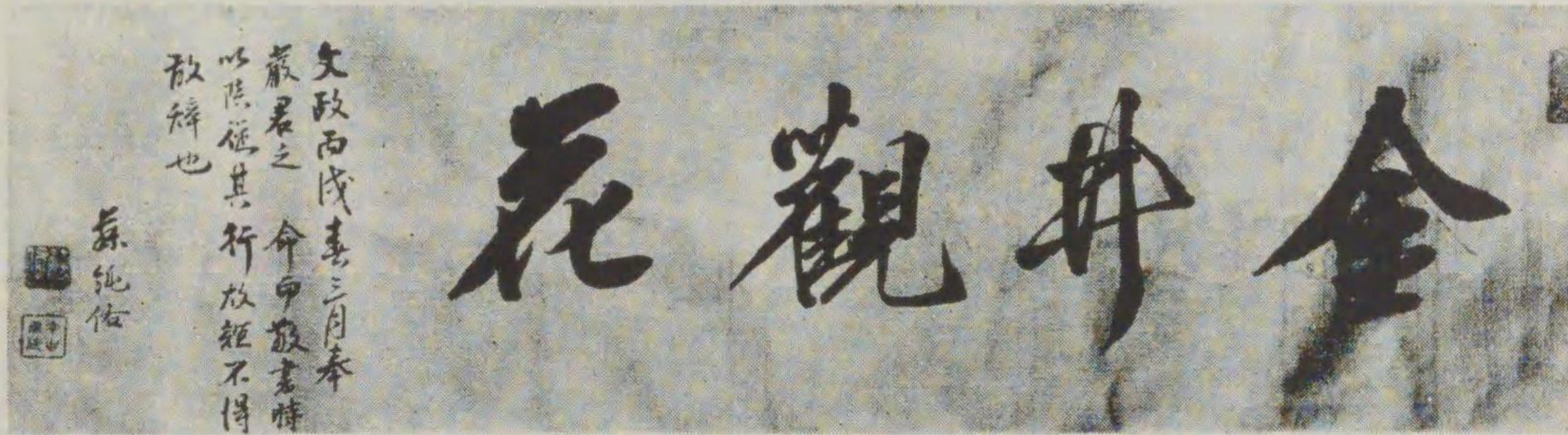
有馬 文政九年 譽純

幅八寸五分

一 卷

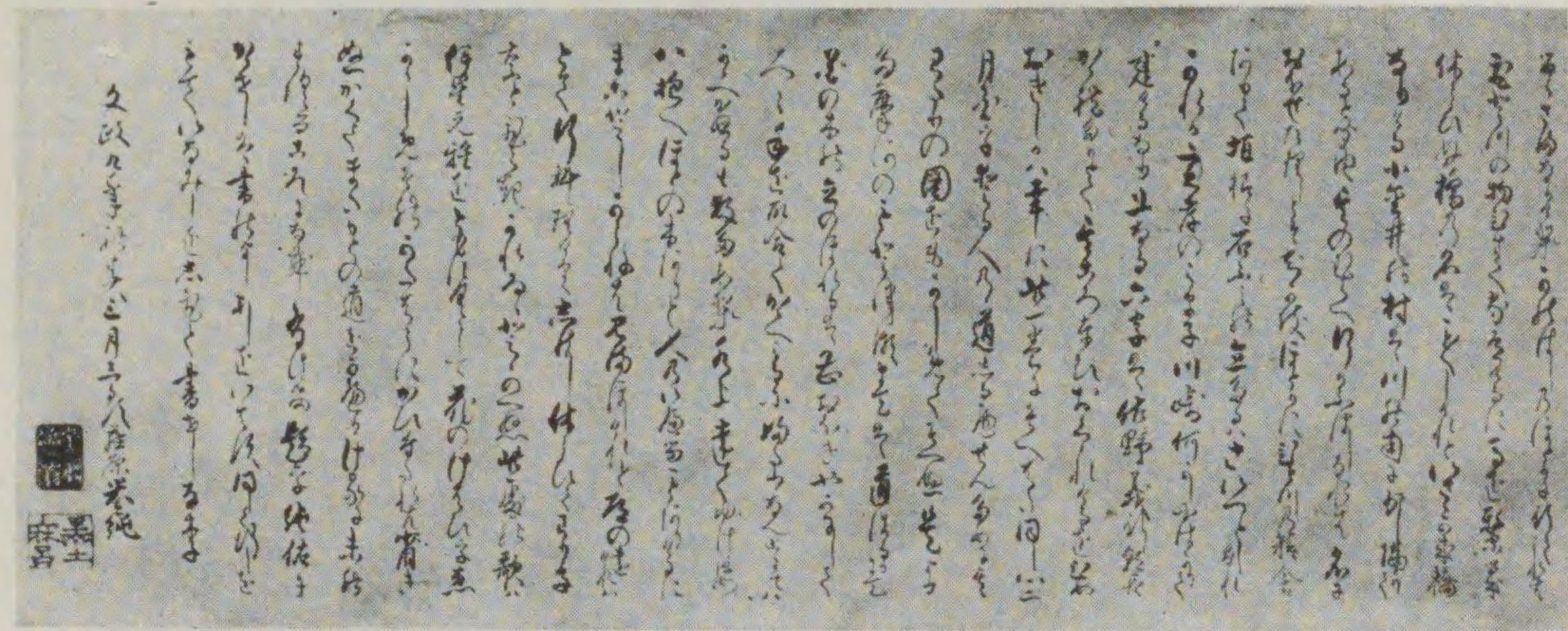
文政九年三月越前丸岡藩主有馬左兵衛佐譽純が次男純佑其他を伴ひ、江戸宇田川町の藩邸より一同騎馬にて小金井まで遠乗し、花見をなせる紀行と觀花の圖と詩歌の詠草とを集めて一卷となせるものなり。卷頭に純佑の「金井觀花」の題字と譽純の撰める自筆の紀行文あり。次に小金井の櫻の並木の圖あり。淡彩を施せる土佐畫風の優雅なる繪にして、並木の入口の花の疎なるところより中央の満花の景色までを表せり。小金井橋畔に畫ける家屋は今日に存せる柏屋なるべし。屋前に乗馬五頭を繋げるところを寫せり。筆者は「文政丙戌暮春陪從奉 命寫焉 豊山星夙」とあり。圖の終に譽純の「瓢像廻天乃河原乃末南羅舞岸邊仁續久花濃新樂雲」の題歌あり。卷末に多數の詠草あり。先づ詩の部には有馬左衛門佐德純（譽純嗣）・有馬維龜純祐・皆吉多門・坂部多門・津田主膳・青木松伯・長田安幾丞・福島孫太夫・山本貫兵衛・淺海山三郎・青木良山・淺海沖之助・關小文治・林田甫助・岸岬の五人、和歌の部には德純・皆吉多門・長田安幾丞・淺海沖之助・橋本波平・青木良山・林田甫助の七人、外に女流の和歌には譽純女滋子・譽純侍女穰子・滋子侍女秀子・譽純侍女嶮子・大夫人侍女繩子・譽純侍女止梅子・德純侍女千枝子・大夫人侍女濱子・大夫人元侍女瀧子・滋

有馬譽純撰小金井觀花圖卷



文政丙戌暮三月奉  
嚴君之命申敷書  
以誌盛其行故紀不  
散辭也

譽純  
純佑



文政九年三月十八日  
有馬譽純



盛花の邊橋井金小(下) 序純譽(中) 字題佑純馬有(上)



子侍女織・徳純侍女成子・徳純侍女勤子・譽純侍女楮子・譽純侍女里遠子の十五人の自筆詠草を載せたり。本圖卷は圓陵文庫舊藏なり。

因に記す譽純は允純まさずみの長男、明和六年生、天保七年歿、享年七十一、福田源三郎著「越前人物誌」によれば、譽純字君徳・墨磨・圓陵・露城主人と號す。東都の邸宅によつて竹齋・圮橋老人・宇水漁翁の別號あり。天明二年將軍家治に謁す。年々參勤交代怠りなく、防火の役警衛に従事す。「祝融要務」一卷の著述あり、「圖書解題」に載す。文化七年寺社奉行、同九年西丸若年寄に轉じ、大名小路の邸に移る。文政二年病により職を辭せるが、後再び帝鑑の間に班列し、宇田川町の別邸に住居す。同十三年致住す。勤務五十九年、麻布永坂に隱棲し文雅を樂む。上野本覺院先塋の側に壽城を建つ。藩士伊星雙岳に命じ肖像を畫かしめ、林祭酒蕉軒と親交あるにより賛辭を成さしむ。

譽純が文字に長じ、歌詞を能し、繪事に巧なりしは其筆蹟の今日に遺れるものによりて見るべし。「富嶽真景四時之圖」一卷の如きは其一にして、摹寫にかゝるも用筆頗る巧妙なり。又「十二月賀歌寫」と題する一卷あり。憶ふに譽純は丸岡藩の明君にして、武道を勵し文學を獎め、治績の見るべきもの少からず。前記の小金井觀櫻の詠草の如きも亦藩中に於ける文學獎勵の一斑を窺ふに足る。

此圖卷に對して興味あるは東京より小金井の交通狀態は往時と今日とは非常の差違なるも、獨山櫻の列樹の位置と上水道兩岸の光景等が現時前記の圖卷の成れる百九年前の文政九年と大體に於て



同様なる一事なり。是れに付けても小金井の櫻が東京市公園課の熱心なる保護を受けつゝあるは喜ばしき事なり。

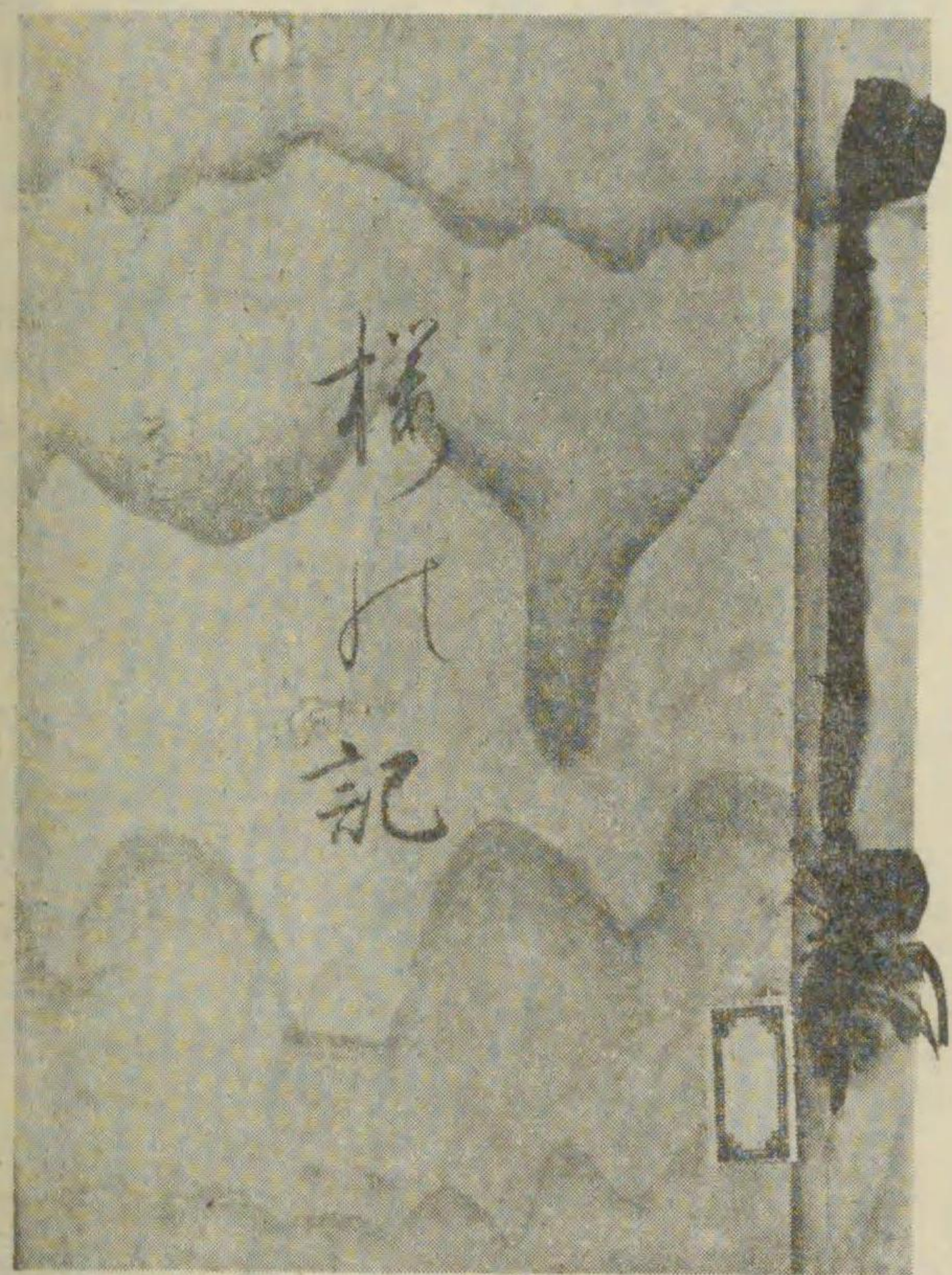
有馬譽純の事蹟は上田三平氏の報知によれり、茲に同氏の好意を謝す。

(増補櫻に関する圖書解題略「追加第一二、昭和九年」)

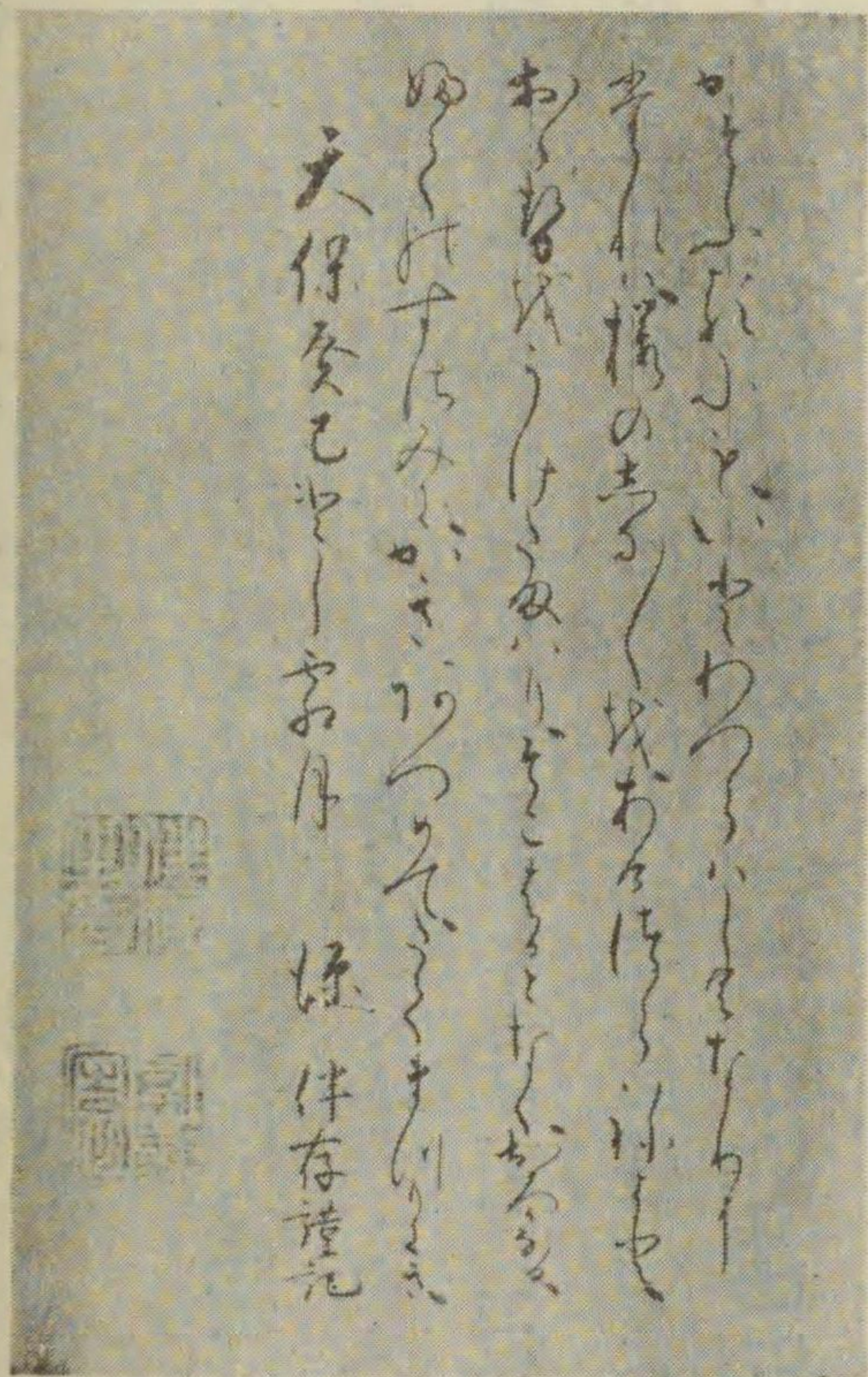
櫻花記

源(畔田)伴存自筆  
天保四年

一冊



紙表の「記花櫻」筆自存伴田畔



畔田伴存自筆「櫻花記」の序

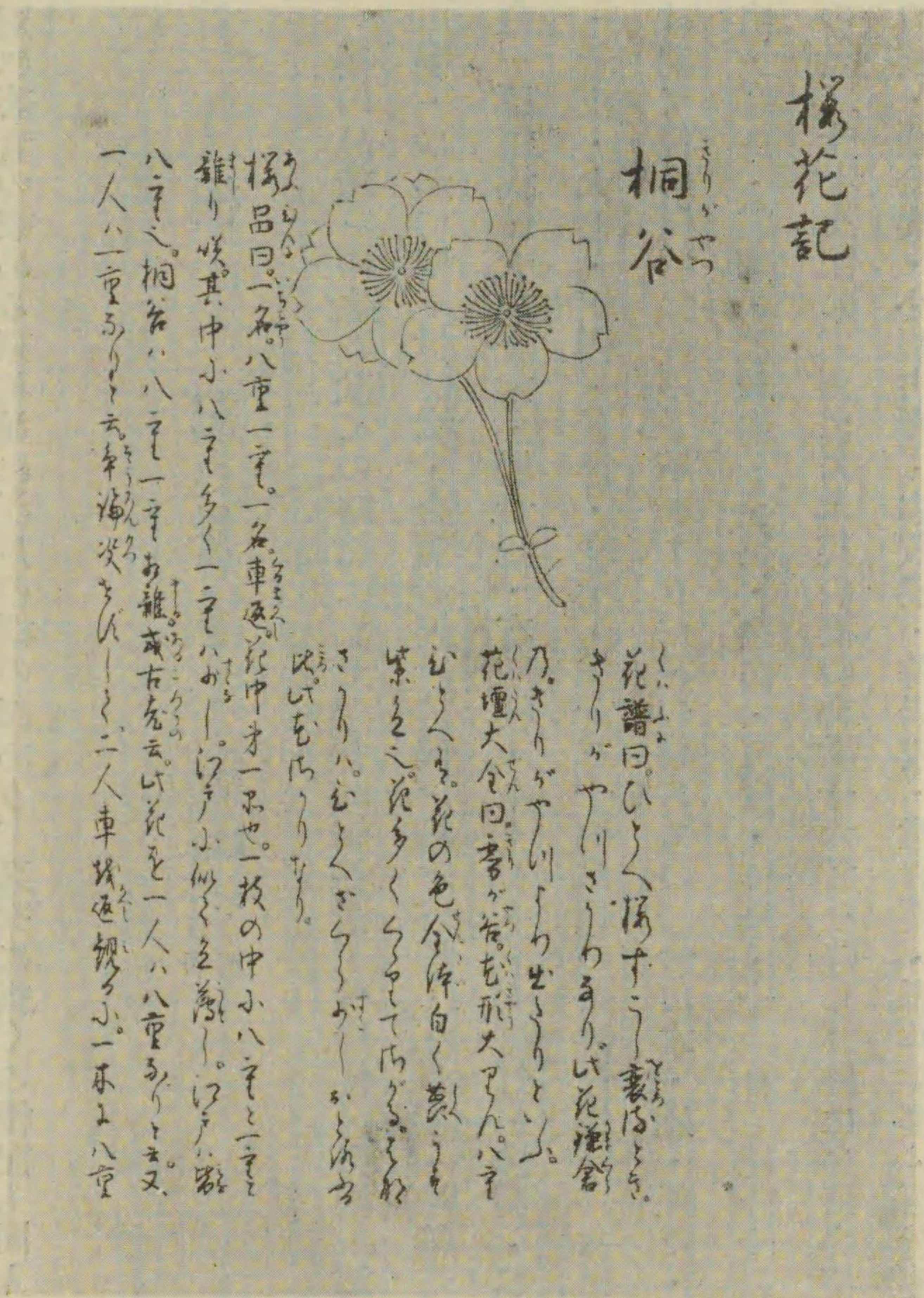
桐谷以下約百四十餘種の櫻名を挙げ、「花譜」・「花壇大全」・「櫻品」等の櫻の品種に関する説を記し、往々撰者の見をも添へたり。書中の櫻の圖はすべて「櫻品」より採れり。後に觀櫻の史的考證

一篇あり。

此自筆本は其序に記せる如く藩主の命により作れるものにして、櫻の古來の文獻に就て引用せるを見るべし。

畔田伴存は翠山

と號し、紀州の本草家にして、物産の學に長じ、草木



桐谷以下約百四十餘種の櫻名を挙げ、「花譜」・「花壇大全」・「櫻品」等の櫻の品種に関する説を記し、往々撰者の見をも添へたり。書中の櫻の圖はすべて「櫻品」より採れり。後に觀櫻の史的考證一篇あり。

魚介に関する著書多し。又事物の考證に努め「古名録」を撰む。各地の山中に採藥し、奇草を發見



せるもの多し。安政六年熊野本宮に採藥中歿せり、幕末掉尾の本草家なり。  
別に著者の撰める京都並に江戸の櫻の記あり、又次に掲ぐる櫻記も同人の自筆なり。

櫻 記 (假書名)

畔田伴存自筆  
年號不明

一 冊

櫻の品種その他に就ての略記にして、首に熊谷櫻・彼岸櫻・糸櫻・婆櫻・不斷櫻・山櫻・兒櫻・芝山櫻・さかて櫻・伊勢櫻・金龍寺櫻・眞櫻・桐ヶ谷櫻・江戸櫻・法輪寺・江戸法輪寺・殿櫻・普賢象・鹽竈櫻・大山府君・楊貴妃・有明櫻・糸くしり・大提灯・緋櫻・手毬櫻・廊間櫻・虎尾・香櫻・若櫻・犬櫻・樺櫻・黄櫻・庭櫻・總計三十四品種の略説を挙げ、次に名はあつて其實なきもの、名は替て花の同じきもの、所によりて花の替るもの、大山水・蓮・狸々・南殿・岩石・正宗・爪紅・關山・奈良・麒麟・仁和寺・金王・名鳥・三度・五所・十六日 總計十六を挙げ、次は萬葉其他の櫻の名二十七を記し、更に夫木集の櫻の和歌十六首を録し、終に名所の櫻として南殿櫻・吉野櫻・嵐山櫻・須磨櫻・小鹽山櫻・志賀櫻・狩場櫻・推古櫻・雲林院櫻・西行櫻・普賢堂・衛門櫻・小督櫻・黒染櫻・千本櫻・渦櫻・駒とめ櫻・行幸櫻・七本櫻・交野櫻・汀櫻・地主櫻・東山櫻・總計二十三の名を挙げ其所在を示し、又其和歌を記せり。是等の名所の櫻は概ね京都附近にあるものなり。

此書は「櫻品」に據れるものあるも、筆者の自ら調べたるものを録せる所多し。書名・筆者名・年月を缺けるも、其内容及字體により、紀州の畔田伴存の自筆たるを知る。

〔増補櫻に関する圖書解題略〕追加第二、大正十二年

三熊花顛の飛驒入りに就て

去る昭和三年十月二十一日飛驒の高山より東北約二里丹生川村にぶかはにある千光寺の五本杉の調査に行つた。此杉の在る處から十町ばかり山を登ると、千光寺に達する。眞言宗の名刹で、昔は多數の坊があつたが、火災にかゝり、今では僅に本堂と庫裡とが残つてゐる。

此寺へ来て珍らしく思つたのは三熊花顛が櫻を描がいた襖が保存されてゐたことである。斯様な山中に櫻の畫聖とも云ふべき花顛の畫殊に其大作が見られるのは不思議であつた。櫻の畫は襖に限らず、尙他にもあり。何れも花顛の筆で、畫寶として珍重すべきものである。

依つて當時同行の波磨實太郎氏に此襖の櫻畫の撮影を乞ひ、又畫の來歴に就て寺で質したところ、昔花顛がこゝへ來遊して描がいたことがわかつた。

花顛は京都に住み、櫻の寫生の爲に度々奈良其他へ旅行したが、遙々飛驒まで來たことに就ての證據は傳はつてゐない。それで兼て面識の間であつた飛驒の郷土史研究家岡村利平氏に花顛の飛驒



旅行の事蹟を明にせんことを依頼した。それから同氏は高山を始め諸處に遺る資料の蒐集に着手され、考證の顛末を「花顛三熊思考の飛驒入り」と題して「飛驒史壇」一及二（昭和四年）に掲載した。同氏の原稿には花顛の手簡並に櫻畫の寫眞多數を添へてあつたが、印刷に際して省かれた。

今岡村氏の調査された花顛の飛驒入に關する事蹟中主な點を擧げると左の如くである。

- 一、花顛が飛驒に來たのは天明七年五月中で、七月十日頃まで六十日ばかり滞在したと思はれる。
- 二、飛驒入りは同國に知人があつた爲らしい。
- 三、千光寺の襖の櫻畫は天明七年七月（陰曆）に描がいたものらしい。
- 四、花顛が飛驒滞在中人の依頼によつて描がいた櫻畫は少くなかつたやうであるが、其中已に散逸したものがある。
- 五、天明八年に出來た伴蒿蹊と花顛との共著「近世畸人傳」に載せた天和貞享頃の千光寺在住の僧俊乘並に同寺に永く寄寓した僧丹空の傳は花顛が飛驒滞在中に得た資料によつたものらしい。
- 六、花顛は「芭蕉繪詞傳」の著者蝶夢（後に幼阿）とは昵懇であり、又高山の人加藤步簫（通稱小三郎）並に二木長嘯（通稱長兵衛）とも深交であつた。此高山の二人に宛て、花顛の送つた手簡がある。（昭和十二年十二月十五日）



影撮氏郎太實磨波

畫櫻の襖の寺光千筆顛花熊三



## 櫻の文獻に就て

國華としての櫻の種々の方面よりする研究又櫻の名所・名木・巨樹・老樹の調査の爲には櫻に關する古今の文獻を涉獵するの必要あり。

予は明治三十六年頃荒川・小金井・吉野・櫻川其他の櫻の研究に着手せる時より、櫻の文獻の蒐集を始め、當初は主に品種の寫生圖即ち櫻譜の類を集めたるが、古來櫻の觀賞・讚美・愛護に就ての國民性考證の資料として遂には汎く櫻に關する文獻に互ることとせり。

是等の文獻の初の部分は、去る大正九年三月二十八日東京飯倉の徳川頼倫侯邸内の南葵文庫に於て櫻に關する講演會を開かれたる時陳列して展覽に供し、同時に其目錄と解題略とを同文庫にて印刷に附せられ、來會者に頒かたれたり。

次で大正十年「櫻花圖譜」を發行せるとき、之に附せる「櫻花概説」には「増櫻に關する圖書解題略」を附録となせるが、爾後年々蒐集したる櫻の文獻は追加第一より追加第十二までを櫻の會の機關雜誌「櫻」に掲載し、其後は「史蹟名勝天然紀念物」に載せ、昭和十三年三月には追加第十五に達せり。



蒐集せる櫻の文獻は次の如く分類し、通し番號を附せり。今下に掲載する追加十五までを總括して、各部門の書目數を擧ぐれば左の如し。

品	五八	名所の櫻	
寫生圖	七〇	吉野	七五
繪畫	三九	櫻川並雨引山	二〇
墨跡	五八	嵐山嵯峨東山等	三一
雜說	一四五	隅田川	一〇
詩歌	三一	上野	六
和歌	三九	小金井	三四
狂歌	二三	荒川(江北)	一一
俳句	四四	其他の名所	一八二
		總計	八七六

今茲に蒐集せる是等の文獻に就き、櫻の品種・名所・名木・巨樹等に關するもの、要點を擧ぐれば左の如し。

- (一) 珍奇なる櫻の品種の記載と其寫生圖とは寶曆の頃より世に出でたり。
- (二) 櫻の品種の美麗なる寫生圖を集めたる櫻花譜の類は寛政・文化・文政・天保の間に成れるもの多し。

- (三) 櫻の品種を正しく表せる繪畫は安永の頃より知られたり。
- (四) 舊時の和歌に詠まれたる櫻は白山櫻なり。
- (五) 狂歌・俳句に現れたる櫻には里櫻の一々の品種少からず。
- (六) 櫻の名所中吉野に關する文獻最も多し、是れ觀櫻の歴史の極めて古きによる。
- (七) 小金井の櫻に就ての文獻の稍、多きは其江戸に近かりし爲なり。
- (八) 今古の櫻の巨樹・名木に關する記事・圖繪等は單行本又は一枚摺として發行せられ、又は名所圖繪・隨筆・紀行其他の書中に散見せるもの少からず。

(史蹟名勝天然紀念物第一集第一號昭和十一年に掲載の文中昭和十三年二月末訂正を加へたるものなり)



# 櫻品記載

## 例言

櫻品に就ては嘗て自著「日本之植物界」「櫻花概説」等に記載せるものがあるが、下文の記載は主として Die japanischen Bergkirschen. Ihre Wildformen und Kulturassen. (Journal of Science College, Imperial University of Tokyo. Vol. XXXIV. 1916) 及び Untersuchungen über japanische Kirschen. (植物學雜誌) 第三四卷第四〇七號大正九年、第三六卷第四二二號大正十一年並に第四二卷第五〇四號昭和三年) に據りたるものにして、稍、細點に涉つて特徴を擧げたるところあり。

記載中の數字は予の檢せる標本に就て略、平均を取りたるものなれども、同一品種の一々の個體にては多少の差異あるべし。

記載の櫻品は分類上の順序によりたるにはあらず。記載中の用語の二三を左に解釋す。

第一總軸 花序の基脚と、第一花梗の着點との間の總軸の部分。

第二總軸 第一、第二花梗の着點の間の總軸の部分。

總長 花序の着點より萼筒の上端までの長さ。

小苞 花梗の着點にある苞。

一三×五・九仙米 幅一三センチメートル、長五・九センチメートル。

二〇―二五密米 二十乃至二十五ミリメートル。

花瓣 一五 花瓣十五枚。

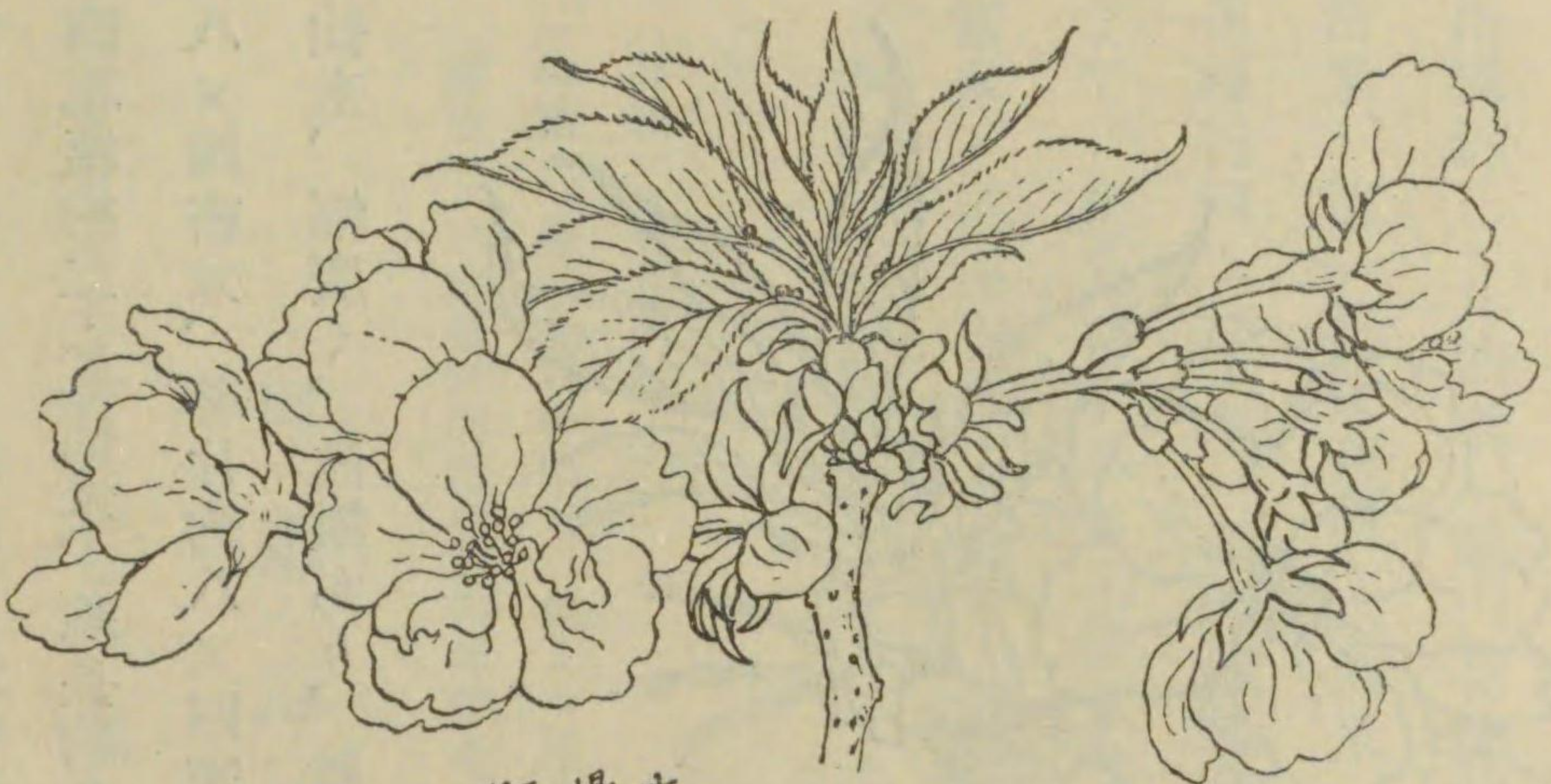
脈對 中肋の兩側にある對向せる葉脈。

挿圖(縮小) は佐藤醇吉氏の筆にかゝる。

大提燈 おほぢやうちん

*Prunus serrulata* Lindl. f. *bullata* Miyos. in die Japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1916, p. 98. 櫻花圖譜 一

稍、大木、枝淡灰色、嫩葉褐色、葉片橢圓、約一三・五×九仙米まで、葉先約三仙米、單鋸齒、齒先細長、脈對約一〇、葉柄約二―五仙米、蜜腺一―二、葉苞約二〇×八密米まで、三―七花の長柄繖房花序、四花のものにては第一總軸約三仙米、第一



大提燈



花梗約三仙米、第二總軸約五密米、第二花梗約三仙米、第三總軸約五密米、第三花梗約二・八仙米、第四花梗約二・五仙米、總長約八仙米まで、花苞約二×一仙米まで、小葉片約八×五密米まで、萼筒約八×四密米、萼片約八×四密米、花徑約五仙米、花色白又は淡紅、花瓣約五十一・二、約二・三×二・五仙米、幅廣く、波皺あり、數枚の旗瓣あり、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北堤

(花期) 四月中旬

(特徴) 有明に似たるも、花梗の長きこと、一の花序に花数の多きこと、花瓣の幅廣く波狀をなすことによりて區別せらる。

(備考) 江北堤は東京府下南足立郡江北村内にして、大正十三年十二月九日史蹟名勝天然紀念物保存法によりて荒川堤(櫻)として指定されたる處なり。

### 五所櫻 ござしよぢくら



五所櫻

*Prunus serrulata* Lindl. f. *radiata* Miyos. in die japan. Bergkirschen. etc. Journ Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1916, p. 112. 櫻花圖譜 1

大木、枝褐色、嫩葉黃褐、葉片約一一×七・五仙米ま

で、葉先約三仙米、單鋸齒、齒先細長、葉柄約四仙米、蜜腺一一・二、葉苞約一・八×一仙米まで、三―五花の短繖形花序又は繖房花序、四花の繖形花序にては總軸約四密米、第一花梗約五仙米、第二花梗約三・九仙米、第三花梗約四仙米、第四花梗約三・八仙米、五花の繖房花序にては第一總軸約八密米、第一花梗約四・六仙米、第二總軸約三密米、第二花梗約四・五仙米、第三總軸約七密米、第三花梗約四・三密米、第四總軸約三密米、第四花梗約三・七仙米、第五花梗約四・一仙米、總長約七仙米まで、花苞約一八×七密米まで、小苞楔形約一×一仙米まで、萼筒約九×五密米、萼片約一〇×五密米、花徑約五・五仙米、花瓣約一五、約二・四×二・一仙米、先端二乃至多裂、外瓣帶紅、内瓣殆白、中肋に一の紅線を有するものなり、雌蕊は最長雄蕊よりも稍短し。

(所在) 江北堤

(花期) 四月中旬

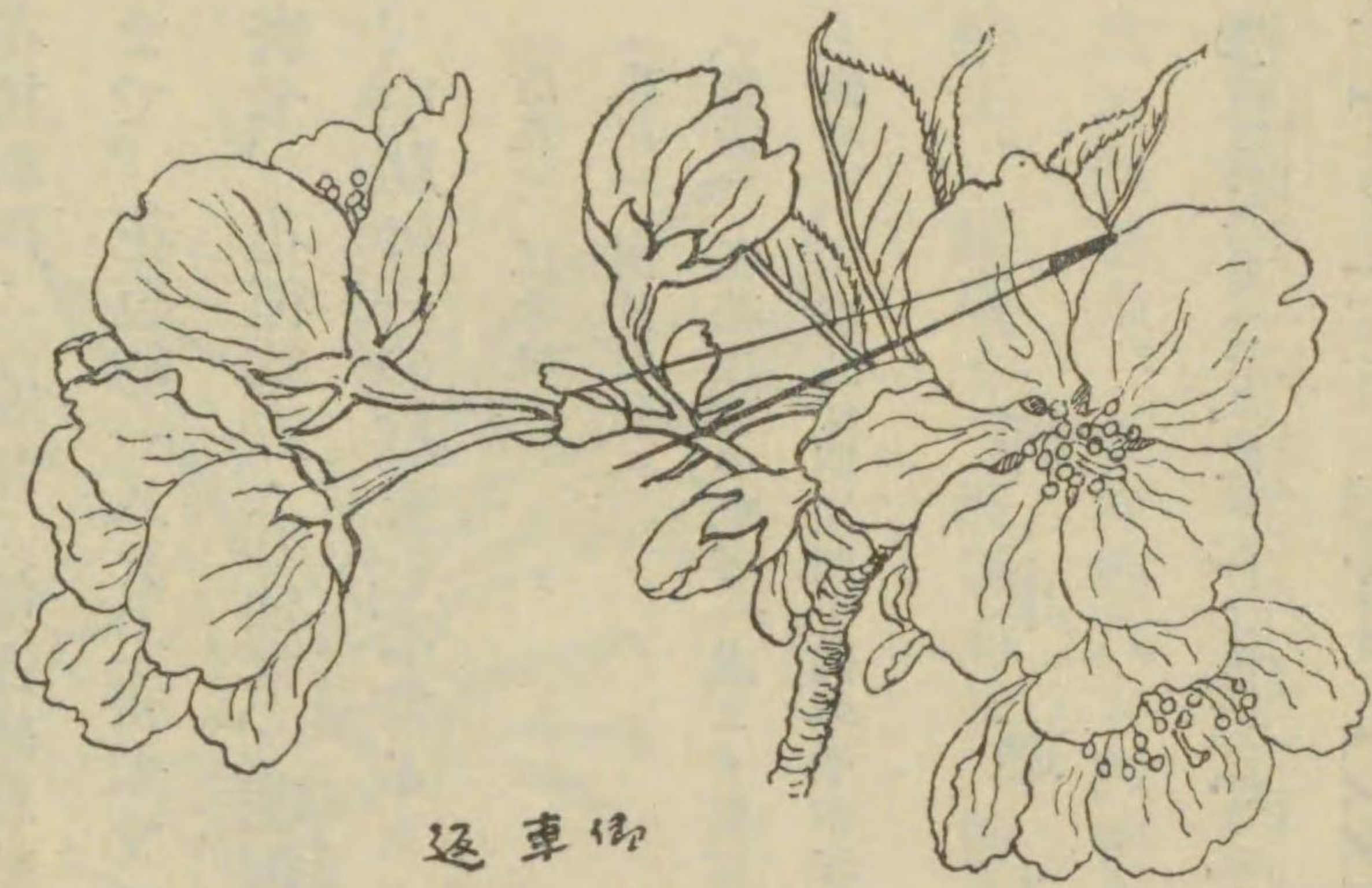
(特徴) 長花梗花の殆ど一處より射出するにより著し。

(備考) 本櫻品は明治四十四年予が江北堤上の櫻並木中に於て發見せるものにして、『櫻品』第六五頁所載の五所櫻に該當す。

### 御車返 みくるまがへし又車返 くるまがへし

*Prunus serrulata* Lindl. f. *diversiflora* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1916, p. 102. 櫻花圖譜 1





返車御

枝條斜に上方に向ふ、枝暗褐、嫩葉褐緑、葉片約一〇×五・五  
 仙米まで、葉先約二仙米、單鋸齒、齒片小、先端細尖、脈對約  
 一〇、葉柄約三仙米、蜜腺二、葉苞赤褐、約二〇×七密米まで、  
 二―四花の繖房花序、三花のものにては第一總軸約八密米、第  
 一花梗約二・三仙米、第二總軸約三密米、第二花梗約一・八仙米、  
 第三花梗約二仙米、總長約四仙米まで、花苞約一四×七密米ま  
 で、小苞約七×七密米まで、萼赤褐、萼筒約八×四密米、萼片  
 約七×四密米、花徑約五仙米、花白、又淡紅を帶ぶるものあり、  
 花瓣五、約二・五×二・五仙米、屢、副瓣あり、圓形、表面波皺  
 あり、萼稍、橢圓形、紅色、雄蕊約三五、雌蕊は最長雄蕊と同  
 長。

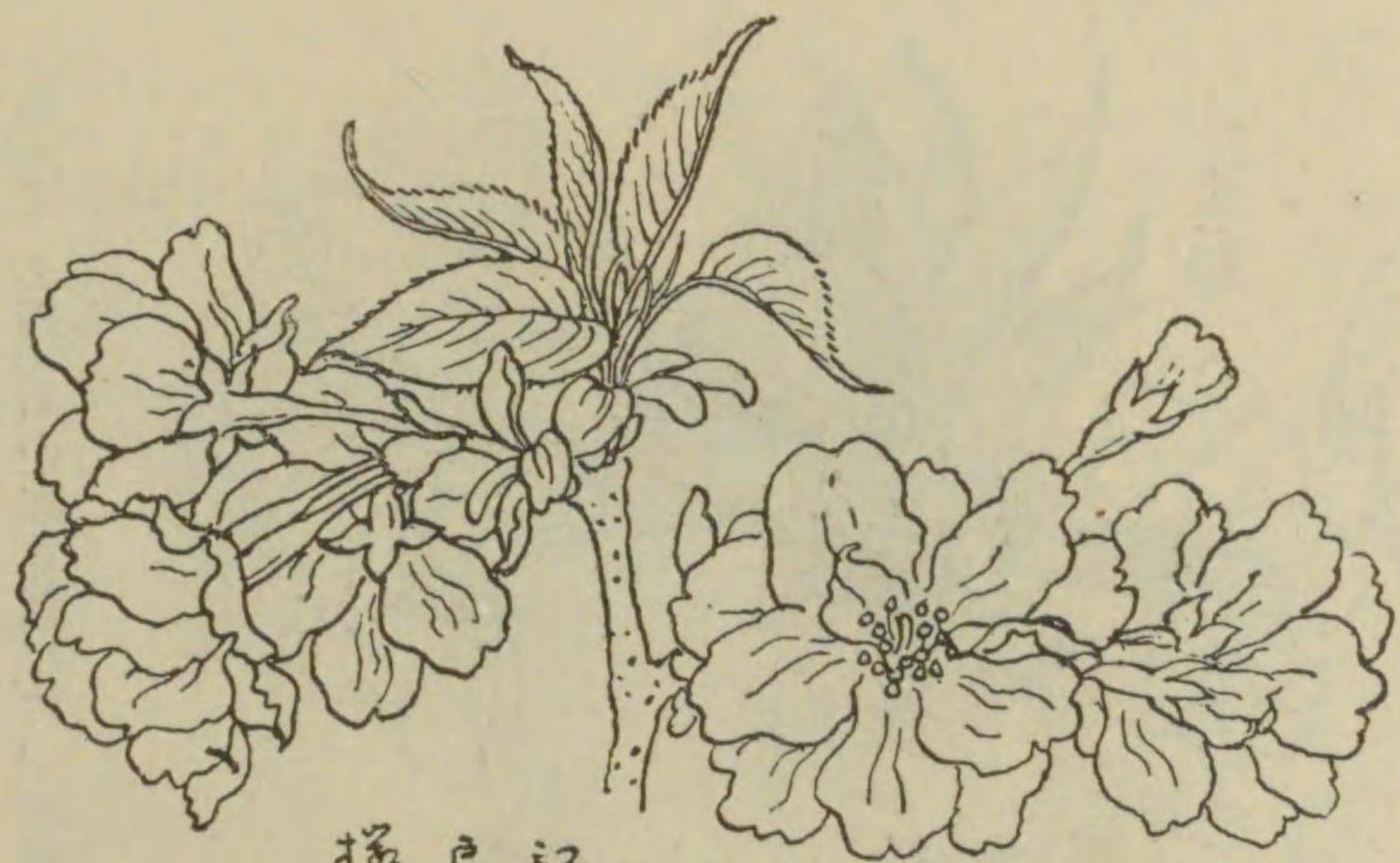
(所在) 江北堤

(花期) 四月中旬

(特徴) 花梗短くして大きこと、五瓣花と六七瓣花と混生すること、花瓣圓く大きく、膨れ、半ば紅色を帶ぶることによりて著るし。

(備考) 本櫻品は京都及其附近に多く見る。花の大きさ、色の濃淡に差異あり。

江 戸 え ど



江戸櫻

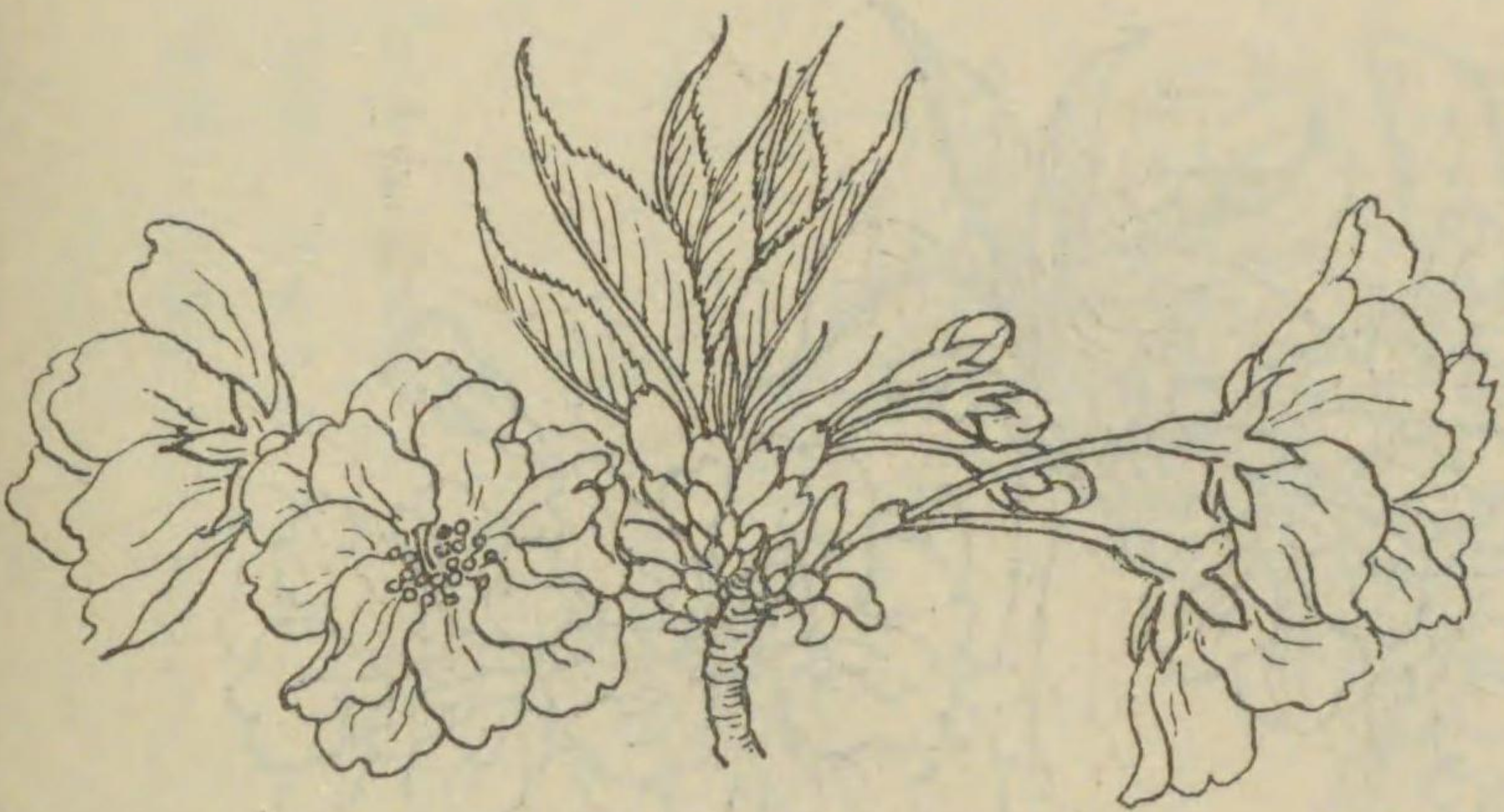
なす、約二×一・四仙米、瓣端二裂又は不規則に多裂す、外瓣紅色、内瓣淡紅、萼濃紅、倒圓錐形、單雌蕊、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

*Prunus serrulata* Lindl. f. *nobilis* Miyos. in die japan. Berg-  
 kirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV.  
 1916, p. 110. 櫻花圖譜 一

大木、枝擴がり樹頭扁平、枝灰褐、嫩葉褐紅、葉片約一〇×七  
 仙米まで、葉先約三仙米、單鋸齒、齒先細長、脈對約一一、葉柄  
 約三仙米、太し、蜜腺二―四、大、葉苞約一〇×五仙米まで、三  
 ―五花の繖房花序、四花のものにては第一總軸約一一仙米、第一  
 花梗約二・三仙米、第二總軸約一密米、第二花梗約一・五仙米、第  
 三總軸約四密米、第三花梗約二仙米、第四花梗約一・八仙米、總長  
 約四・五仙米まで、花苞約一〇×五密米まで、小苞約六×五密米ま  
 で、萼筒約七×四密米、萼片約五×三密米、花瓣約一五、三列を



(所在) 江北堤、其他東京  
 (花期) 四月中旬  
 (特徴) 短花序、小萼片  
 (備考) 本櫻品の如き花にて、密圍花叢を成すものを手毬と云ふ。



極女祇

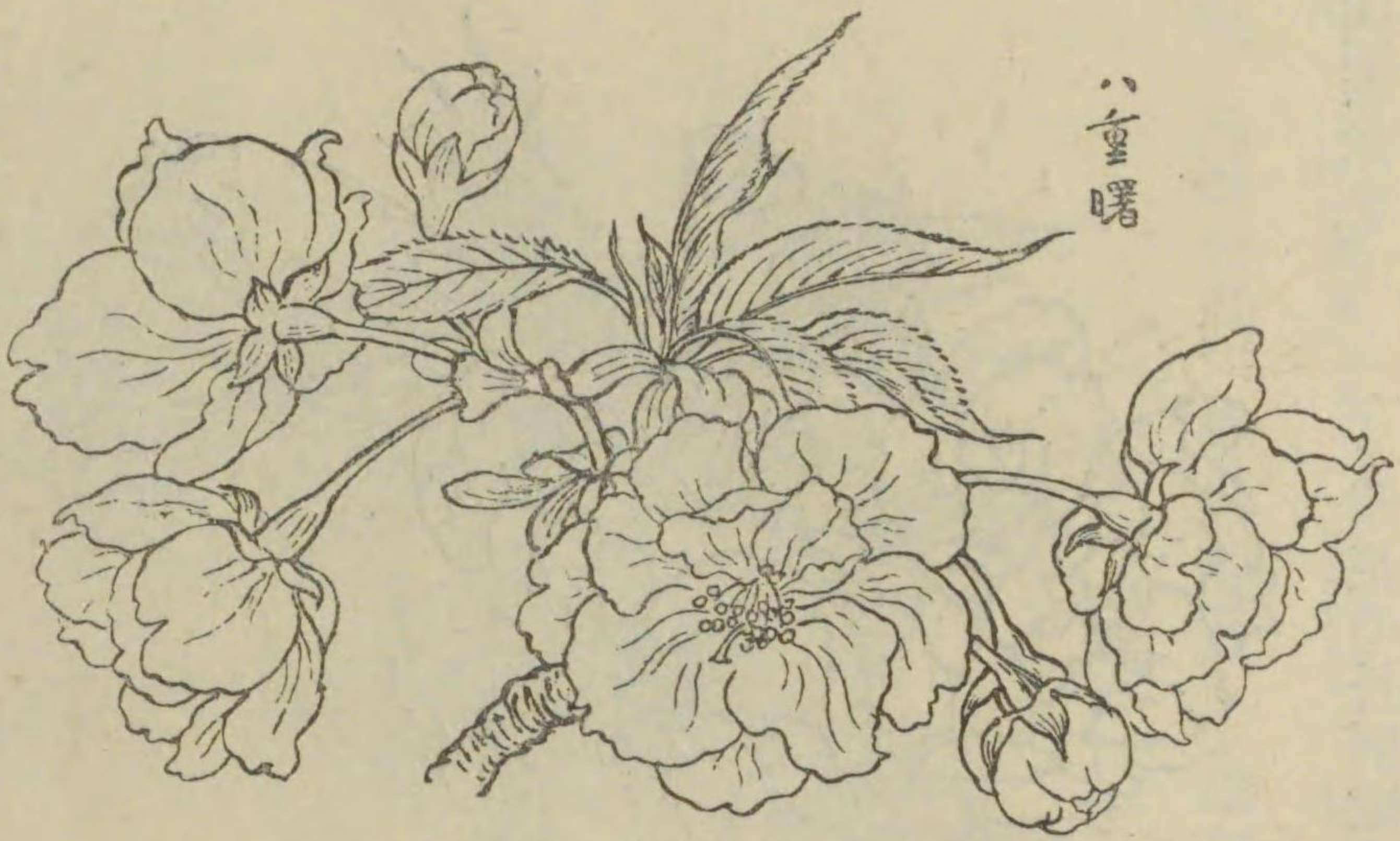
祇 女 ぎぢよ

*Prunus serrulata* Lindl. f. *campanulata* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1916, p. 25. 櫻花圖譜 一

小木、枝灰色、嫩葉褐緑、葉片約九×五・五仙米まで、葉先約三仙米、單鋸齒、齒先細長、脈對約一〇、葉柄約三・五仙米、蜜腺二―四、葉苞狹細、約一六×五密米まで、三―四花の偽繖花序、三花のものにては第一總軸約二・二密米、第一花梗約三仙米、第二總軸約二密米、第二花梗約二・八密米、第三花梗約二・七仙米、總長約六仙米まで、花苞約一五×四密米まで、小苞約三×二密米まで、萼筒約七×四密米、萼片約七×三密米、花徑約三・五仙米まで、稍、鐘狀、帶紅、花瓣約八―一五、

約二×一・五仙米、瓣端不規則に多裂す、雌蕊は最長雄蕊と同長。

八重曙



八 重 曙 やへあけぼの

*Prunus serrulata* Lindl. f. *versicolor* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 104. 櫻花圖譜 一

稍、大木、枝褐灰色、嫩葉褐緑、葉片約一二×八・五仙米まで、葉先二・八仙米、單鋸齒、葉柄約二・八仙米、蜜腺二―三、葉苞約一八×一〇密米まで、三―五花の繖形花序、四花のものにては、第一總軸約一仙米、第一花梗約三・二仙米、第二總軸約六密米、第二花梗約二・八仙米、第三總軸約六密米、第三花梗約二・五仙米、第四花梗約二仙米、總長約五・五仙米まで、花苞約一七



×八密米まで、小苞約一〇×八密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約六×四密米、花徑約四・五仙米まで、斑紅、花瓣約一二、約二・三×二仙米、瓣端三裂、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北  
(花期) 四月下旬  
(特徴) 花色斑紅

松 月 しょうげつ

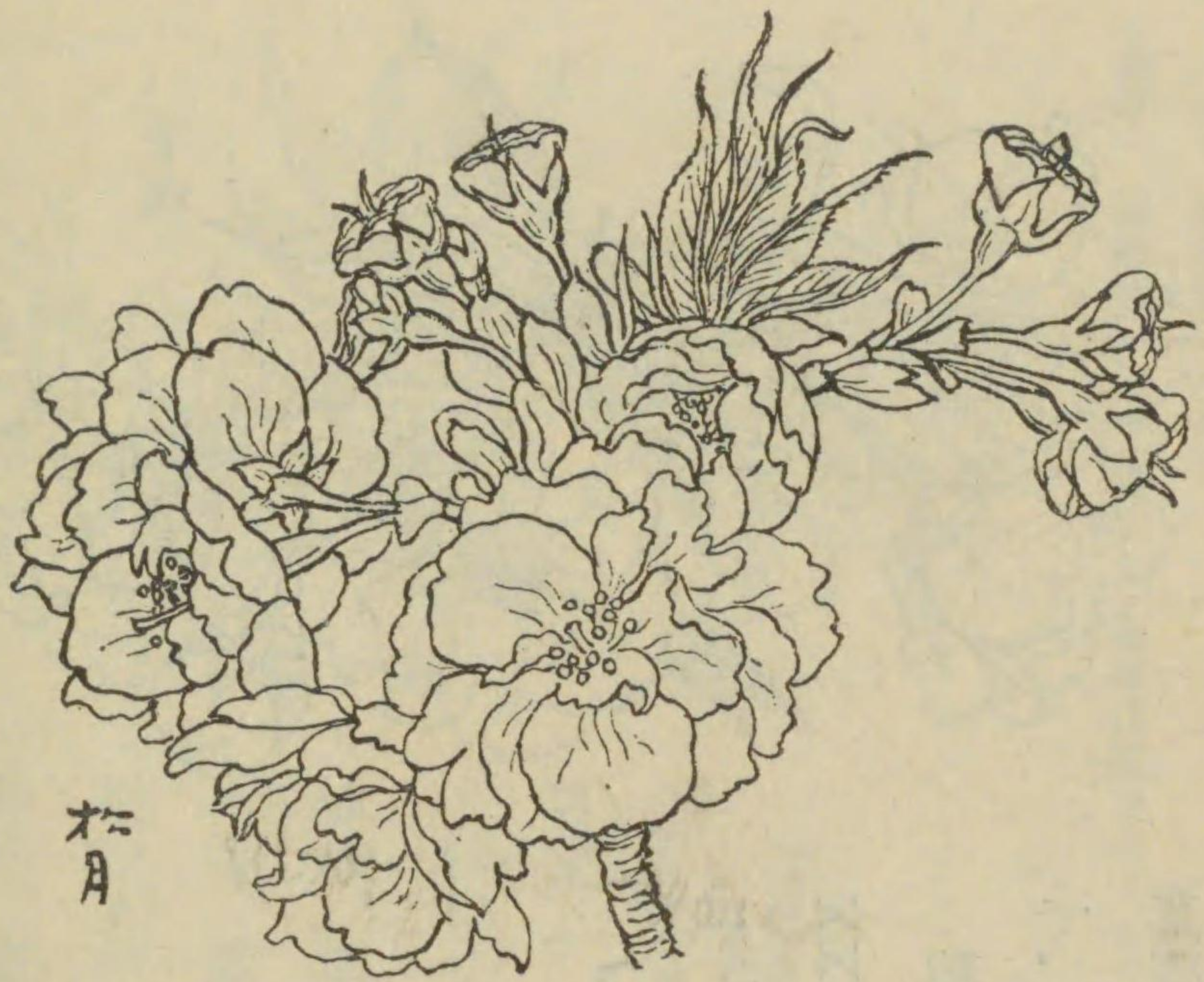
*Prunus serrulata* Lindl. f. *superba* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 105.

櫻花圖譜 二

稍、大木、枝擴出、樹頭扁平、枝灰色、嫩葉綠色、

葉片約一二・五×七・五仙米、葉先約二・五仙米、單鋸齒、齒先細長、葉柄約三仙米、蜜腺二―三、葉苞一二

×四密米まで、二―四花の長柄繖房花序、四花のものにては第一總軸約二仙米、第一花梗約四・五仙米、第二總軸約二密米、第二及第三花梗各、約五・五仙米、第四花梗約三・八仙米、總長約八・三



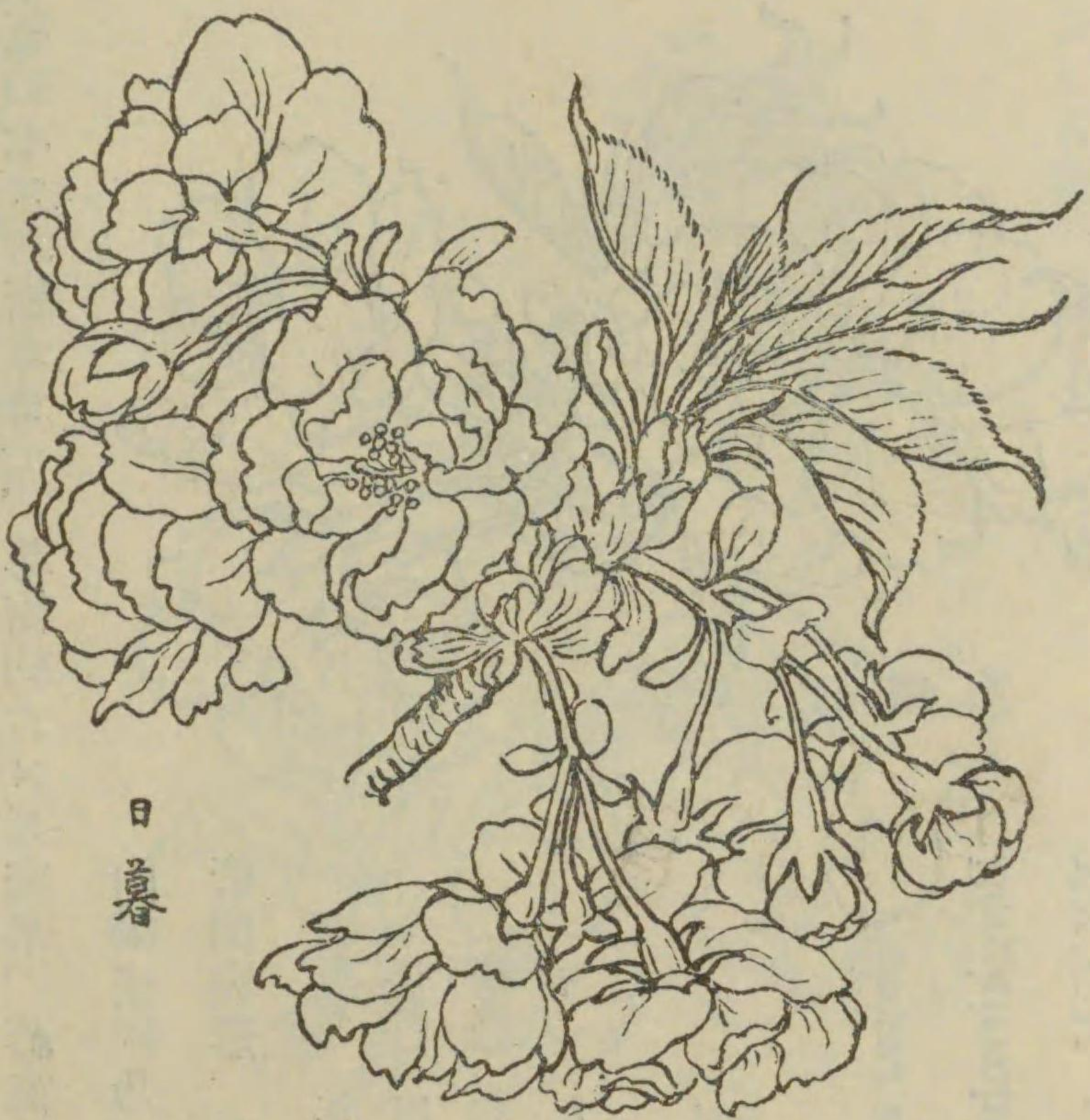
仙米まで、花梗細く花垂る、萼筒約五×四密米、萼齒約六×四密米、葉苞約一五×四密米まで、小苞約六×三密米まで、花徑約五仙米まで、花瓣約三十、圓形約二・二×二・一仙米、瓣端多裂、外瓣帶紅、内瓣殆白、雄蕊約二〇、雌蕊一、綠色、半葉化、最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北  
(花期) 四月下旬  
(特徴) 花梗細長、小苞細小なり。

日 暮 ひぐらし

*Prunus serrulata* Lindl. f. *amabilis* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 103. 櫻花圖譜 一の七一

小木、枝淡灰色、嫩葉黃綠、葉片約九×七仙米、葉先約二仙米、單鋸齒、齒先細長、葉柄約二・五仙米、蜜腺小、一―二、葉苞約一



六×九密米、二―四花の有柄偽繖花序、三花のものにては第一總軸約一仙米、第一花梗約二・二仙



米、第二總軸約四密米、第二、第三花梗各、約二仙米、總長約四・五仙米、葉苞約一・五×六密米、小苞約七×六密米まで、萼筒約六×五密米、萼齒約六×四密米、花徑約四・五密米まで、外瓣紅色、

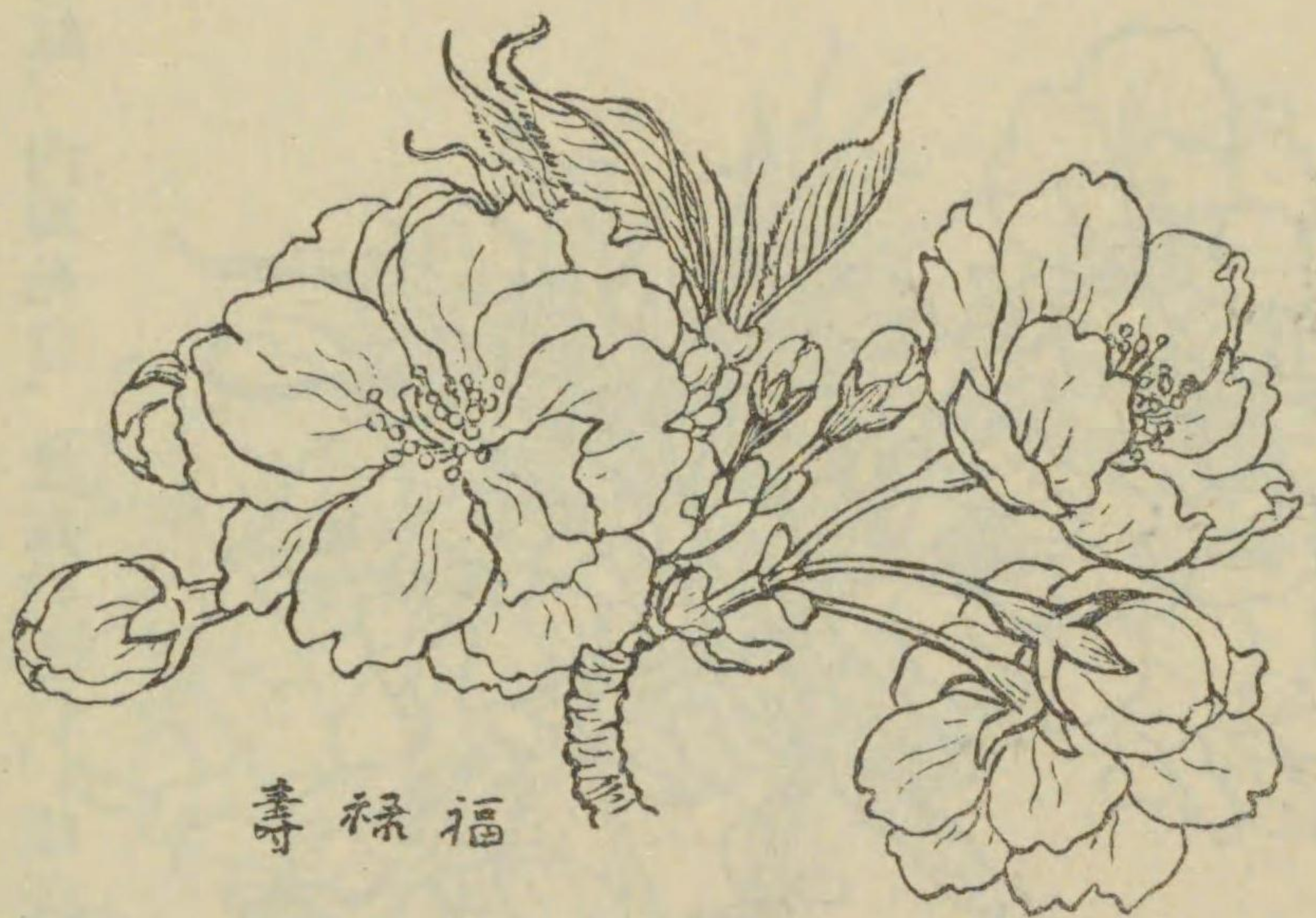
内瓣淡紅乃至白色、約二〇、圓形、約二×二仙米、瓣端二裂、蕾倒楔形、深紅、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 花期に葉出です。花序群着、花梗短し。内瓣と外瓣の色の差異分明なり。

福 祿 壽 ふくろくじゆ



福 祿 壽

*Prunus serrulata* Lindl. f. *contorta* Miyos. in die japan.

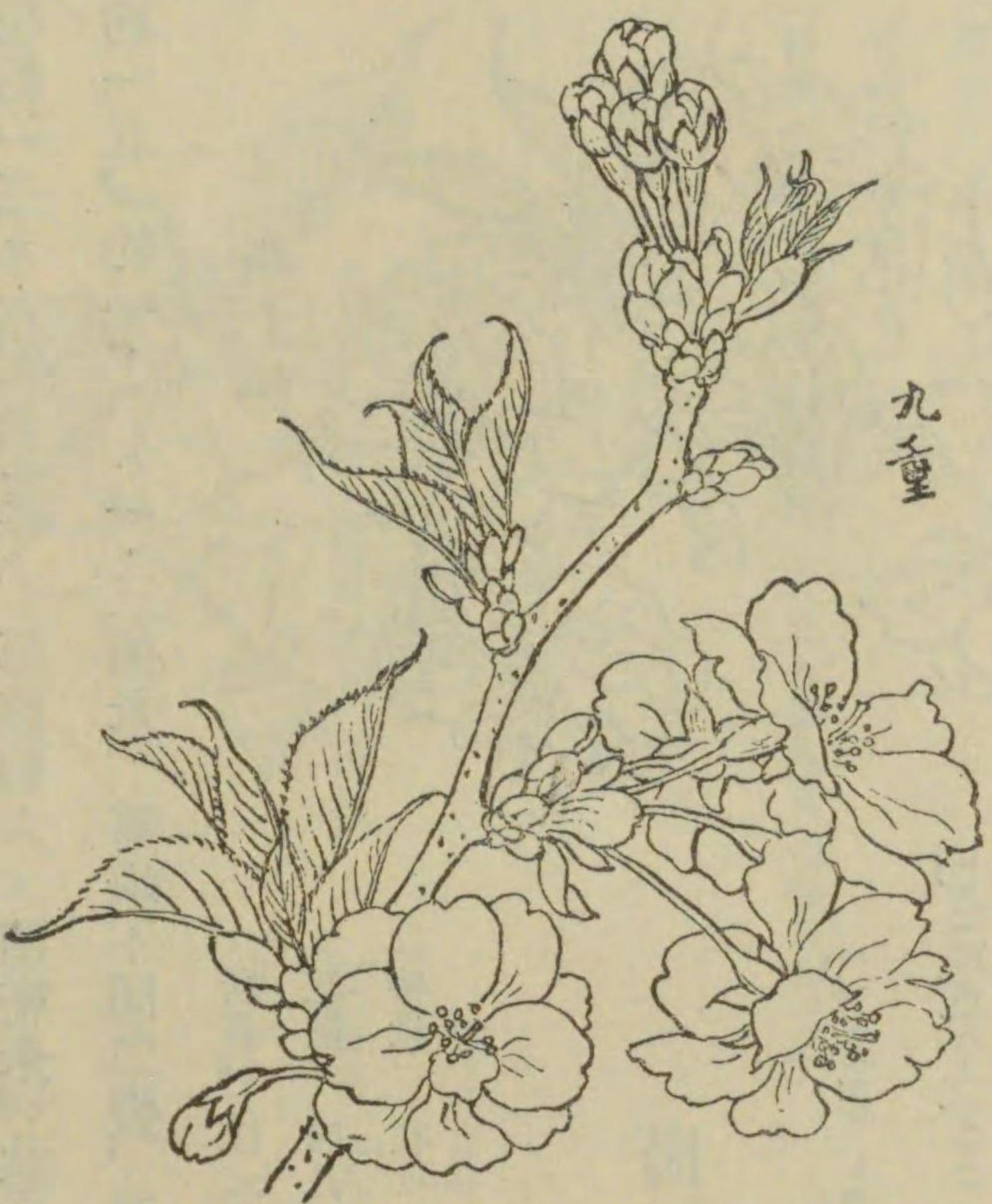
Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo.

XXXIV. 1. 1916. p. 103. 櫻花圖譜 二の九六

稍、大木、枝擴出、枝條淡灰色、嫩葉綠色、葉片約一一・五×七仙米、葉先約二仙米、單鋸齒、葉柄約二・五仙米、蜜腺二、葉苞約一八×七仙米まで、二―四花の有柄繖形花序又は繖房花序、三花のものにては第一總軸約一・三仙米、第一花梗約二・三仙米、

第二總軸約四密米、第二花梗約一・六仙米、第三花梗約一・七仙米、總長約四・五仙米まで、花梗約一七×八密米、小苞約五×四密米、萼筒約六×四密米、萼齒約七×四密米、花徑約五仙米、薔薇色、花瓣約二〇まで、圓形、約二・三×二・二仙米、不規則に屈曲す、蕾倒楔形、濃紅色、雌蕊は最長雄蕊よりも稍、長し。

九 重



九 重 ここのく

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 花期に葉稍、多く出づ。花の扁平なると、瓣硬く、屈曲せると、花色の一様なるとにより類似の品種と區別せらる。

*Prunus serrulata* Lindl. f. *homogena*

Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ.

Sci. Coll. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1.

1916. p. 107 櫻花圖譜 二の八五

小木、枝細く上方に向ふ、枝條淡灰色、嫩葉褐綠、葉片約八×六仙米まで、葉先約二・五仙米、單



鋸齒、齒小、葉苞約一五×六密米、二―四花の有柄繖形花序又は偽繖花序、三花のものにては總軸約八密米、第一花梗約二・五仙米、第二花梗約二・三仙米、第三花梗約二仙米、總長約四仙米まで、花苞約一三×六密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約五×四密米、花徑約四仙米、一樣淡紅色、花瓣約一五、約一・八×一・三仙米、瓣端不同二裂、雌蕊は最長雄蕊よりも短し。

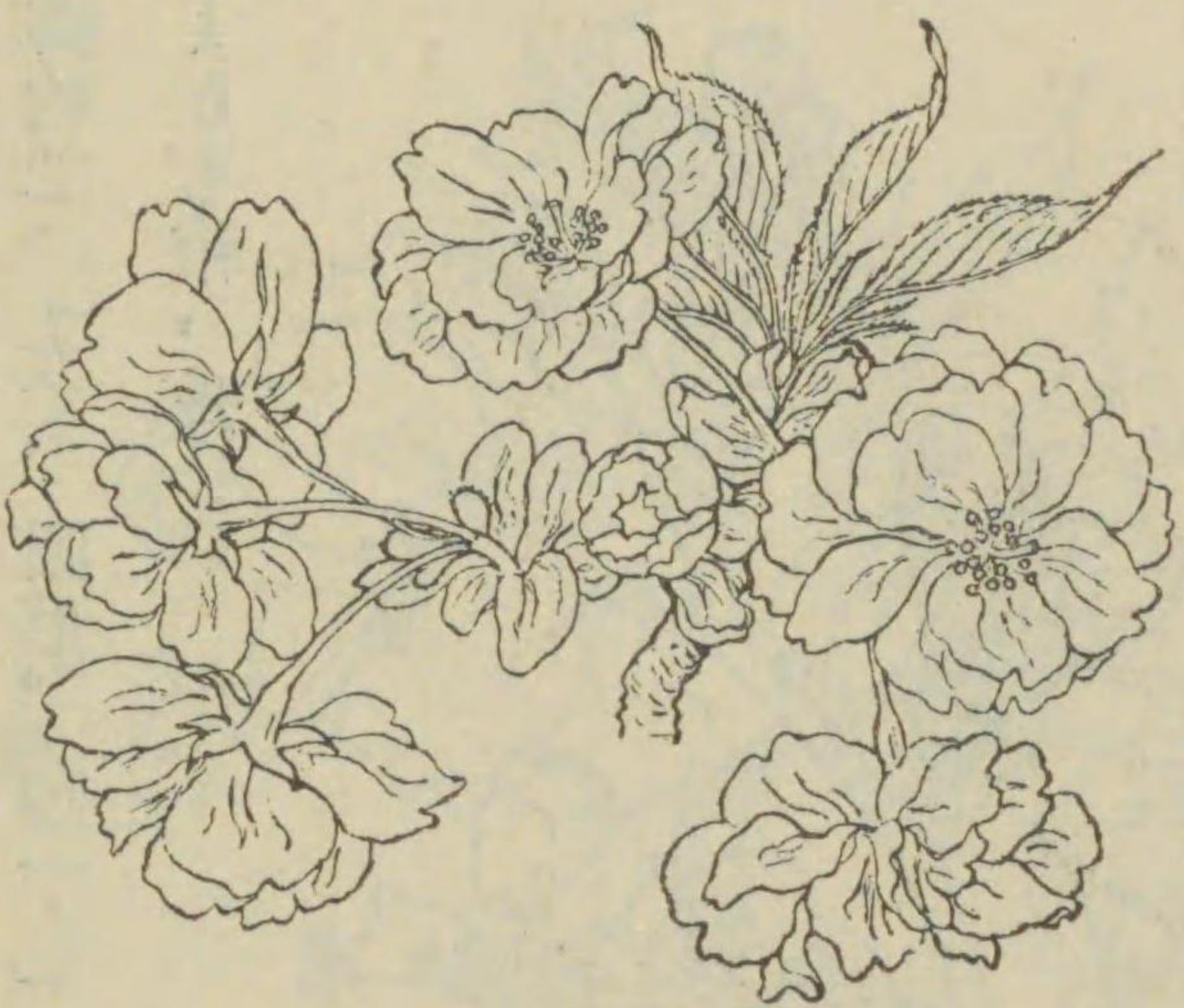
楊貴妃

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 花は一樣淡紅色なり。

(櫻第八號大正十五年)



楊貴妃 やうきひ

*Prunus serrulata* Lindl. f. *mollis* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1919. p. 115. 櫻花圖譜 二の八二

小木、枝灰色、嫩葉黃褐、葉片約八×六仙米まで、葉先約二仙米、單鋸齒、葉柄約一・七仙米、蜜腺小、一―二、又は無し、葉苞約二〇×八仙米まで、二―四花の偽繖花序、四花のものにては、第一總軸約一・三仙米、第一花梗約三・五仙米、第二總軸一密米、

第二花梗約三・三仙米、第三總軸約二密米、第三花梗約三仙米、第四花梗約二・八仙米、總長約五仙米、花苞約一・五×八仙米まで、小苞約五×四密米まで、萼筒約六×四仙米、萼齒約七×四仙米、花徑約五仙米、帶紅、花瓣の外部稍濃紅、花瓣約二〇、約二×一・九仙米、先端二裂、蕾球狀紅色、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

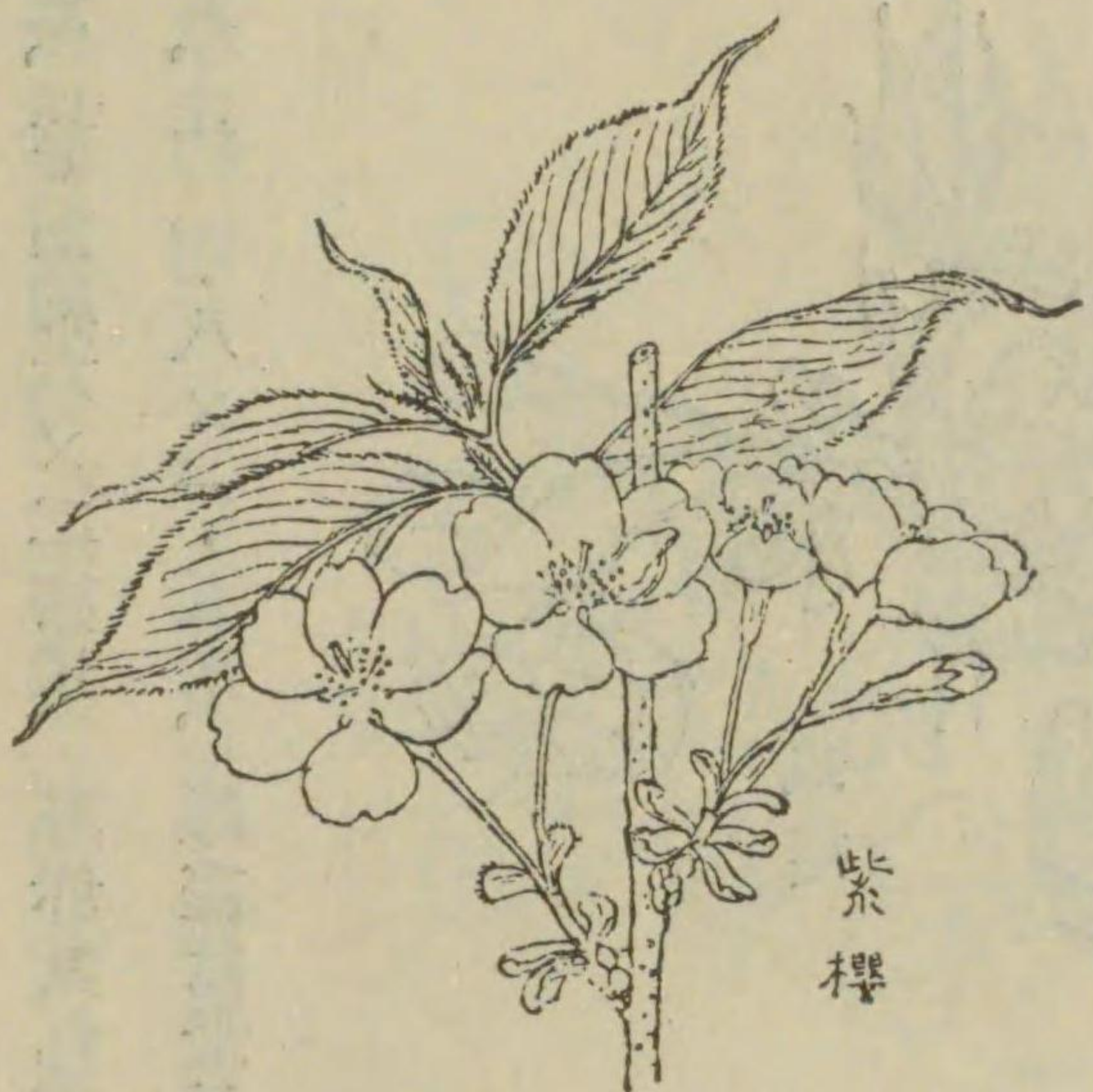
(特徴) 密着花序、短花梗、大なる葉苞及花苞を有す。

紫櫻 むらさきくら

*Prunus serrulata* Lindl. f. *purpurea* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 121. 櫻花圖譜 二の七八

小木、枝灰褐色、嫩葉赤褐、葉片約八・五×六仙米まで、葉先約二仙米、單鋸齒、齒端銳尖、葉柄約二仙米、蜜腺小、約二箇、葉苞赤紫色、約一五×六密米まで、二―三花の繖

房花序、三花のものにては第一總軸約八密米、第一花梗約二仙米、第二總軸約二密米、第二花梗約



紫櫻



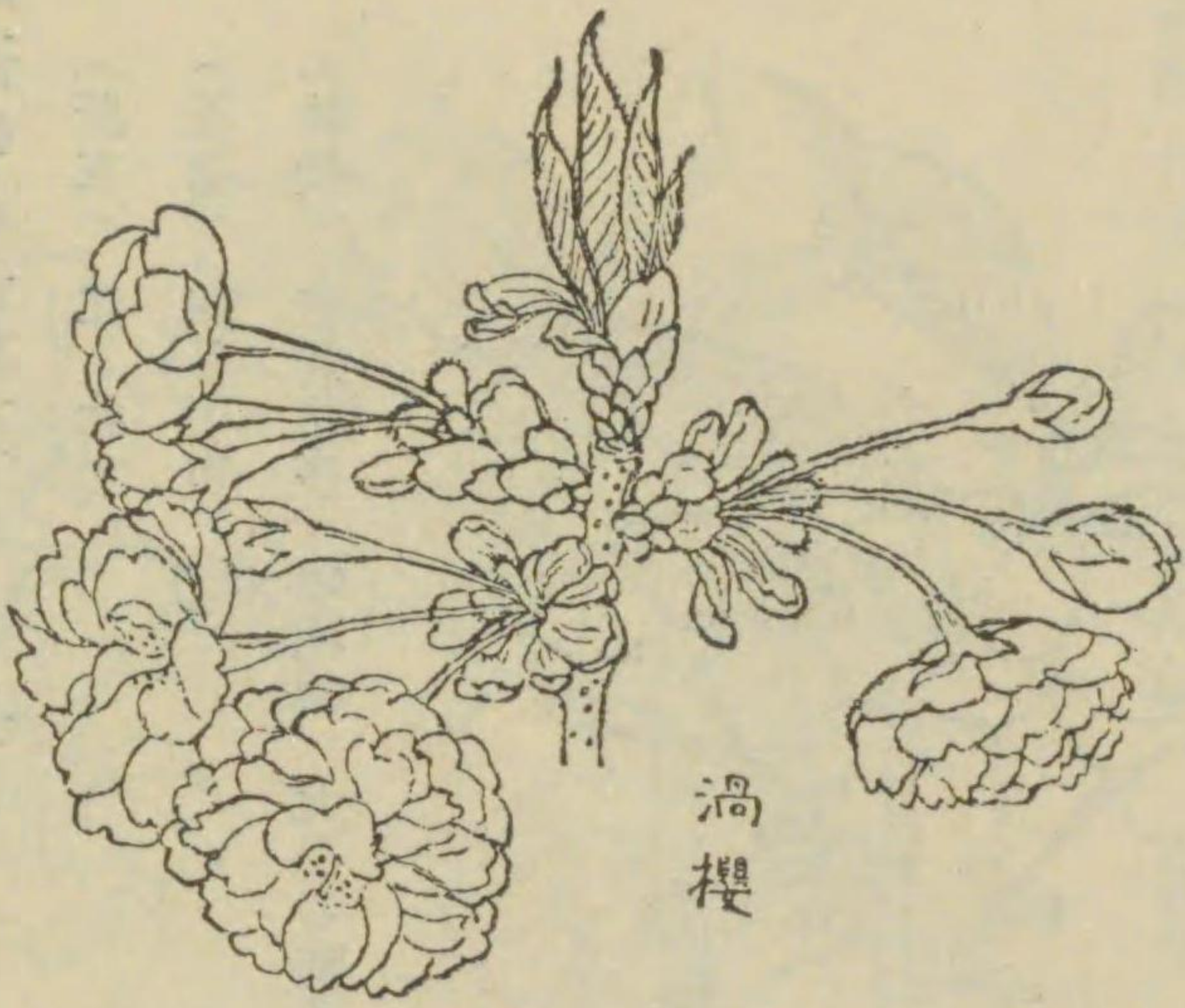
一・七仙米、第三花梗約一・二仙米、總長約四仙米まで、花苞赤紫色、約六×二密米、萼筒約六×二密米、萼齒約六×二密米、萼赤紫色、小苞約五×三密米まで、花徑約三・七仙米まで、紅紫色、花瓣五、約一・八×一・五米、雌蕊は最長雄蕊と同長。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 著るしき紅紫色花を着く。

此櫻の實生に十瓣以上の花を生ぜり、依つて之を八重紫櫻と名づけたり。  
(櫻花圖譜二の七九参照)



渦櫻

渦 櫻 うづざくら

*Prunus serrulata* Lindl. f. *spiralis* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo.

XXXIV. 1. 1915. p. 112. 櫻花圖譜 二の九〇

稍、大木、枝灰色、嫩葉淡褐、葉片約一〇・五×七仙米まで、葉先約二・五仙米、單鋸葉、齒端尖出、葉柄約三仙米、蜜腺一―二、葉苞約一八×六密米まで、三―四花の繖房花序、花序は枝端に叢着す。四花のものにては第一總軸約一仙米、第一花梗約三・二仙米、第二總軸約三密米、第二花梗

約二・六仙米、第三花梗約二・四仙米、第四花梗約二仙米、總長約五仙米まで、葉苞約一六×六密米まで、小苞約六×二密米、萼筒約九×四密米、萼齒約六×四密米、花徑約三×二仙米、一樣紅色、花瓣約三〇、多少螺旋狀に排列す、約一・二×一・五仙米、先端二裂、雄蕊少數、雌蕊は最長雄蕊と粗、同長。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 花瓣は螺旋狀に排列せり。

(備考) 鞍馬の雲珠櫻(うすぎくら)とは別なり。

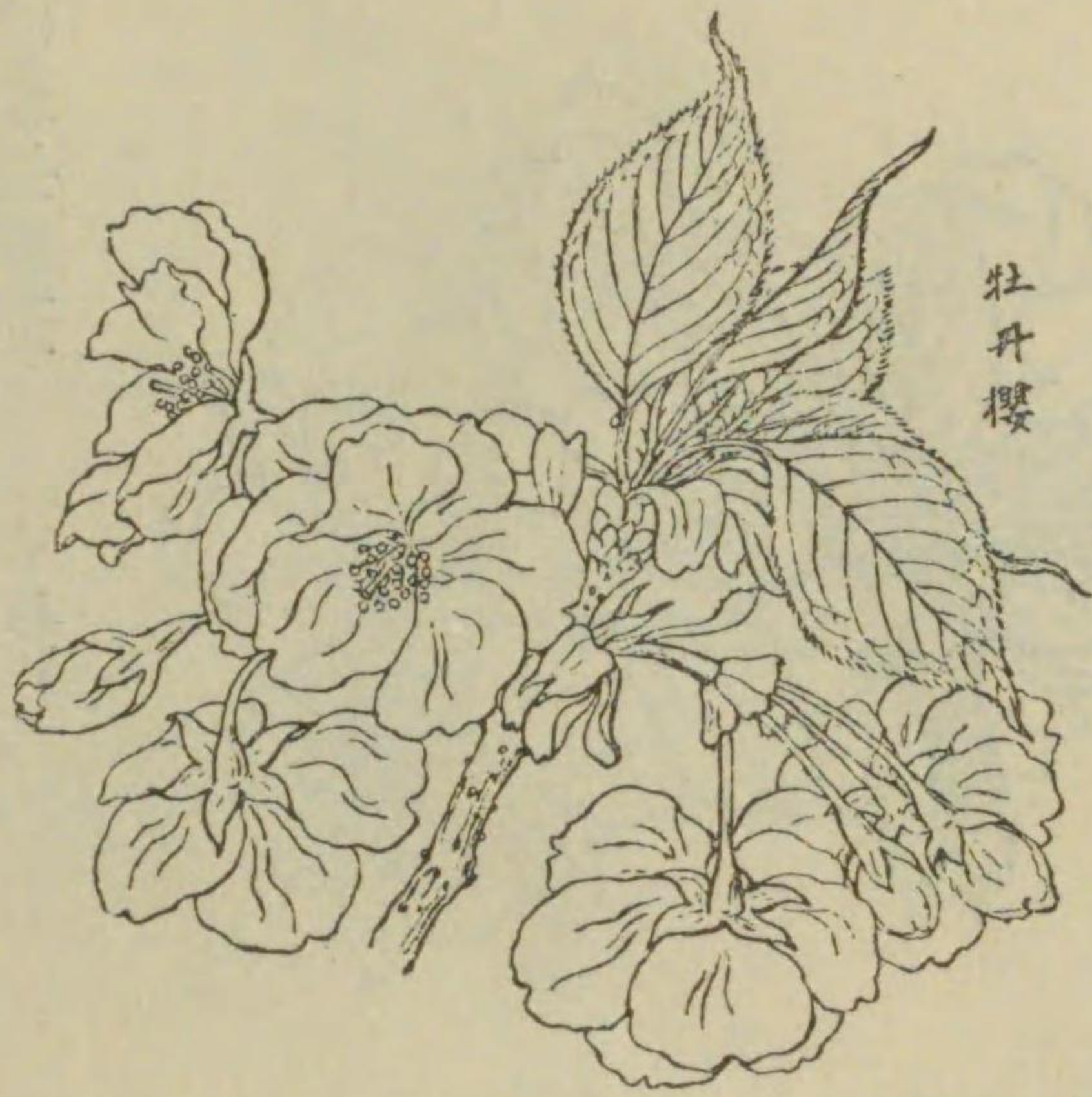
牡丹櫻 ぼたんざくら

*Prunus serrulata* Lindl. f. *Moutan* Miyos. in die japan.

Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo.

XXXIV. 1. 1915. p. 101. 櫻花圖譜 一の七〇

小木、樹頭平潤、枝灰褐、嫩葉淡褐、葉片橢圓形、約一三×八・五仙米まで、葉先約二・五仙米、單鋸齒、齒端銳尖、葉柄三仙米、蜜腺二、葉苞二〇―九密米まで、三―五花の繖房花序、四花のものにては第一總軸約一仙米、第一花梗約一・五仙米、第二總軸約二密米、第二花梗約一・四密米、第



牡丹櫻



三總軸約二密米、第三花梗約一・二仙米、第四花梗約一・八仙米まで、花苞約二〇×八密米まで、小苞約七×五密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約七×五密米、花徑約五仙米まで、帯紅色、花瓣約一五、旗瓣を有す、約二・七×二・三仙米、先端二裂、蕾帯紅色、倒圓錐形、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

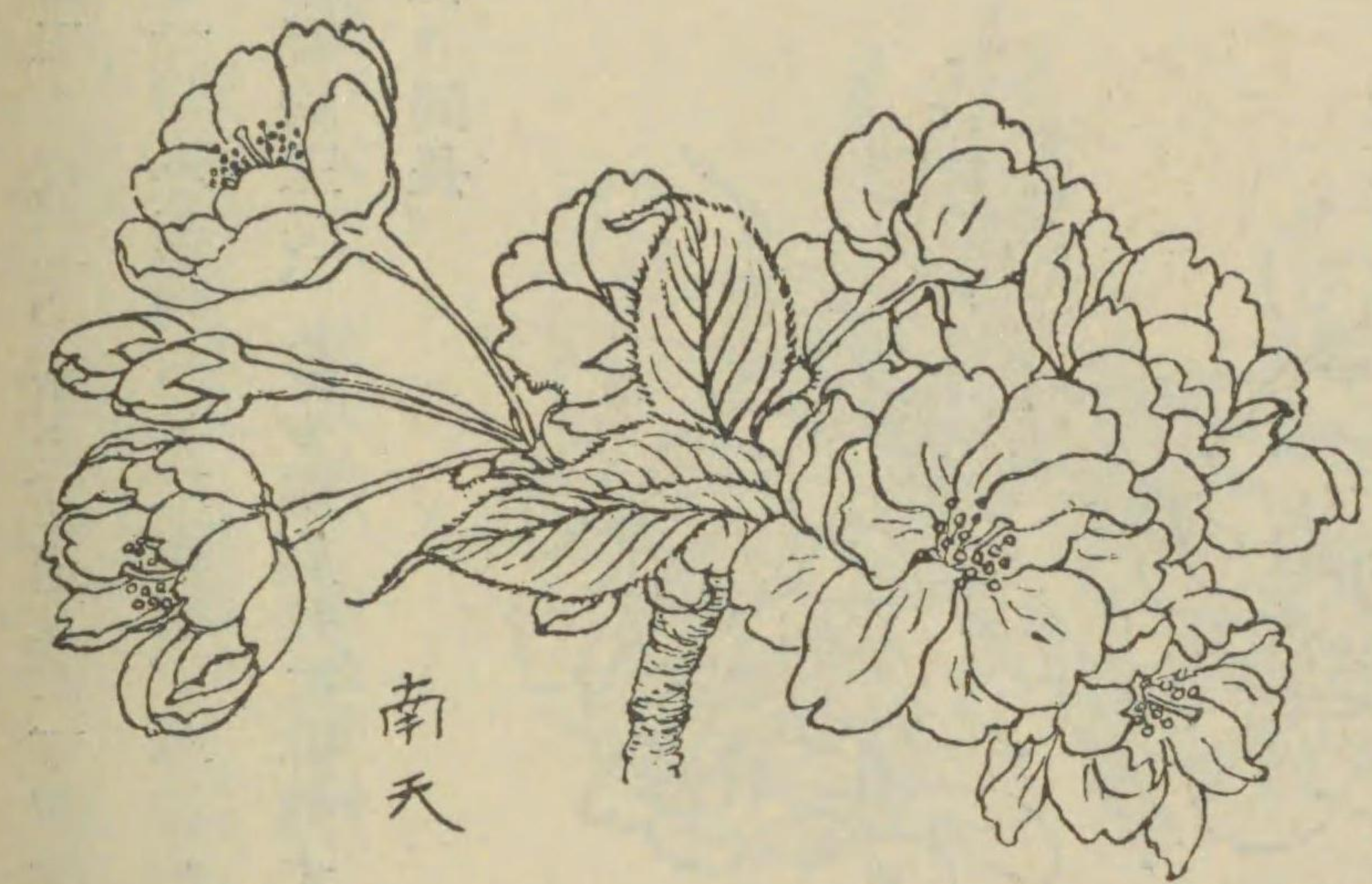
(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 花時には葉出せず、花梗太く、短し、花大きく、淡紅色なり。

南天なでん

*Prunus serrulata* Lindl. f. *sericea* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXVI. 1. 1916. p. 117. 櫻花圖譜 二の一〇八



南天

稍、大木、枝屈曲せるものあり、枝色暗褐、嫩葉褐色、葉片約一〇×五・七仙米まで、葉先約二・五仙米、單鋸齒、葉柄約二・五仙米、蜜腺二、葉苞約一七×六密米まで、三―六花の繖房花序、三花のものにては第一總軸約一・五仙米、第一花梗約四・二

仙米、第二總軸約五密米、第二花梗約三・五仙米、第三花梗約三仙米、總長約七仙米まで、花苞約一五×五密米まで、小苞約六×四密米まで、萼筒約七×四密米、萼齒約六×四密米、花徑約四仙米、一樣紫紅色、花瓣約一二まで、約二×一・五仙米、先端二裂、雌蕊は最長雄蕊と同長。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬より下旬に至る。

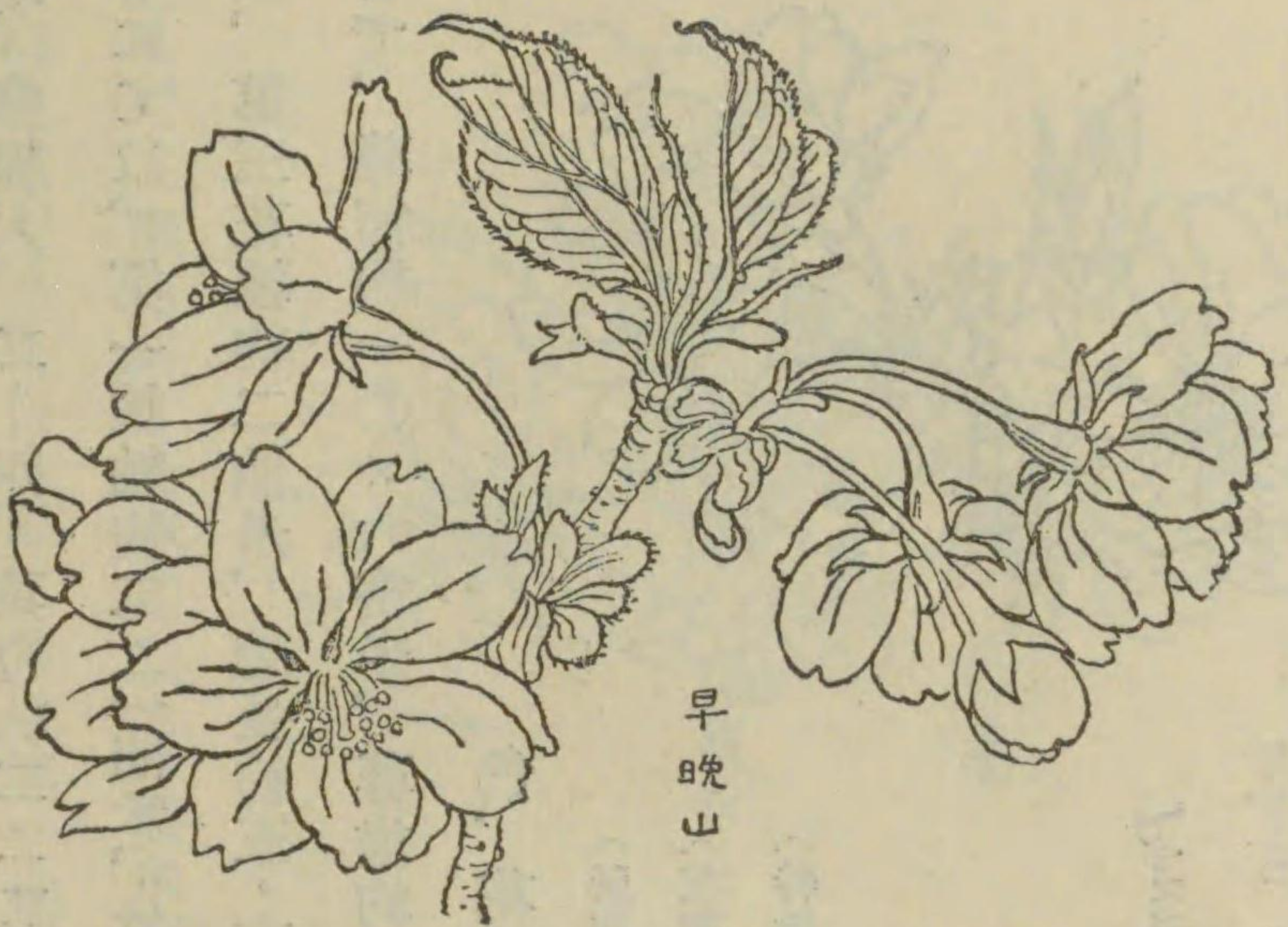
(特徴) 麒麟に似たるも、花瓣の数の少きと、嫩葉の褐色の度強きとにより區別せらる。

(備考) 「長者ヶ丸櫻譜」に描寫されたる「南殿」は本品種に似たり。又譜の「南殿御庭櫻」は單瓣にして之と異なり。同書の「小南殿」は重瓣なるも嫩葉綠色なり。又「奥州南天」は重瓣にして花形本品種に近し。尙奈天・南殿等の櫻名に關しては別に記載すべし。

(櫻第九號昭和二年)

早晩山いつかやま

*Prunus serrulata* Lindl. f. *dilatata* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo.



早晩山

XXXIV. 1. 1916. p. 92. 櫻花圖譜 二の七二



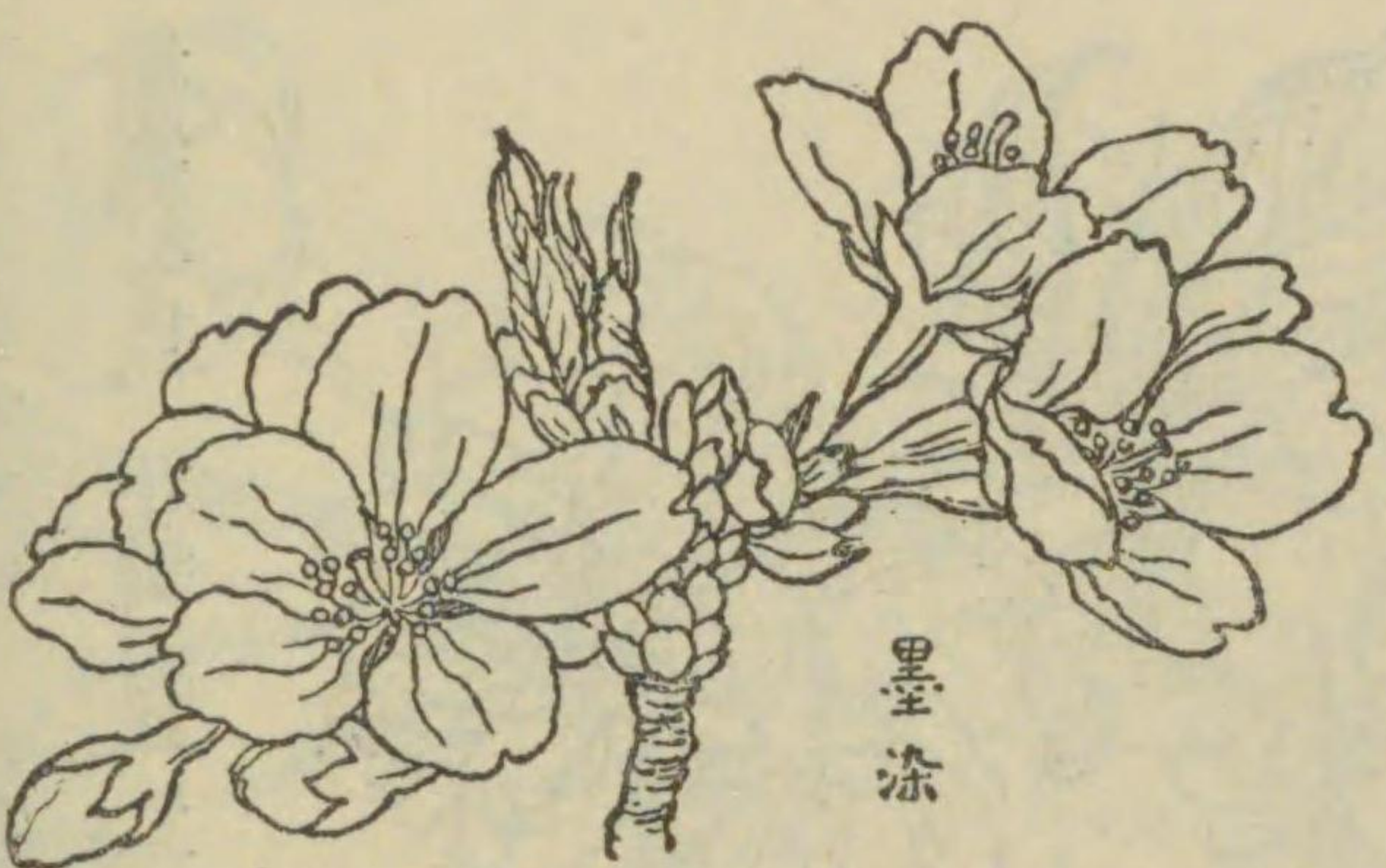
小木、枝灰色、嫩葉綠色、葉片約一・四×六・五仙米まで、葉先二・五仙米、單鋸齒、葉柄約四仙米、蜜腺大、二―四、葉苞約二・二×一仙米まで、三―四花の長梗偽繖花序、花梗太し、三花のものにては、第一總軸約二・二仙米、第一花梗約二・七仙米、第二總軸約四仙米、第二花梗約二・五仙米、第三花梗約二仙米、總長約五・六仙米、花苞約一・七×七密米、小苞長橢圓形、約一〇×四密米まで、萼筒約一〇×六密米、萼齒約九×四密米、花徑約四仙米、花瓣三―四列、外列淡紅、内列白色、花瓣圓形、約二・二×二仙米、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 花梗太く、花多し。

墨 染 すみぞめ



*Prunus serrulata* Lindl. f. *subfusca* Miyos. in die japan. Bergkir-schen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 90. 櫻花圖譜 一の五九

偽繖花序、三花のものにては、第一總軸約三密米、第一花梗約七密米、第二總軸約一密米、第二及

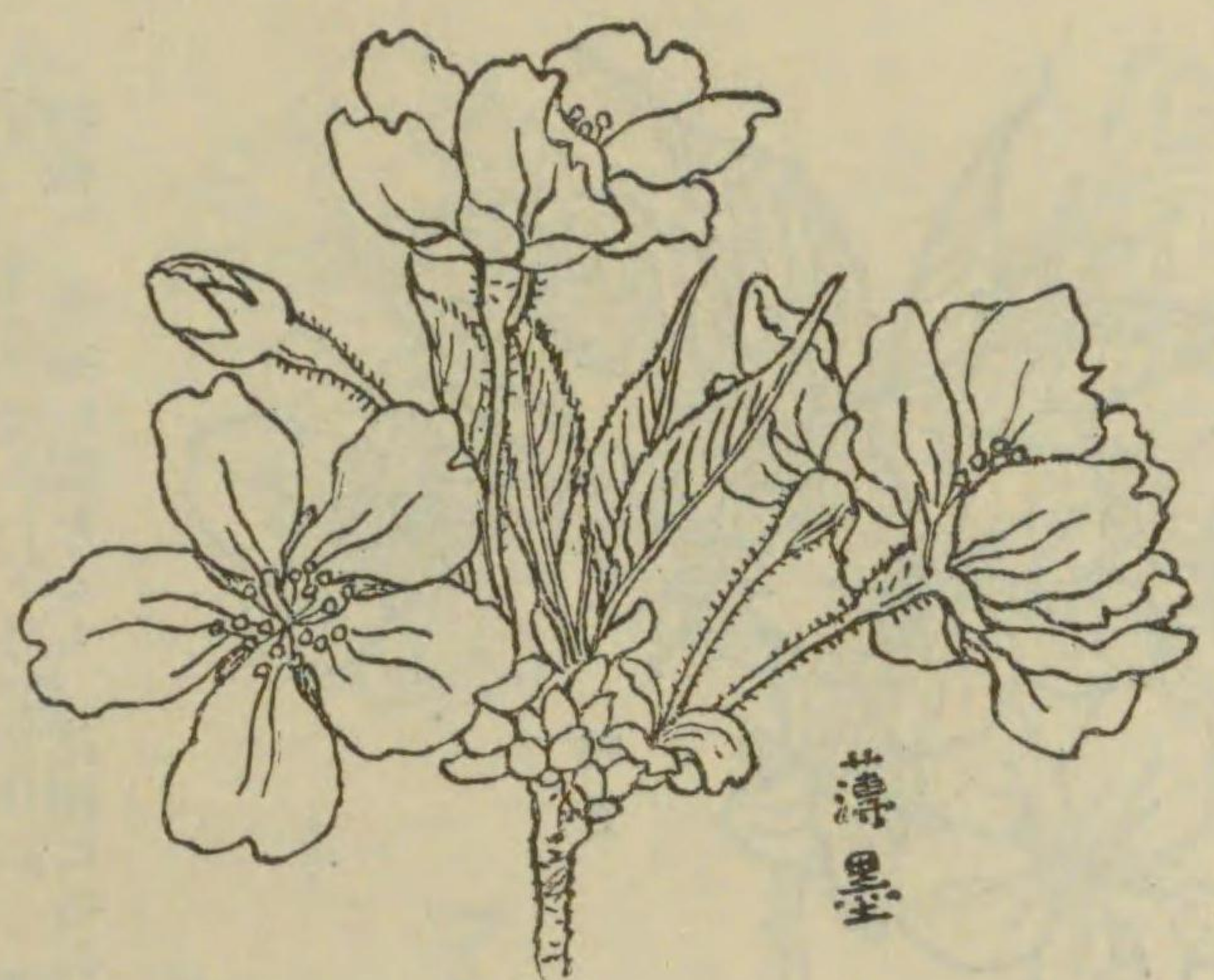
第三花梗各、約一六仙米、總長約二・五仙米、花苞綠色、長約二×七密米、小苞綠色、約五×三密米まで、萼筒約六×二密米、萼齒約七×二密米、花徑約三・五仙米、白色、花瓣五枚、約一・五×一・一仙米、先端二裂、雌蕊は最長雄蕊よりも稍、短し。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 花時葉伸びず、花大きく花梗短し。

薄 墨 うすずみ



*Prunus serrulata* Lindl. f. *nigrescens* Miyos. in die japan. Bergkir-schen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 126. 櫻花圖譜 一の十六

枝灰褐、嫩葉綠色、葉片約八・五×五・五仙米まで、葉先約二仙米、三重鋸齒、葉柄約二・五仙米、蜜腺一―二、又は無し、葉苞約一六×八密米まで、二―三花の繖房花序、三花のものにては第一總軸約一・五仙米、第一花梗約一・八仙米、第二總軸約三密米、第二及第三花梗各、約一・五密米、總長五仙米、花梗に微細なる軟毛密生す、花苞約一・五×八密米まで、



小苞約五×三密米まで、萼筒約七×四密米、萼齒約六×三密米、花徑約四・五密米、白色、花瓣五枚、稍、楔形、約二×八仙米、先端不規則に分裂す、雌蕊は最長雄蕊と殆ど同長、柱頭大きく扁平なり。

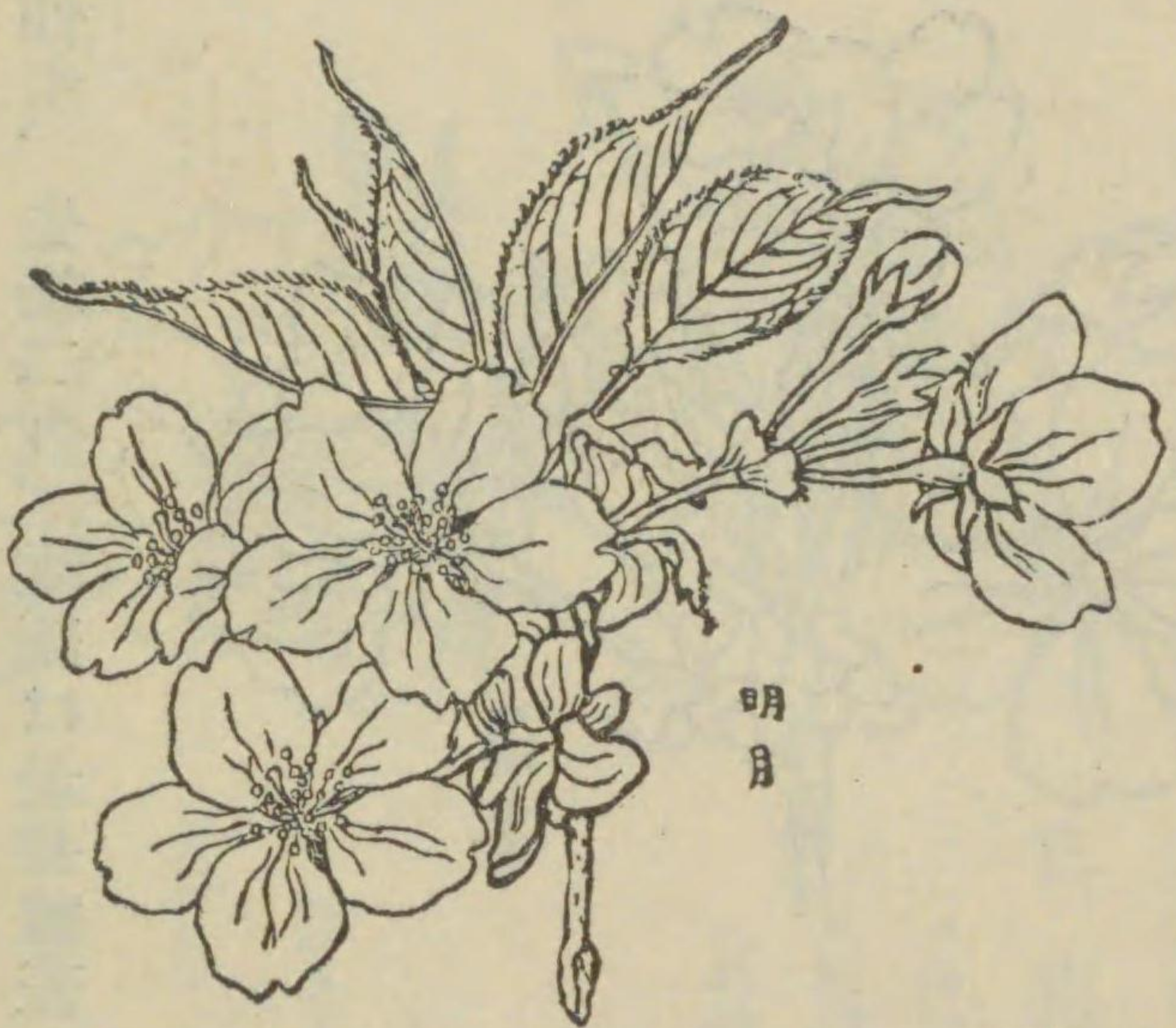
(所在) 江北

(花期) 四月下旬頃

(特徴) 墨染に似たるも、花梗に毛あること、花瓣の稍、楔形を呈することにより區別せらる。

墨染・薄墨は共に昔時より知られ、嫩葉綠色、花白色にして里櫻の他の品種の赤芽・紅花なるに對し暗き色觀を有するにより各々其名を得たり。

名 月 めいけつ



*Prunus serrulata* Lindl. f. *sancta* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. p. 95. 櫻花圖說 一の六五

枝淡灰色、嫩葉帶褐色、葉片約一二・五×仙米まで、葉先約三密米、重鋸齒、葉柄約三・五仙米、蜜腺二、大、二―四花の有柄繖形花序、四花のものにては總軸約二・五仙米、第一花梗約一・五仙米、第二花梗約一・四仙米、第三花梗約一・三仙米、第四花梗約一・一仙米、總長約四仙米、花苞約一〇×七密米まで、小苞

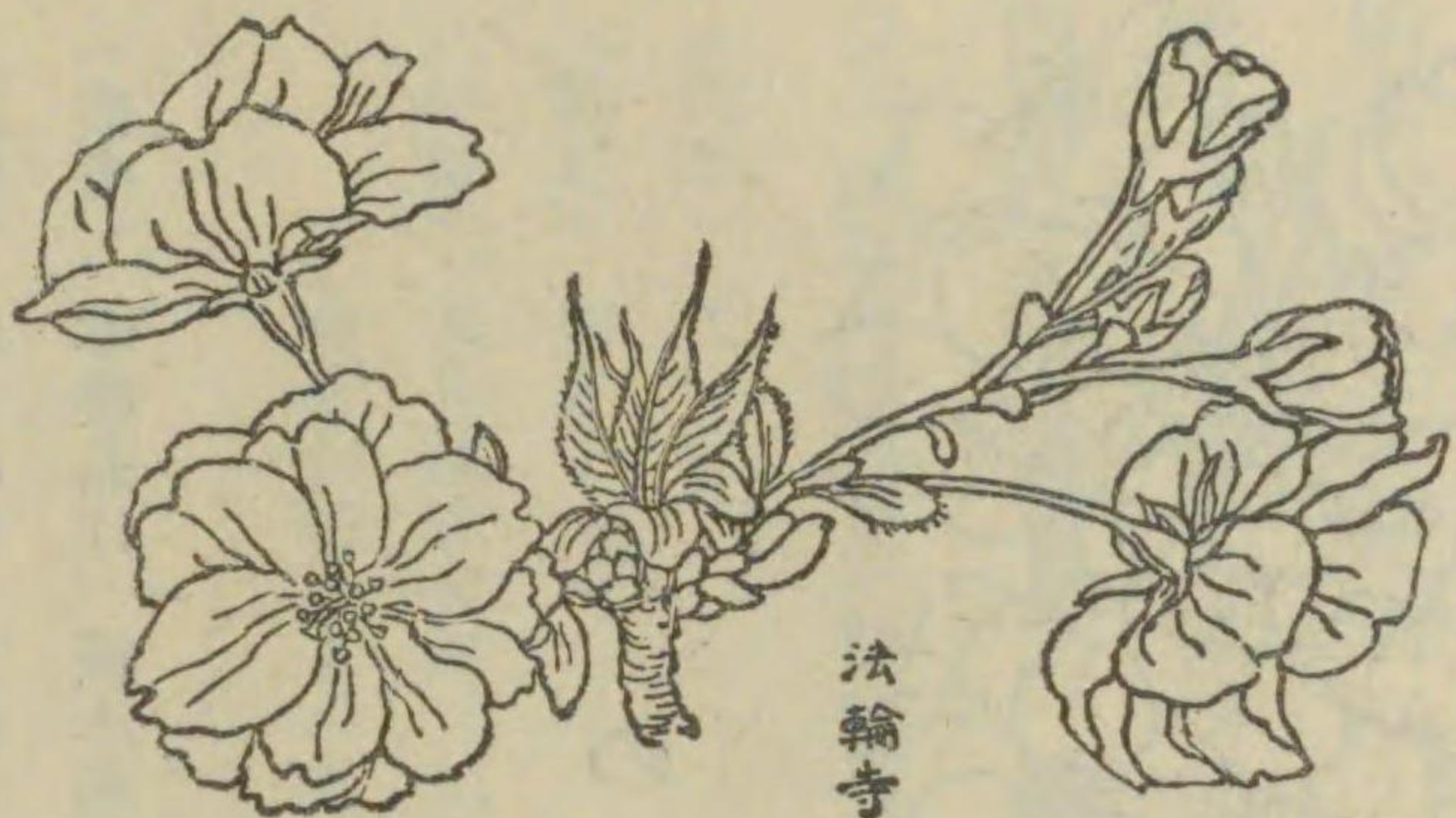
約五×二密米まで、萼筒約七×三密米、萼齒約六×三密米、花徑約四仙米、花瓣五枚、白色、邊緣淡紅を帶ぶ、約一・八×一・三仙米、先端二―多裂、蕾紅色を帶ぶ、雌蕊は最長雄蕊よりも稍、長し。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(備考) 名月は一に明月とも云ふ。

法輪寺 ほうりんじ



*Prunus serrulata* Lindl. f. *decora* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 110.

櫻花圖譜 二の八一

小木、枝斜に上方に叢出す、暗灰色、嫩葉黃褐、葉片約一二・五×七・五仙米まで、葉先約二・五仙米、單鋸齒、蜜腺二、葉苞約一六×五密米まで、二―六花の繖房花序、五花のものにては第一總軸約二・五仙米、第一花軸約三・五仙米、第二總軸約二仙米、第二花梗約三仙米、第三總軸約五密米、第三花梗約二・五仙米、第四花梗約二・三仙米、第五花梗約二仙米、總長約七・六仙米まで、花苞約



一五×五密米まで、小苞橢圓形、約一〇×五密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約七×四密米、花徑約四・五仙米、花瓣約一五枚、圓形、約二・三×二・三仙米、先端二裂、花瓣の外列帶紅色、内列白色、蕾圓錐形、帶紅色、雌蕊は最長雄蕊と同長。

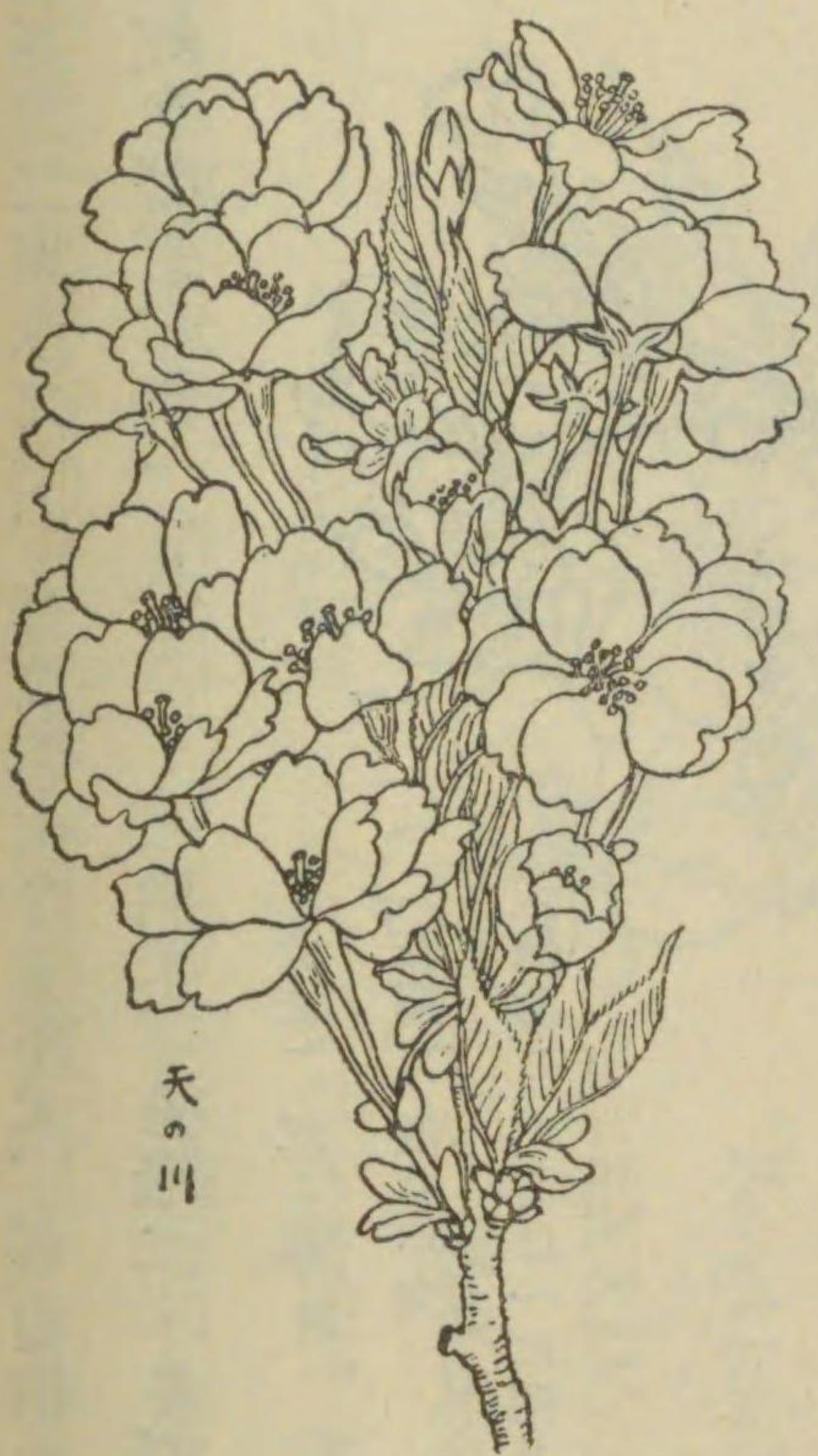
(所在) 江北

(花期) 四月中旬—下旬

(備考) 本櫻品は 後水尾天皇勅銘の櫻として古來京都嵐山の虚空藏法輪寺にあり、名櫻として知られたるものなり。

(櫻第一〇號昭和三年)

天の川 あまのがは



*Prunus serrulata* Lindl. f. *erecta* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo, XXXIV, 1, 1916, p. 135.

櫻花圖譜 二の一八

小木、枝條直立、嫩葉淡黃褐色、葉片約一一・五×七・五仙米、葉先約三仙米、單鋸齒、葉柄

約三・五仙米、蜜腺一一二、葉苞約一七×八密米まで、二—四花の有柄繖形花序、時としては偽繖花序、花梗太く、直立す。三花のものにては總軸約一仙米、第一花梗約三・五仙米、第二花梗約二・五仙米、第三花梗約二・三仙米、總長約五仙米、花苞約一五×七密米まで、小苞倒卵形、約五×四密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約五×三密米、花徑約四・五仙米、花瓣約一五、三列をなす。最内列は多少直立す、約一・八×一・五仙米、先端不規則に分裂す、紅暈あり、フリージャの香氣を放つ。雄蕊は最長雌蕊と殆ど同長。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 本品種は枝條、花梗の直立するのみならず、花瓣にも亦此傾向あるによりて著し。別に白花のものあり、予は之に七夕(たなばた)の名を附けたり

白 雪 しらゆき

*Prunus serrulata* Lindl. f. *nivea* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo, XXXIV 1, 1916, p. 127.

櫻花圖譜 二の七四

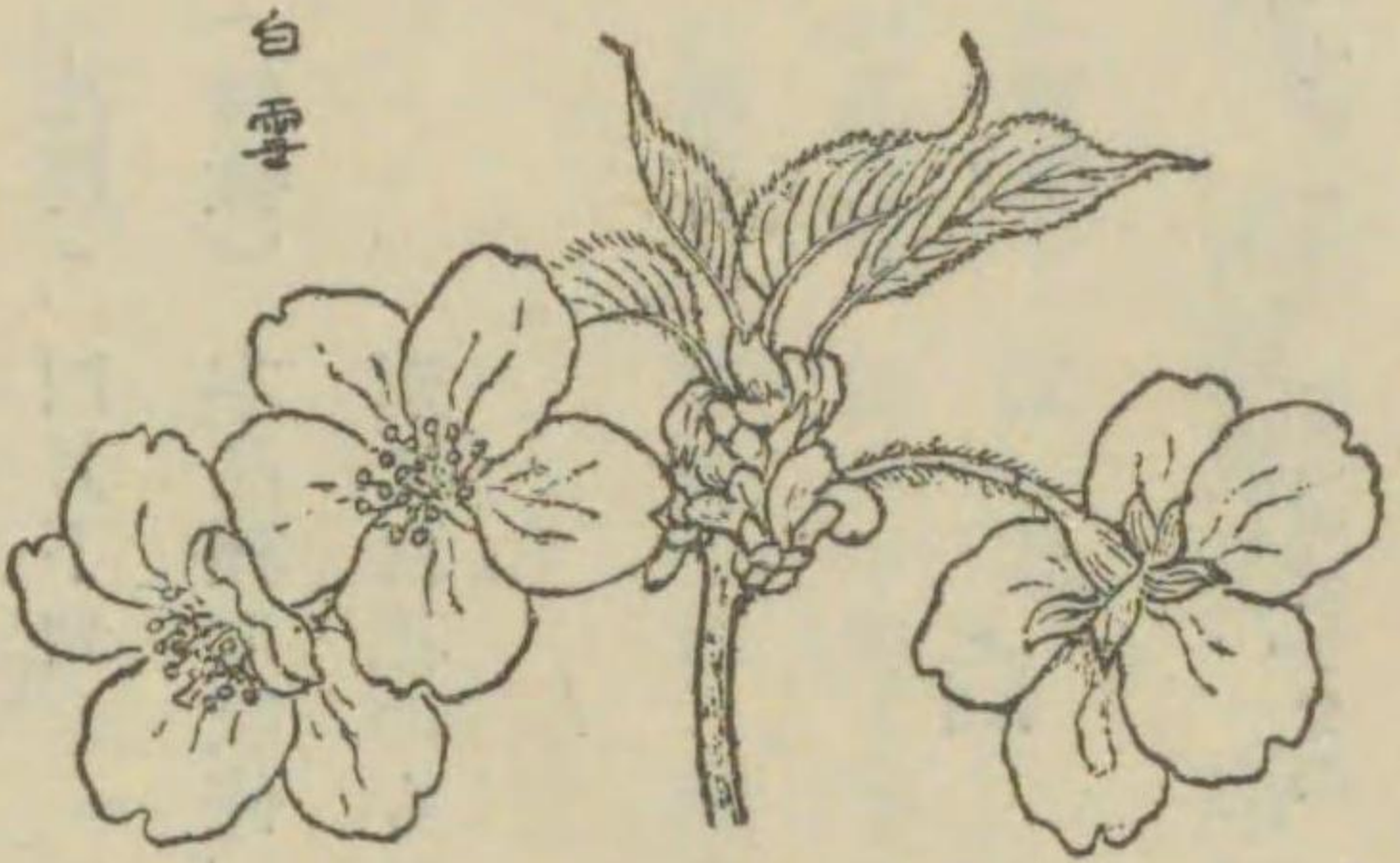
櫻品記載



中木、枝條多く出で、斜に上方に向ふ。嫩葉黃褐色、葉片約八・五×六仙米まで、葉先約二仙米、單鋸齒、葉柄約二仙米、蜜腺二―三、葉苞約一二×八密米まで、一―四花の繖房花序、三花のもの

にては第一總軸約六密米、第一花梗約二仙米、第二總軸約四密米、第二花梗約一・五仙米、第三花梗約一・三仙、總長約三・五仙米まで、花梗太く、細毛にて密被せらる。花苞約一一×八密米まで、小苞約一・一×一仙米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約七×四密米、花徑約四・五仙米、花瓣五、約二・一×二仙米、先端二裂、純白、雄蕊約三〇、雌蕊は最長雄蕊と殆ど同長。

白浮



(所在) 江北

(花期) 四月中旬

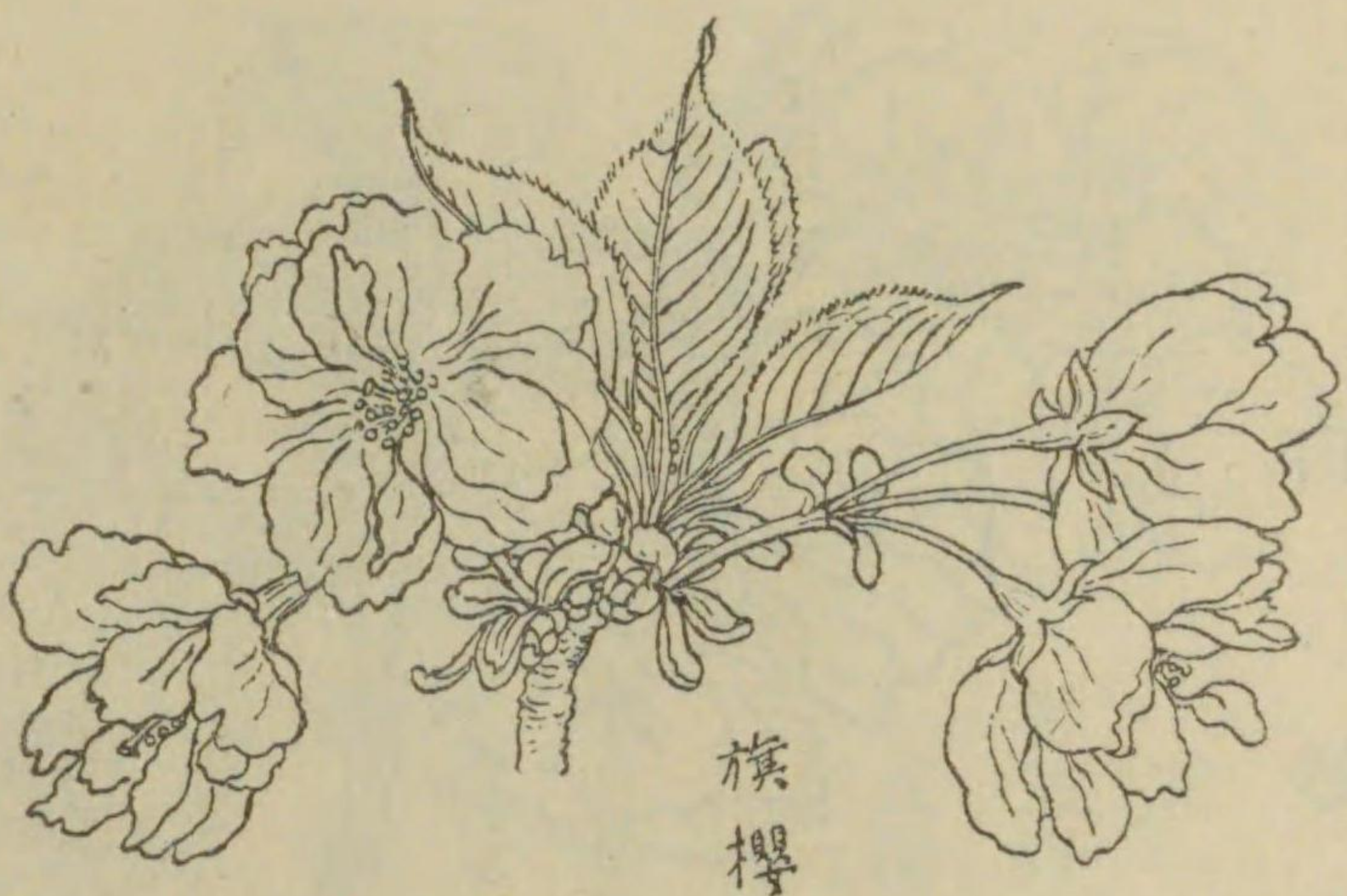
(特徴) 枝條叢出、多數の白花を着く、花梗に密毛あり。

(備考) 本櫻品は明治四十二年四月十六日予の命名せるものなり。

旗 櫻 はたざくら

*Prunus serrulata* Lindl. f. *vevillipetala* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 99.

櫻花圖譜 一の五八



旗櫻

稍、大木、嫩葉褐色、葉片約一一・五×七・五仙米まで、葉先約二・五仙米、單鋸齒、葉柄約三仙米、蜜腺一―四、葉苞約一〇×四密米まで、二―四花の繖房花序、三花のものにては第一總軸約一・八仙米、第一花梗約三・三仙米、第二總軸約六密米、第二花梗約三仙米、第三花梗約二・八仙米、總長約六仙米、花苞帶紅色、約一三×七密米まで、小苞約六×四密米まで、萼筒約七×四密米、萼齒約七×五密米、花徑約四・五仙米、白色又は淡紅色、花瓣約一〇約二×二仙米、多數の旗瓣あり、雌蕊は最長雄蕊と殆ど同長

(所在) 江北

(花期) 四月中旬より下旬に至る。

(特徴) 旗瓣多く出づ。

(備考) 古來旗櫻と稱するもの少からず、本品種は其中の著しきものなり。

王 昭 君 わうせうくん

*Prunus serrulata* Lindl. f. *conspicua* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci.



Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. III.

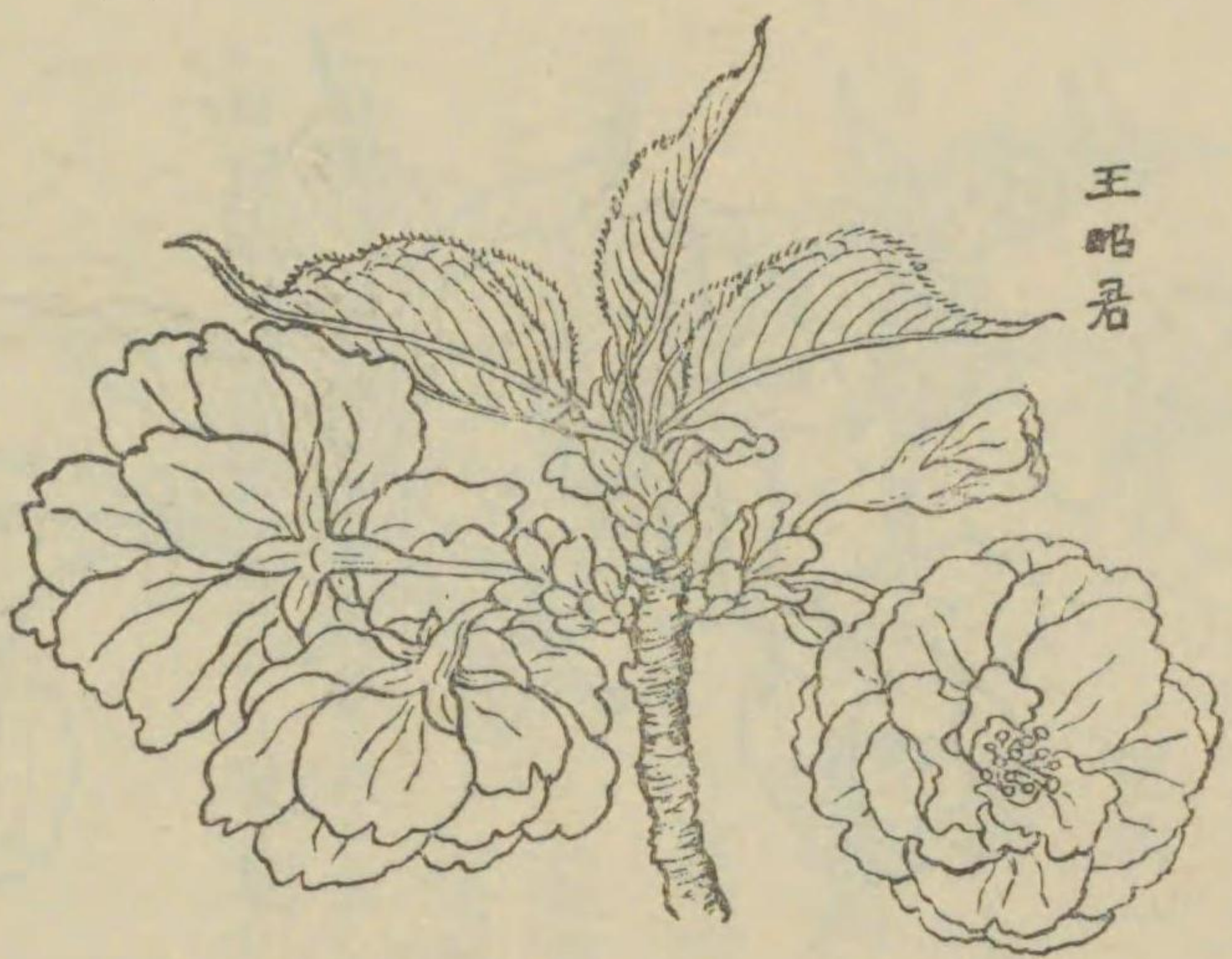
小木、樹頭平潤、嫩葉褐緑、葉片約一〇×六仙米まで、葉先約二・五仙米、葉柄約三仙米、蜜腺

二、葉苞約一五×五米まで、三—五花の繖房花序、四花のものにては第一總軸約一・三密米、第一花梗約一・六仙米、第二總軸約三密米、第二花梗約一・八仙米、第三總軸約四密米、第三花梗約一・六仙米、第四花梗約一・五仙米、總長約四・五仙米まで、花苞約一五×五密米まで、小苞約五×四密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約六×四密米、花徑約四仙米、花瓣約一六、約一・八×一・六仙米、外列紅色、内列淡紅色、蕾紅色、倒圓錐形、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 花梗短く、花瓣厚し。



白 妙 しろたへ

*Prunus serrulata* Lindl. f. *albida* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci.

Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 93.

櫻花圖譜 一の五六

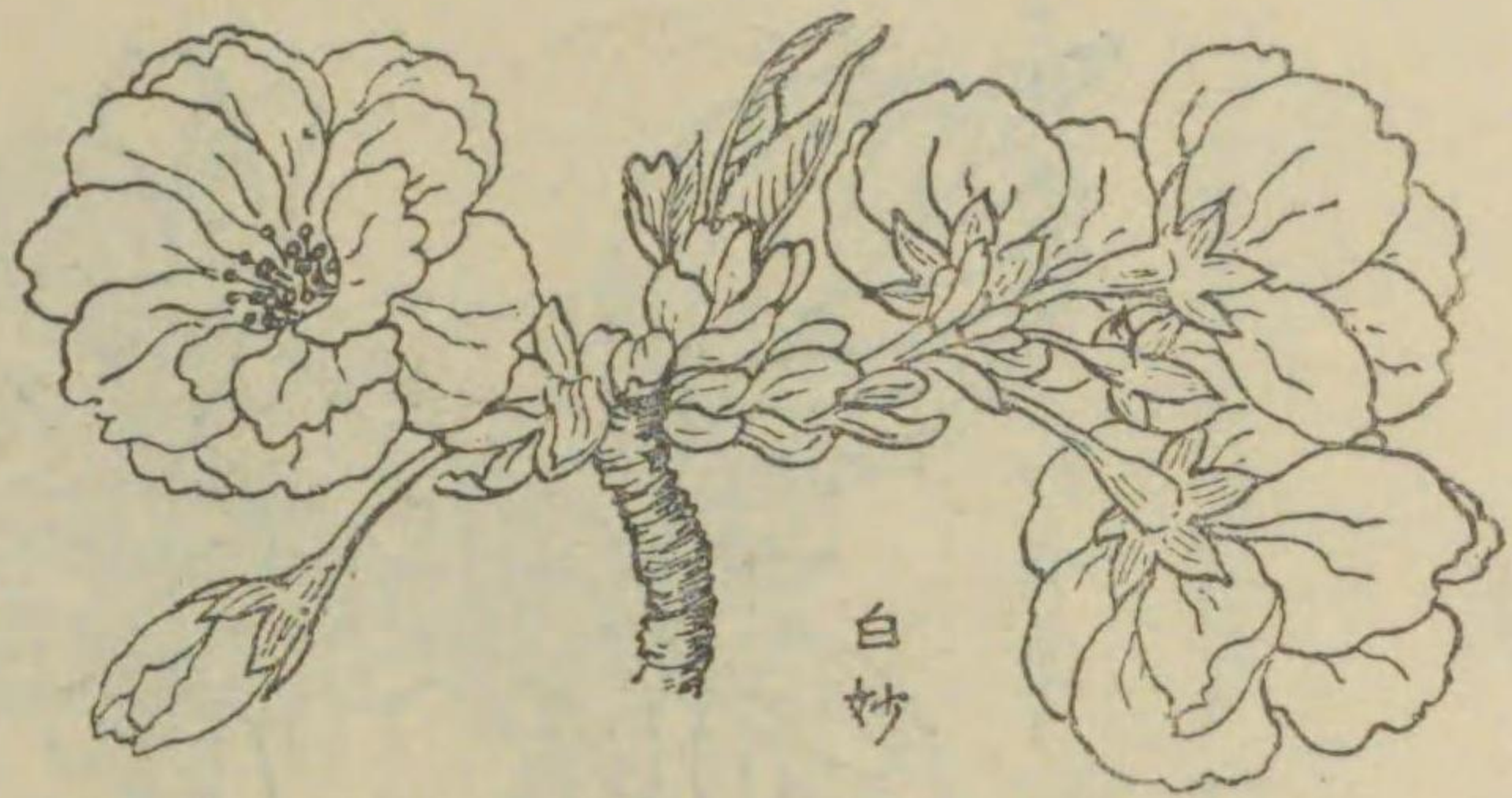
稍。大木、枝條擴り出づ。嫩葉淡綠色、葉片約一四・五×八・五仙米まで、葉先約三仙米、葉柄約三仙米、蜜腺一—三、葉苞約一四×八密米まで、二—五花の繖房花序、四花のものにては第一總軸約一・八仙米、第一花梗約三・五仙米、第二總軸約四密米、第二花梗約三仙米、第三總軸約一仙米、第三花梗約二・五仙米、第四總軸約二密米、第四花梗約二・五仙米、總長約六仙米まで、花苞約一三×八密米まで、小苞約七×三密米まで、花徑約五仙米、萼筒約七×三密米、萼齒約六×三密米、花瓣約一五、圓形、約二・五×二・五仙米、白色、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 白花大輪重ね薄し。

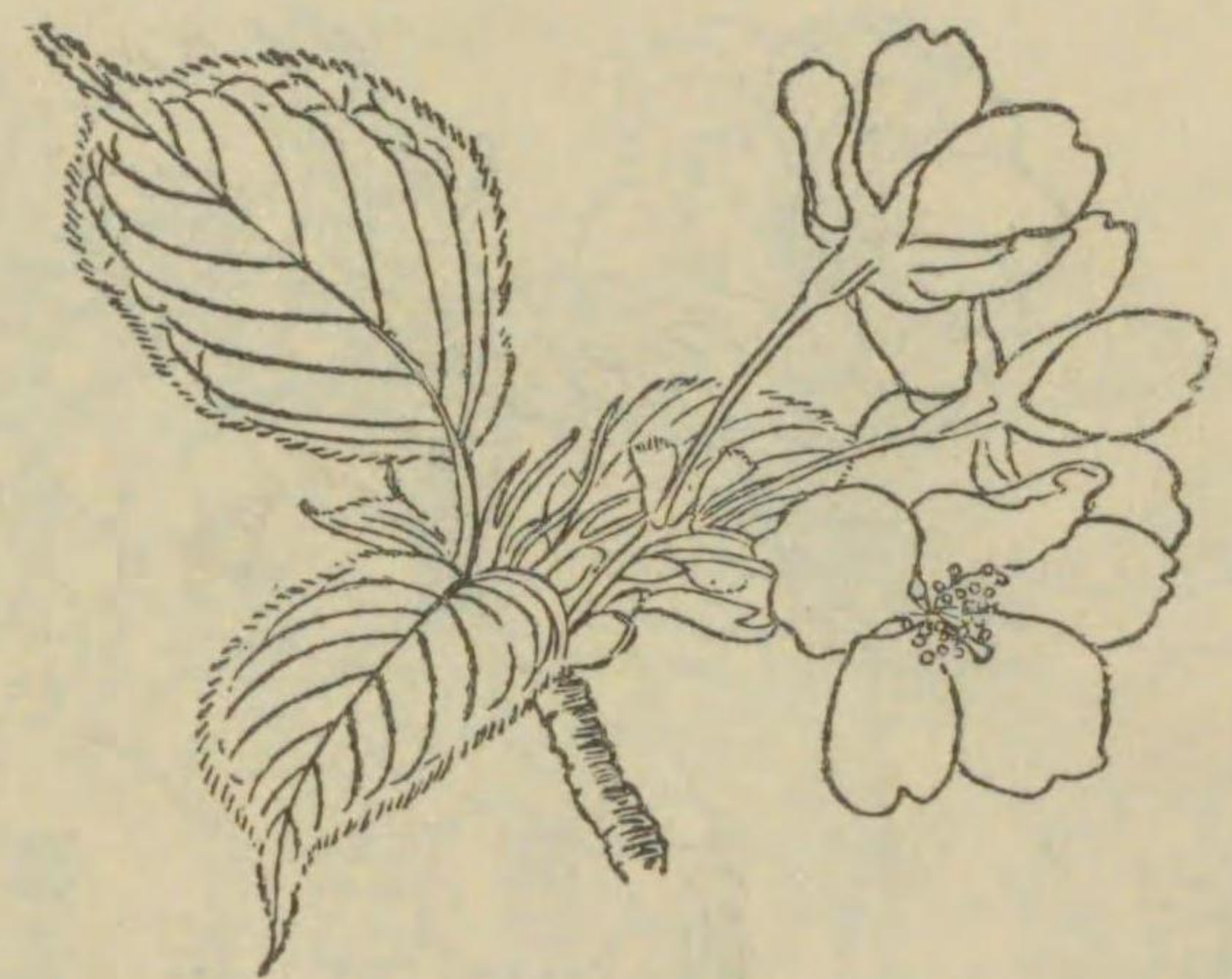
(櫻第一一號昭和四年)





青葉あをば

*Prunus serrulata* Lindl. f. *viridis* Miyos, in die japan. Bergkirnschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 89. 櫻花圖譜 一の五七



大木、枝條擴がり出づ、嫩葉綠色、葉片橢圓形、葉先銳尖、單鋸齒、蜜腺二、葉苞約一八×六仙米まで、二—四花の有柄偽繖花序、三花のものにては第一總軸約九密米、第一花梗約二・五仙米、第二總軸約一密米、第二花梗約二・三仙米、第三花梗約二・二仙米、總長約四仙米、花梗綠色、花苞綠色、約一四×六密米まで、小苞楔形、約七×五密米まで、萼綠色、萼筒約七×三密米、萼齒約五×三密米、花徑約三仙米、白色、周邊微紅を帶ぶ、花瓣五、往々旗瓣あり、約一・七×一・三仙米、先端不規則に多裂す、雌蕊は雄蕊と同長。

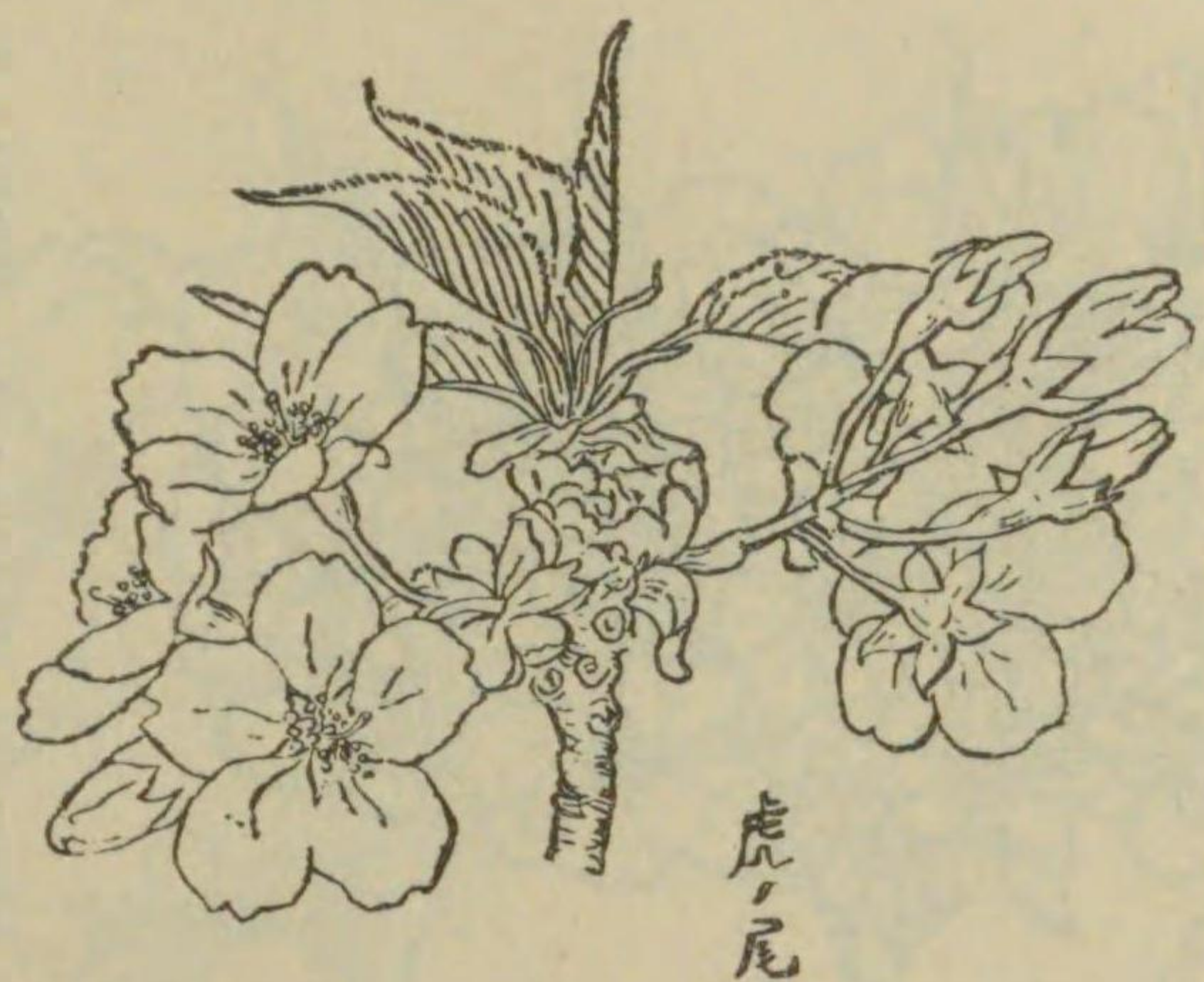
(所在) 東京小石川植物園

(花期) 四月中旬

(特徴) 嫩葉・花梗・萼皆綠色なり。

虎の尾とらのを

*Prunus serrulata* Lindl. f. *caudata* Miyos, in die japan. Bergkirnschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 91. 櫻花圖譜 一の六三



虎ノ尾

小木、枝條上方に屈曲す、嫩葉帶綠褐色、葉苞約一二×七密米まで、三—四花の偽繖花序、長き枝の先端に群がり着き尾狀を呈す、四花のものにては第一總軸五密米、第一花梗約一・八仙米、第二總軸約二密米、第二花梗約一・六仙米、第三花梗約一・五仙米、第四花梗約一・四仙米、總長約二・八仙米、花苞約一〇×四密米まで、小苞約八×五密米まで、萼筒約六×三密米、萼齒約六×三密米、花徑約四仙米、帶綠色、花瓣約二×二仙米、數枚の旗瓣あり、先端二裂す、雌蕊は雄蕊よりも短かし。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬より下旬に至る。

(特徴) 花時には葉未だ出でず、花は長き枝の先端に尾狀に着く。

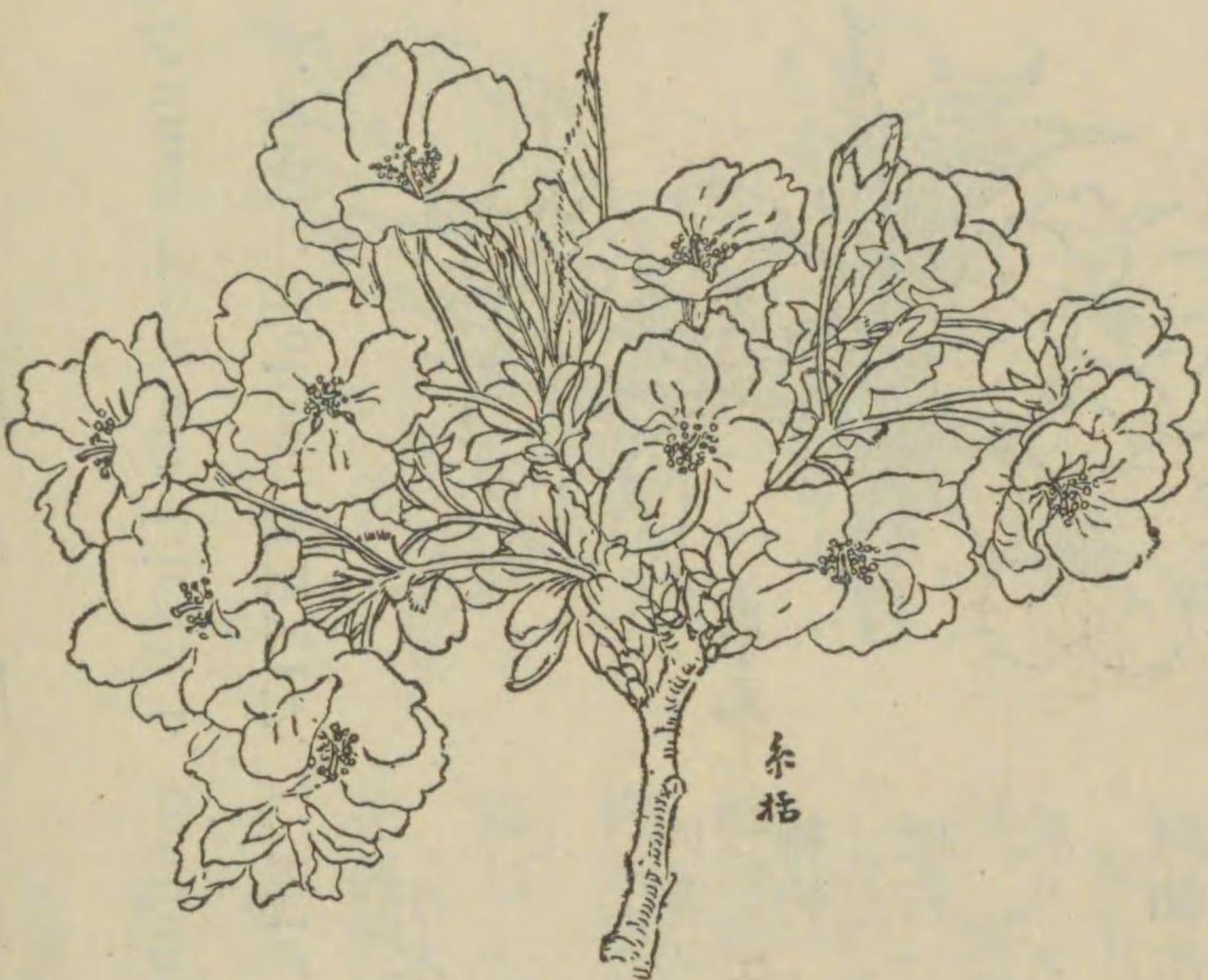


糸 拈 いとくくり

*Prunus serrulata* Lindl. f. *fasciculata* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei.

Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 118.

櫻花圖譜 二の一一七



六仙米まで、小苞約五×四密米まで、萼筒約六×四密米、萼齒約六×三密米、花徑約四・五仙米、

小木、幹の下方より長さ裸枝多く出づ、嫩葉黃褐色、葉片約一四×七・仙米まで、葉先約三仙米、單鋸齒、齒先鋭尖、葉柄約三・二仙米、蜜腺二或は無し、葉苞約一五×七密米まで、四―七花の短柄繖房花序、枝端に密束形をなして着く、七花のものにありては第一總軸約二・五仙米、第一花梗約二・五仙米、第二花梗約二・三仙米、第二總軸約三密米、第三花梗約二仙米、第四花梗約一・八仙米、第三總軸約三密米、第五花梗約一・四仙米、第六花梗一・三仙米、第七花梗約一・五仙米、總長約五・四仙米、花苞約一・四×

花形扁平、花瓣約一〇―一五まで、質厚し、約二×一・七仙米、先端二裂、花瓣の下部白色、上部淡紅色、蕾長圓錐形、先端紅色、雌蕊は最長雄蕊よりも稍、長し。

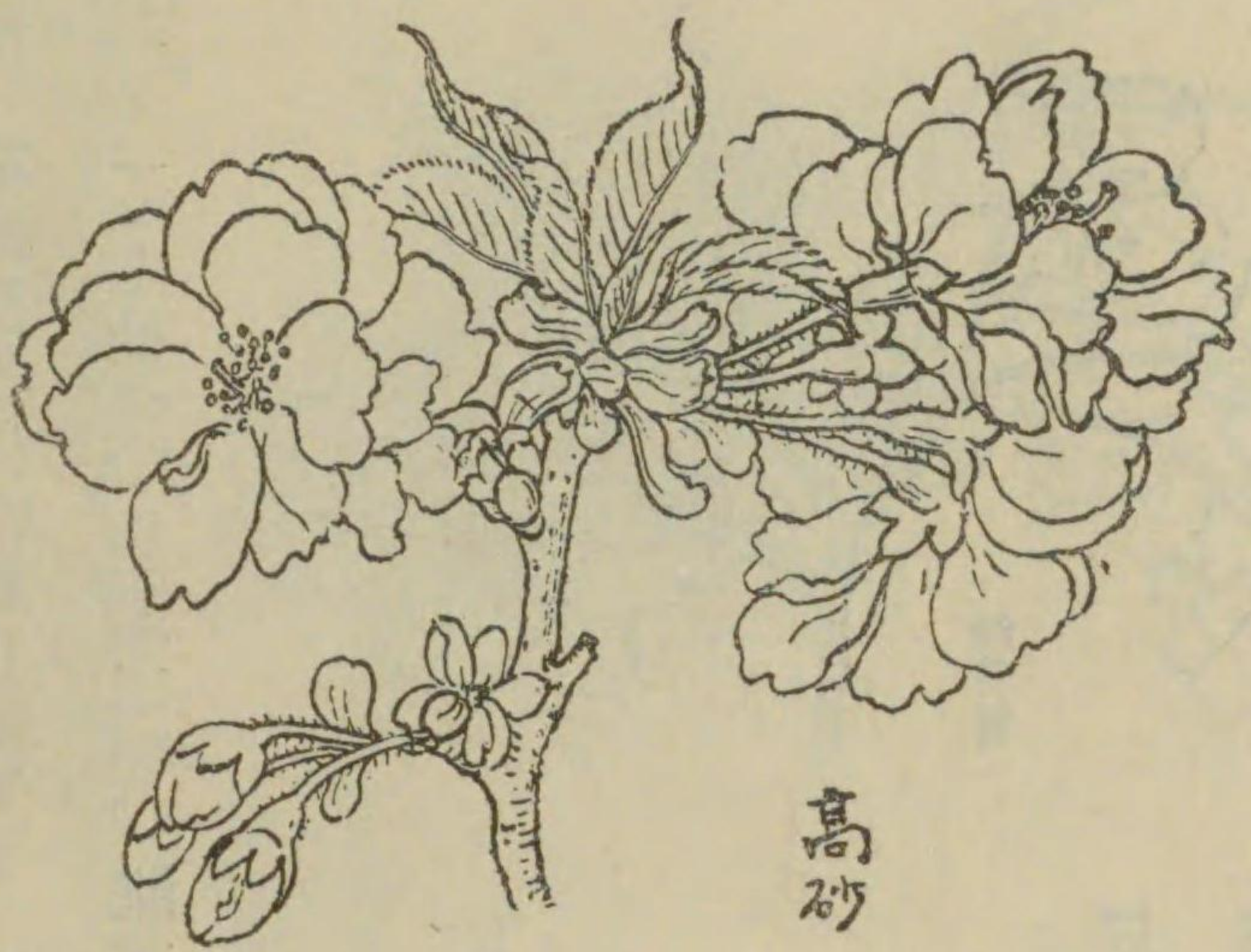
(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 花は長き裸枝の先端に密束狀に着く、故に糸拈の名を得たり。花時には葉殆んど出でず。

高 砂 たかさご

高砂



*Prunus serrulata* Lindl. f. *caespitosa* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo.

XXXIV. 1. 1916. p. 128. 櫻花圖譜 二の九八

稍、大木、枝群がり出づ、嫩葉紅褐色、葉片約一×七・五仙米、葉先約二仙米、單鋸齒、齒端尖らず、葉の裏面の葉脈に微毛あり、葉柄短かく、約一・五仙米、有毛、蜜腺一―二、或は無し、葉苞約一・六×七密米まで、二―四花(概ね三花)の偽繖花序、三花のものにては第一總軸約七密米、第一花梗約二・

二仙米、第二總軸約一密米、第二花梗約一・九仙米、第三總軸約三密米、第三花梗約一・八仙米、總



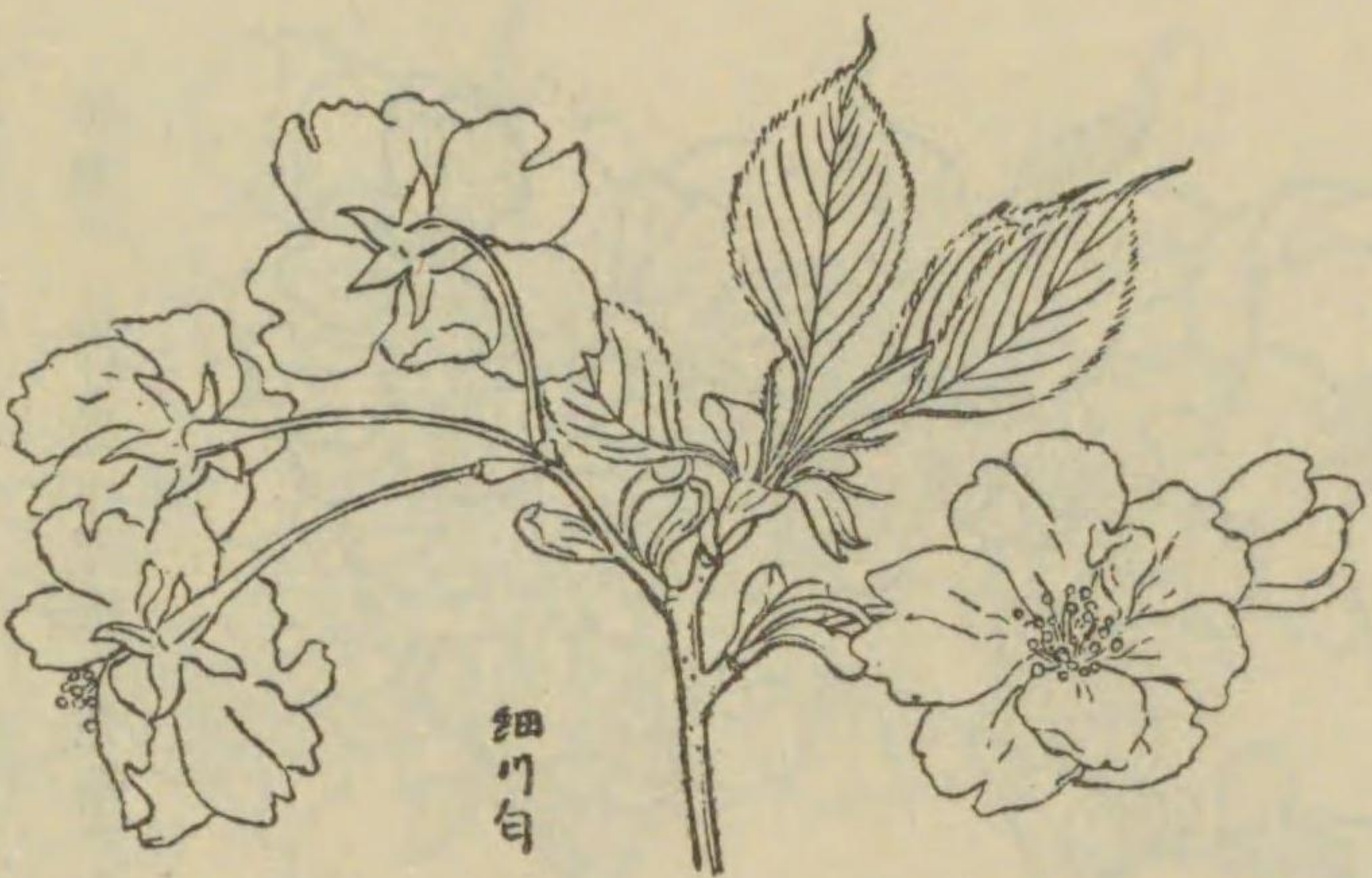
長約四仙米、花苞約一六×八密米まで、小苞約九×八密米まで、萼筒約八×四密米、萼齒約五×四密米、花梗及萼筒に細毛密生す、花徑約四・二仙米、花の外部は紅色、内部は淡紅色、花瓣約一三、約二×一・七仙米、先端二裂、雌蕊は最長雄蕊よりも稍、短かし。

(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 此櫻は明治四十四年四月十一日予が江北堤上に於て見出せるものにして、短花序、有毛葉脈及有毛花梗及有毛萼筒を特徴とす。

細川 匂 ほそかはにほひ



*Prunus serrulata* Lindl. f. *hosokawa-odora* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo. 1. 1916. p. 129. 櫻花圖譜 二の九九

稍、大木、枝條擴がり出づ、嫩葉淡黄褐色、幾何もなく綠色となる、葉片約八・五—五・五仙米まで、葉先約二・五仙米、單鋸齒、葉柄約二・五仙米、蜜腺二、葉苞帯紅、約二五×七密米まで、三—六花の長柄偽繖花序、花序中最下位の花梗は單獨着生、其他の花梗は殆ど一處に着く、五花のものにては第一總軸約三・三仙米、第一花梗約二・五仙米、第二總軸約一・

五密米、第二及第三花梗各、約一・八仙米、第四花梗約一・六仙米、第五花梗約一・四仙米、總長約七・五仙米、花苞約二〇×七密米まで、小苞約一〇×五密米まで、萼筒約一〇×四密米、萼齒約一〇×五密米、花梗及萼は綠色、花徑約五・三仙米、白色、香氣強し、花瓣約五—九、約二・五×二仙米、數枚の旗瓣あり、雄蕊約四五、雌蕊は最長雄蕊と同長。

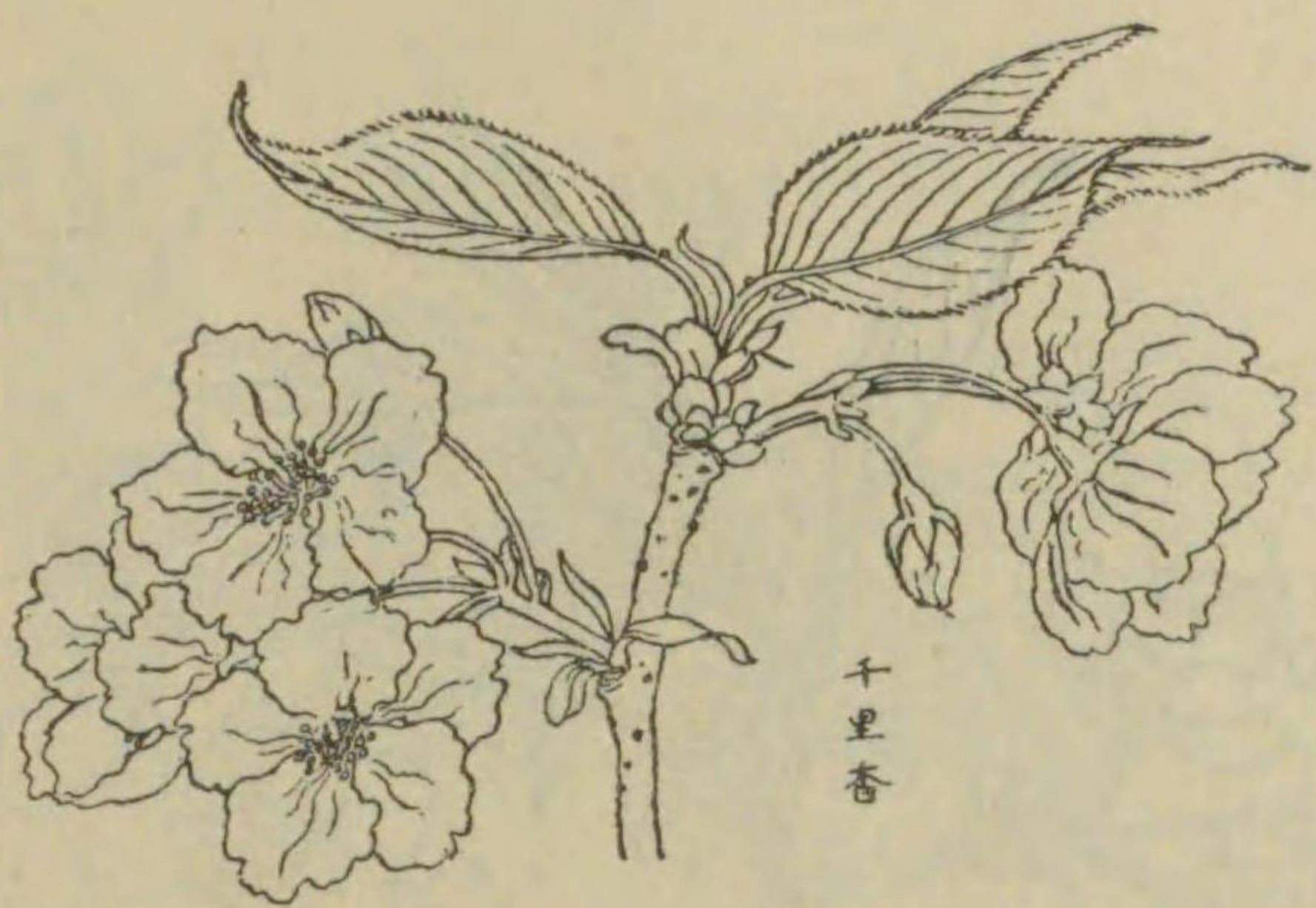
(所在) 江北

(花期) 四月中旬

(特徴) 匂櫻なり。大島櫻より培養によりて變化せるものと認めらる。花序の長くなれる外凡べて大島櫻の特徴と一致す。

(櫻第一二號昭和五年)

千里 香 せんりかう



*Prunus serrulata* Lindl. f. *pieta* Miyos. in die japan. Bergkir-sehen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 130. 櫻花圖譜 二の1011

小木、枝淡灰色、嫩葉褐綠色、葉片約一・六×九・六仙米まで、葉先銳尖、葉柄約一二仙米、蜜腺一—二、葉苞約一五×五密米まで、三—六花の繖房花序、時としては殆ど總狀花序をなす。四花のものにては第一總軸約一・四仙米、第一花梗約三・三仙米、第二總軸約五密米、第二花梗約三仙米、



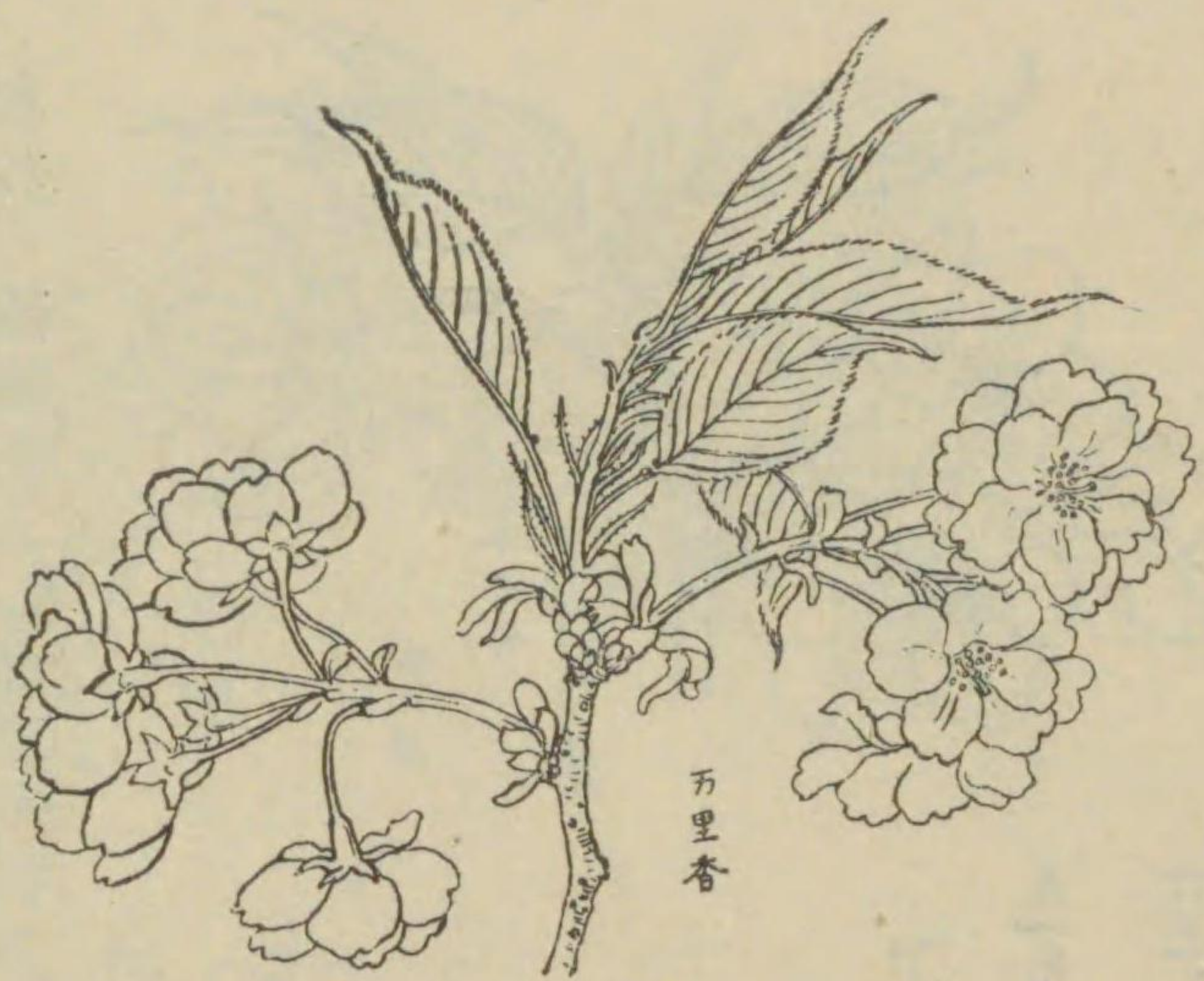
第三花梗約二・八仙米、第四花梗約二・七仙米、總長約六・五仙米まで、花苞約一五×八密米まで、小苞約七×六密米まで、萼筒約七×四密米、萼齒約七×四密米、花徑約四・五仙米、芳香あり、花瓣約五―七、幅廣く、約二・二―二・二、白色、上端帯紅色、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 匂櫻、花瓣は皺狀を呈す。

萬里香 ばんりかう



*Prunus serrulata* Lindl. f. *excelsa* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 131. 櫻花圖譜 二の一〇一

小木、枝暗褐色、嫩葉褐綠、葉片約一一・五×八仙米まで、葉柄約二仙米、蜜腺一―二、葉苞赤色、約一二×四密米、三―六花の繖房花序、六花のものにては第一總軸約二・四仙米、第一花梗約三仙米、第二花梗約二・八仙米、第二總軸約八密米、第三花梗約二・二仙米、第四花梗約二仙米、第五花梗約一・五仙米、第六花梗約二・八仙米、總長約六・三仙米まで、花苞赤色、約一〇×三密米まで、小苞約五×三密米まで、

萼筒約五×三密米、萼齒約六×三密米、花徑約四仙米、芳香あり、純白、花瓣約一五、幅廣く、約一・二×一・五仙米、先端二裂、雌蕊は最長雄蕊よりも長し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

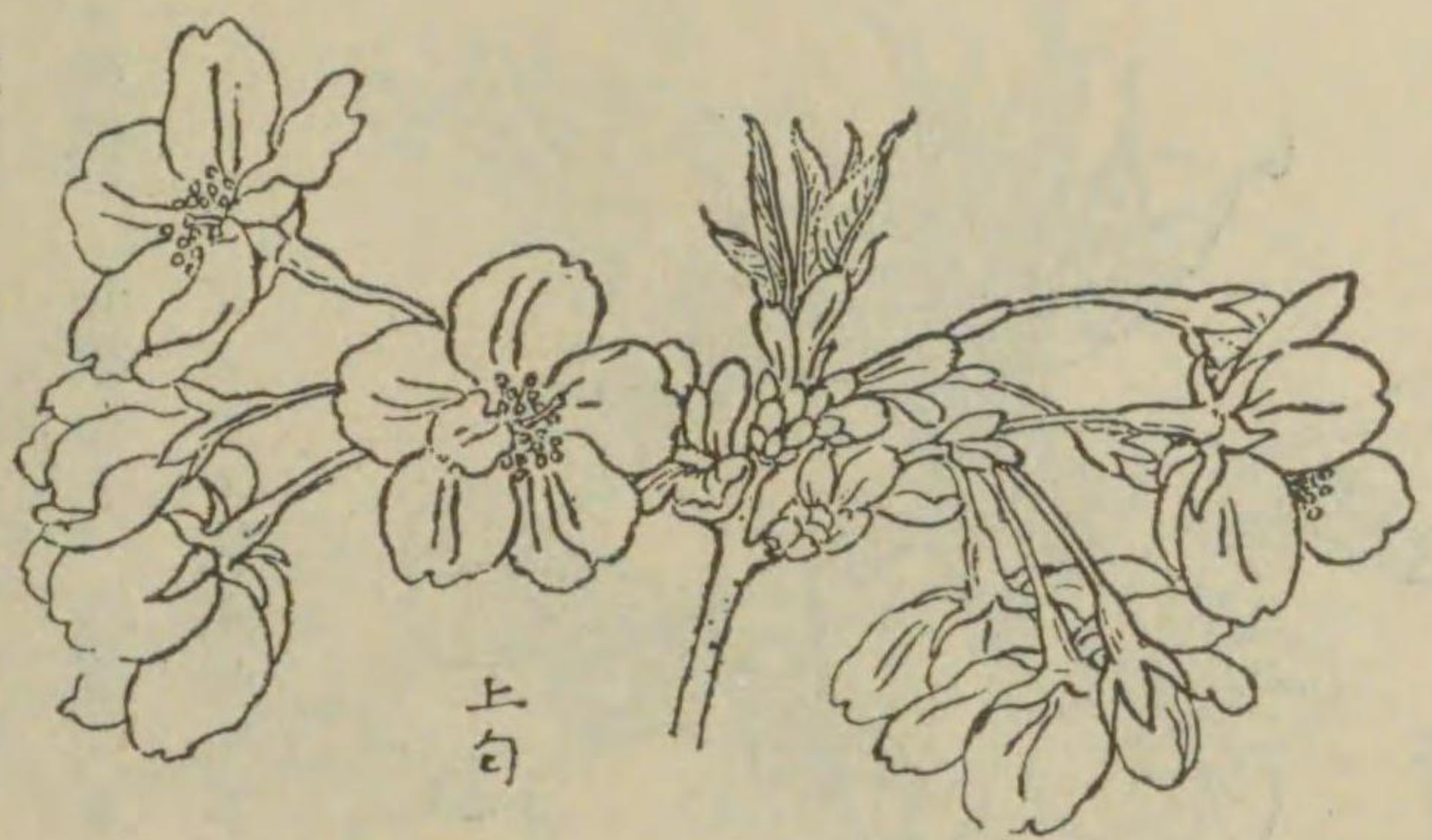
(特徴) 匂櫻、多數の重瓣、白花を着く。

上 匂 じやうにほひ

*Prunus serrulata* Lindl. f. *affinis* Miyos. in die japan. Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1. 1916. p. 134.

櫻花圖譜 二の一〇〇

稍、大木、枝條上方に向ふ、嫩葉黃褐、葉片約一一×六・五仙米、葉先約三仙米、葉柄約三仙米、蜜腺約二―三、葉苞約一五×六密米、三―五花の有柄繖房花序又は偽繖花序、四花のものにては、總軸約一・五仙米、第一及第二花梗各、約二・五仙米、第三花梗約二・七仙米、第四花梗約二・六仙米、總長約六・七仙米まで、花梗太く、直立、花苞約一四×九密米、小苞約五×四密米、萼筒約七×四密米、萼齒約六×四仙米、花徑約三・五仙米、芳香あり、白色、花瓣五、旗瓣





あり、約一・七×一・五仙米、先端二裂、蕾淡紅、雌蕊は最長雄蕊よりも稍、短し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 匂櫻なり。花梗太きにより花は上向す。花形は瀧匂に似たれども、花梗の太きと、短柄繖房花序を成せるもの多きとによりて區別せらる。

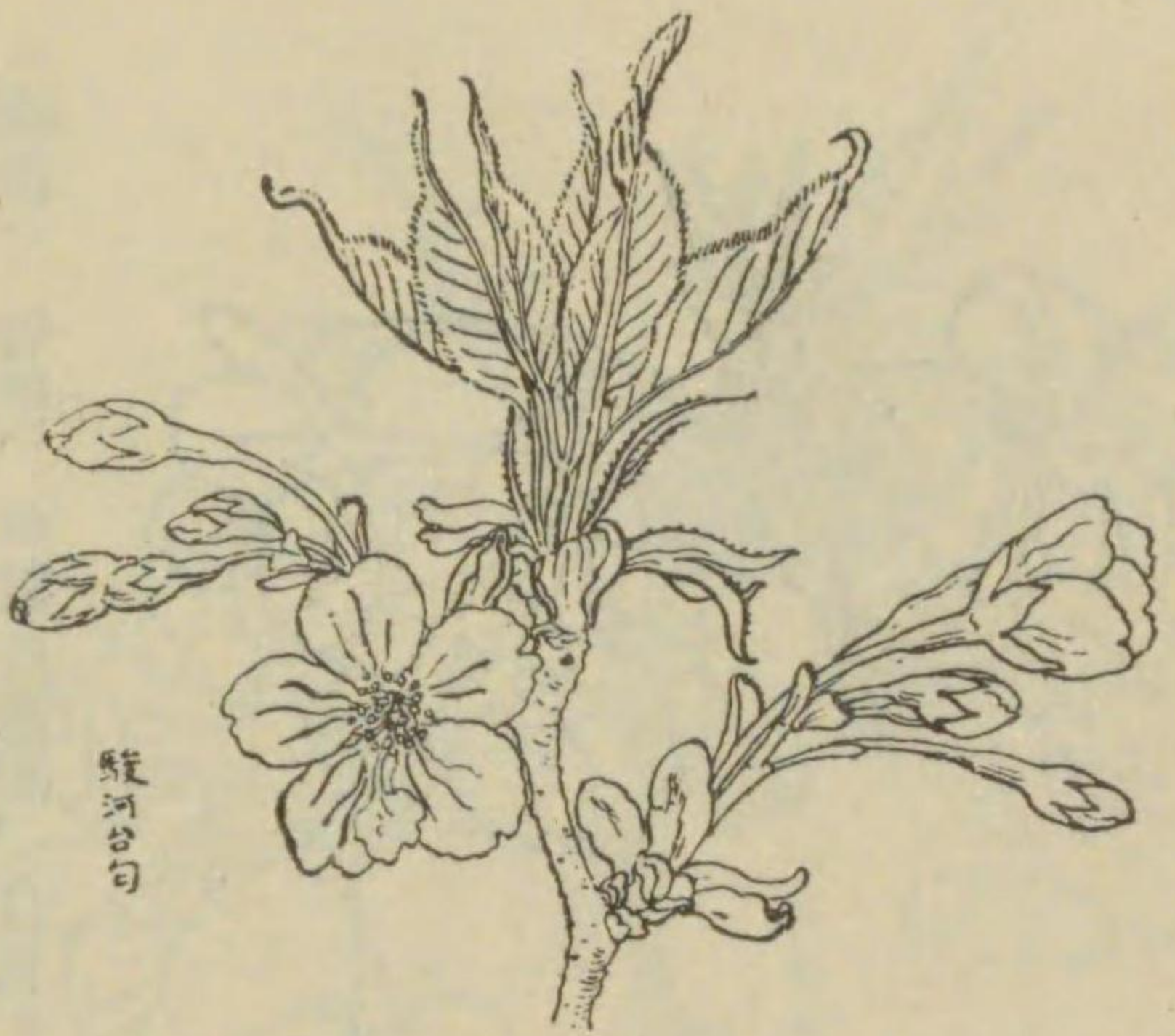
駿河臺匂 するがだいにほひ

*Prunus serrulata* Lindl. f. *surugadai-odora* Miyos. in die japan.

Bergkirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV.

1. 1916. p. 132. 櫻花圖譜 一一〇一〇三

稍、大木、枝條多少上向す。嫩葉褐色、葉片約一〇・五×六・五仙米、葉先約三仙米、葉柄約三・五仙米、蜜腺二―五、葉苞赤褐色、約二×一仙米まで、三―五花の有柄繖房花序、四花のものに



ては、第一總軸約一・八仙米、第一花梗約三仙米、第二總軸約二密米、第二花梗約二・八仙米、第三總軸約一密米、第三花梗約二・六仙米、第四花梗約二・五仙米、總長約六・五仙米まで、葉苞大、約一八×八密米まで、小苞約九×七密米まで、萼筒約七×四密米、萼齒約六×五密米、花徑約四仙米、

芳香あり、白色、花瓣五、往々旗瓣あり、約一・七×一・二仙米、先端二裂乃至多裂、雌蕊は最長雄

蕊よりも稍、短し。

(所在) 江北

(花期) 四月下旬

(特徴) 匂櫻なり。本品種は江戸駿河臺の或る庭園に生ぜるによりて此名を得たり。花瓣狭く、中肋に沿うて皺あり。

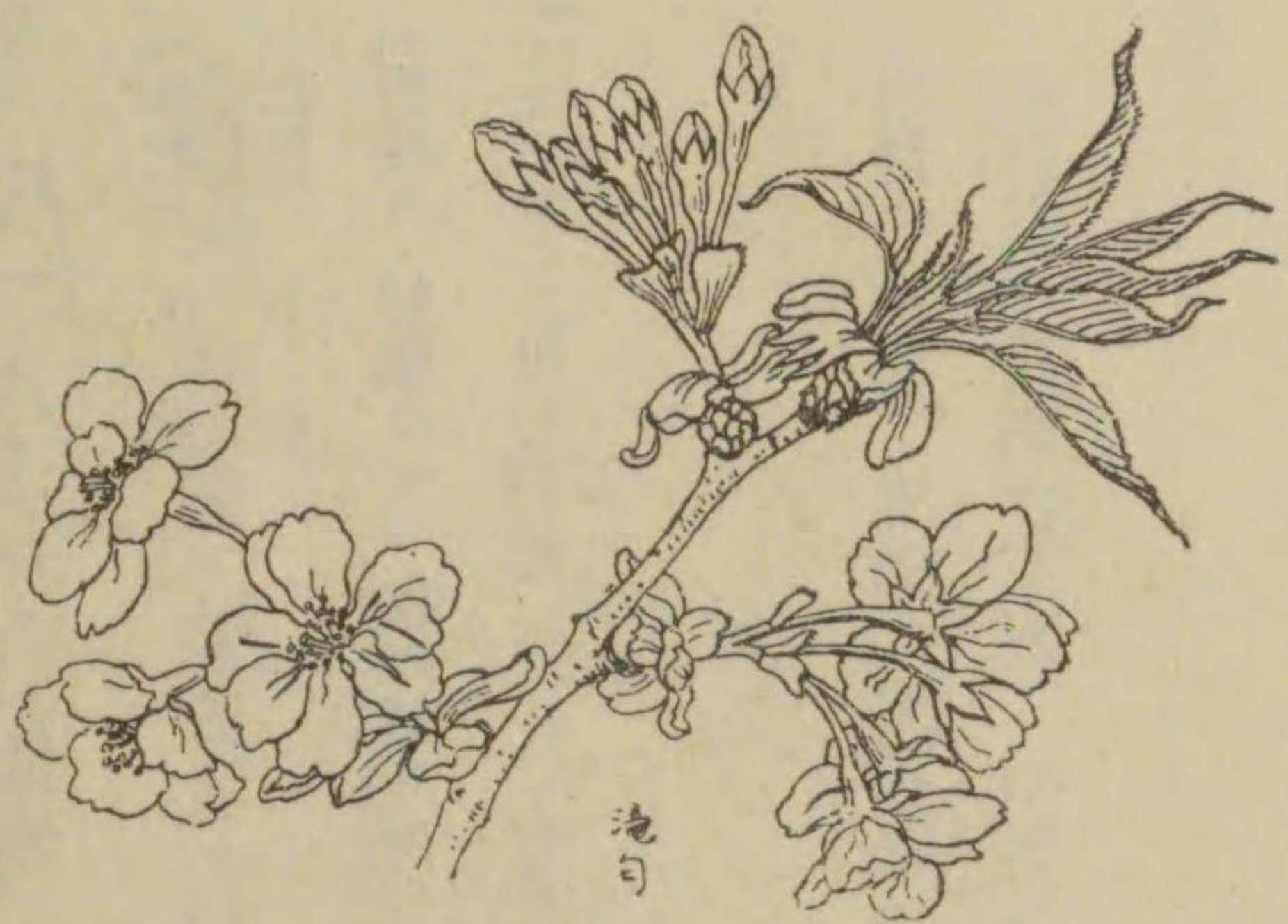
瀧 匂 たきにほひ

*Prunus serrulata* Lindl. f. *Cataracta* Miyos. in die japan. Berg-

kirschen etc. Journ. Coll. Sei. Imp. Univ. Tokyo. XXXIV. 1.

1916. p. 123. 櫻花圖譜 一一〇一〇四

稍、大木、枝條横に擴がる。嫩葉褐赤色、葉片約一〇・五×七・五仙米まで、葉先約三仙米、葉柄約三仙米、蜜腺二―三、三―六花の繖房花序、五花のものにては第一總軸約二・五仙米、第一花梗約三仙米、第二總軸約六密米、第三總軸約一・七仙米、第三、第四及第五花梗各、約二仙米、總長約七仙米まで、花苞約一六×七密米まで、小苞約六×四密米まで、萼筒





約六×四密米、萼齒約六×四密米、花徑約三・五仙米、芳香あり、白色、花瓣約五―七、往々旗瓣あり、約一・八―一・二仙米、先端二裂、雌蕊は最長雄蕊よりも短し。

(所在) 江北

(花期) 下旬

(特徴) 匂櫻なり。枝の擴り出づるによりて駿河臺匂と區別せらる。現に東京に屢々見る所の櫻なり。

(櫻第一三號昭和六年)

# 附 録

## 櫻に關する引用自著論文圖譜目錄終

### 品 種

Die japanischen Bergkirschen, ihre Wildformen und Kulturassen. Ein Beitrag zur Formenlehre. (東京帝國大學紀要、理科第三四冊第一編大正五年)

山櫻殊に里櫻の來歴、山櫻の分類學的文獻、山櫻の學名問題、山櫻の種及天然品種、里櫻の品種、培養試驗、里櫻の畸態、里櫻の保存等に涉りて論述せるものにして、二十三圖版の中、山櫻及里櫻の寫生圖は着色石版なり。

Untersuchungen über japanische Kirschen. I, II, III.

(植物學雜誌第二四卷第一五〇頁大正九年・第三四卷第一頁大正十一年・第四二卷第五四五頁昭和三年)

彼岸櫻・枝垂櫻・曙彼岸・偽彼岸・山櫻・里櫻・四季櫻・冬櫻等の種及品種六十五の記載なり。

Die Variabilität von Prunus Puddum Roxb. und seine Unterscheidungsmerkmale von Prunus campanulata Maxim. (東京帝國大學紀要、理科第二八冊第一編明治四十年)



明治四十年著者が印度ダージリンへ赴けるとき、ヒマラヤ山中に生ぜる ひまらやざくらに就て觀察し、更に其標品によりて検せる花部の形態的特徴上、臺灣に自生する緋寒櫻と全然異なる點を擧げたるものなり。

Der Riesenkirschbaum von Ishido.

(植物學雜誌第二九卷第三二頁大正五年)

埼玉縣石戸の蒲櫻の記述なり。

Notes on some rare or remarkable plants.

(帝國學士院紀事第三卷第一頁昭和二年)

天然紀念物として指定せられたる梅護寺珠數掛櫻と磯良神社のいぼざくらとの記載あり。

Über einige merkwürdige Pflanzen.

(帝國學士院紀事第一〇卷第四二四頁昭和九年)

三隅太平櫻と金龍櫻との記載なり。

Über zwei merkwürdige Kirschen.

(帝國學士院紀事第一二卷第二六一頁昭和十一年)

天然紀念物として指定せられたる金剛櫻と白山旗櫻との記載なり。

荒川堤の櫻

(東京府名勝天然紀念物調査報告第八冊東京府昭和六年)

荒川堤上へ櫻樹栽植の頭末、櫻品の來歴、櫻品の記載、櫻樹の保護、荒川の櫻の主なる分植地、荒川の櫻に関する文獻に就て記述せるものにして、堤上栽植地圖、櫻の寫生圖、櫻の並木の景觀圖を載せたり。

生理 生態

On fragrant cherries

(櫻第八號大正十五年)

里櫻の中の匂櫻として著しき品種を擧げ、其生態及匂の強度の増進に就て略記したるものなり。

Some remarkable instances of improvement of flower characters in cultivated cherries.

(植物學雜誌第四一卷第一二三頁昭和二年)

小石川植物園内の實驗園に栽培したる小汐山の實生より小汐山匂と稱する帶紅色の匂櫻の出でたること。又一重の紫櫻の實生より八重紫櫻の現れたることに就き、櫻の花性向上の著例として述べたるものなり。

Einfluss der niederen Temperaturen auf die Lebensdauer der Kirschblüten.

(帝國學士院紀事第四卷第五四二頁昭和三年)

低溫度に於ける櫻花の生活期限の延長に關し、山櫻・彼岸櫻・緋寒櫻等に就ての實驗の結果を述べたるものにして、彼岸櫻にては一ヶ月も長く開花の状態を續けたるを見たり。凡べて是等の試験材料にては離層の形成なく、其花瓣の延伸生長は極めて微弱なるを認めたり。

Heteropetalie bei einer Bergkirsche.

(帝國學士院紀事第九卷第三三七頁昭和十年)



小金井の千種櫻に於ける花瓣の多形に就ての記載なり。

Über den Einfluss der äussern Faktoren auf die Grösse und Farbe der Kirschblüten.

(植物學雜誌第五一卷第二〇一頁昭和十二年)

一株の白山櫻の天然状態に於て開花せるものと、同一株の櫻の室内に齎せる切枝に開花せるものとは、花の大小並に色の差別あるを認め、其原因が外圍の影響殊に日光の強度の差異にあることを論ぜるものなり。

總 說

Sakura, Japanese Cherry.

(Tourist Library 3. 昭和九年、再版同十年)

櫻の培養の來歴、櫻の種類、櫻の花性の向上、櫻の名所、櫻花の見方、櫻の巨樹、櫻の名木、櫻の植方、櫻の保存、櫻の利用に就て述べたるものにして、冊子の終に全國に於ける櫻の主なる名所、巨樹、名木の位置を示す地圖と櫻の花曆とを附けたり。多數の寫真と一枚の着色圖を添ふ。國際觀光局發行にかゝる。

圖 譜

櫻花圖譜

(京都市芸艸堂大正十年)

着色木版の櫻花寫生圖にして、第一帖には彼岸櫻・枝垂櫻・十月櫻・緋寒櫻・蒲櫻・勝手櫻・染井吉野・白山

櫻・紅山櫻・里櫻七十一圖を載せ、第二帖には里櫻其他の櫻四十七圖を載せたるものなり。一々の櫻品の解説は別著「櫻花概説」にあり。

櫻花概説

(京都市芸艸堂大正十年)

櫻の種類と櫻の名所、櫻の略史、普通の櫻の三篇に分ち、附録として「増補櫻に関する圖書解題略」を載せたり。卷首に櫻の品種名木名所の寫真又櫻に関する文献墨跡の寫真等總計三十枚を附せり。前記の「櫻花圖譜」の解説となせるものなり。

小金井櫻花圖説

第一輯(昭和二年)・第二輯(昭和三年) 東京市

第一輯には小金井の櫻の中、富士見櫻より墨染匂までの十四品種、第二輯には鍾馗櫻より朝日櫻までの十五品種の記載と寫生圖とを載せたり。

櫻 終



細川 旬…………… 456  
牡丹 櫻…………… 436  
堀 良 山…………… 15, 319  
まくらの山…………… 130  
増田繁亭(金太)…………… 392  
松岡 恕庵…………… 12, 53, 141  
三熊花 顔…………… 12, 141, 269  
(櫻花帖)388, (飛驒入り)  
…………… 419  
三熊露 香…12, (櫻畫)267, 339, 374,  
(櫻華藪)376  
御 車 返…………… 106, (記載)427  
三春瀧 櫻…………… 179  
宮崎玉 緒…………… 44  
三好 汝 圭…………… 325  
紫 櫻…………… 96, 437  
名 月…………… 444  
本居宣 長…………… 76, 116, 136, 270  
八重 曙…………… 431  
八重 櫻…………… (古代の)4, 43  
八重紅 枝垂…………… 94  
屋代弘 賢…………… 14, 224, 335  
山 櫻…………… (分布)22, (特徴)25,  
(植方)49, (總説)111, 135  
楊 貴 妃…………… 436  
浴恩園の 櫻…………… 368  
芳野花 樹懷紙…………… 130  
吉 野 山…………… 46, (總説)157, 207  
吉野夢 見草…………… 410-413  
六々 櫻 譜…………… 404  
倭花名 品…………… 347, 381

櫻

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 櫻, 花, 名, 品, etc.）



金龍櫻……………184  
久保櫻顛(帶刀)……………44, 56, 388  
雲井の櫻……………158  
車返……………427  
黒澤翁滿……………116  
畔田伴存……………416-418  
群櫻花譜……………399  
下馬櫻……………36  
玄同放言……………62  
甲州の神代櫻……………36, 80  
弘治節用集……………139  
江北櫻譜……………353  
小金井……………48, 55, (櫻の品  
種)88, 131, 152, 210, 414,  
小金井觀花圖卷……………474  
小菊櫻……………95  
國立公園地内の櫻……………239  
九重……………435  
古今要覽稿……………14, 329  
五所櫻……………426  
小堀遠州……………76  
金剛櫻……………205  
坂本浩然……………15  
櫻井雪鮮……………309  
櫻井勉……………302  
櫻川……………48, 90, 114, 206  
櫻川匂……………96  
櫻の花弁の生長……………245  
櫻の畸態……………261  
櫻の向上性……………65, 121, (總説)263  
櫻の樹齡……………248  
櫻の花の生活期限……………242  
櫻の文獻……………421

櫻町中納言……………5, 134  
左近の櫻……………174  
薩摩緋櫻……………97  
里櫻……………(由來)7,  
(命名)23, (特徴)27,  
(植方)50, (特徴)68,  
(品種)91, (總説)139  
三十六櫻品……………354  
三波川の櫻……………189  
四季櫻……………255  
枝垂櫻……………(植方)50,  
(特徴)69, (總説)144  
指定された櫻……………228  
清水謙吾……………49, 287  
姦譜……………15, 319  
十月櫻……………252  
十六日櫻……………98, 253  
秋色櫻……………61  
正月櫻……………98  
松月……………106, (記載)432  
猩々……………97  
上匂……………459  
庶物類纂……………14  
白河樂翁……………13, 56, 368  
白雪櫻(發見)295, (記載)447  
白菊櫻……………95  
白子不斷櫻……………99, 112, 219, 254  
白妙……………450  
白山櫻40, (特徴)65, (總説)111  
神代櫻……………(山高)125, 248,  
(素櫻神社)191  
末吉勘兵衛……………131  
菅原桃花園……………77

珠數掛櫻……………95  
墨染……………442  
駿河臺匂……………460  
千里香……………457  
草木奇品家雅見……………394  
草木寫生圖……………334  
染井吉野(來歴)24, 41, (植方)50,  
(特徴)70, (總説)146  
泰山府君……………98, 226  
太申櫻記……………407  
高木孫右衛門……………18, 58, 287  
高砂……………295, (記載)455  
瀧匂……………461  
武田信賢……………282  
チェリー……………81  
千島櫻……………71  
長者ヶ丸櫻園……………388  
長者ヶ丸櫻譜……………56, (解題)336  
長州緋櫻……………105  
勅銘の櫻……………373  
地主櫻……………362  
榴ヶ岡の櫻……………193  
手毬……………94  
東京の櫻……………165  
戸川殘花……………274  
徳川頼倫……………277  
虎の尾……………94, 453  
中村秋香……………283  
名島櫻……………95  
南天……………440  
奈良八重櫻……………217  
名和靖……………280  
匂櫻, 香櫻……………97, 107 (總説)258

匂山櫻……………136  
西野猪久馬……………303  
二度櫻……………100, 220  
根尾谷淡墨櫻……………182  
梅護寺珠數掛櫻……………176  
白山旗櫻……………198  
旗櫻……………448  
八田知紀……………160  
はなのかゝみ……………369  
林春齋……………408  
萬象寫真圖譜……………61, 322  
萬里香……………458  
緋寒櫻……………70, 96, 254  
彼岸櫻……………(植方)50,  
(特徴)69, (總説)144  
日暮……………96, 433  
日の出の櫻……………88  
ヒマラヤ櫻……………31, 38, 117, 138  
鶉櫻……………96  
廣瀬花隱……………12, 353, 355, 393  
福祿壽……………434  
普賢象……………(來歴)8, (特徴)106  
富士櫻……………70, 238  
不斷櫻……………99  
船津靜作……………286  
冬咲の櫻……………251  
冬櫻……………190, 252  
紅虎の尾……………94  
紅山櫻……………40, (箒櫻)67, 115  
箒櫻……………97  
芳山花枝折……………157  
豊太閣の吉野觀花……………6, 130  
法輪寺……………(由來)9, (記載)445



索引

青葉	452	櫻花帖	305, (解題)338
曉鐘成	157	櫻花圖	224
曙櫻	225	櫻記	418
淺黃櫻	96	王昭君	449
天の川	97, (記載)446	大提燈	425
荒川	211, (總說)286	大戸の櫻	112
嵐山	208	櫻品	12, 53, 141
有馬譽純	132, 413	櫻品圖扇	267
伊佐澤久保櫻	194	岡本花亭	271, 137
石倉翠葉	48, 114	小澤華岳	409
石戸の蒲櫻	35, 62	押花集	356
市橋星峰	13, 304	織田瑟々	12
市橋長昭	304	御室	214
一葉	109	花隱櫻譜	353
早晚山	441	歌仙櫻	10
糸括	94, (記載)154	加納諸平	146
稻生若水	12	花譜	13, 304, (喜藏院)382
伊保櫻	227	霞間ヶ谷	167
鬱金櫻	96	狩宿の下馬櫻	112, 194, 240, 248
碓井小三郎	285	關山	106
薄寒櫻	253	元日櫻	97
薄墨	443	管春錄	408
渦櫻	95, (記載)438	祇園の枝垂櫻	203
雲水(僧)	410-413	菊咲山櫻	93
江戸	429	菊櫻	95
遠藤櫻	94, 256	菊枝垂	98, 257
遠藤庸治	256	祇女	106, (記載)430
櫻花記	416	御衣黃	96, 107
櫻花三百首	130	京都名所櫻花帖	409
櫻華藪	376	玉蘭齋貞秀	61

昭和十三年四月五日印刷  
昭和十三年四月十五日發行

『櫻』 定價參圓八拾錢

著者 三好學

發行所 富山房  
東京市神田區神保町一丁目三番地

右代表者 坂本嘉治馬  
富山房社長

印刷者 島連太郎  
東京市神田區美土代町十六番地



發行所 富山房  
東京市神田區神保町一丁目

振替東京五〇一  
電話神田(25)二二七七八番



82 76

三好博士姉妹書

最新實驗植物學

定價五圓

料送  
領內六三三

菊  
七〇

最新植物學 全三卷

定價各卷  
九圓

料送  
領內四三三  
領各七五

四六倍  
二五五〇

天然紀念物解說

定價四圓

料送  
領內六三三

菊  
五〇

富山房發行



